

第一號

入學證 用紙半紙

府縣族籍

誰長二男女弟妹

氏

年

齡

右ハ此度御校へ入學爲致候上ハ御規則堅ク可爲相守候也

年月日

府縣郡區町村番地 寄留人ナラハ其町村番地
ヲモ記入スヘシ
族 籍

氏

名印

何々小學校御中

第二號

卒業退校届

府縣族籍

誰長二男女弟妹

氏

年

齡

右ハ何々小學校卒業候ニ付退校爲致候間此段御届申候也

年月日

府縣郡町村番地 寄留人ナラハ其町村番地
ヲ記スヘシ
族 籍

氏

名印

何々小學校御中

○茨城縣乙第十二號 (明治十九年十一月十一日)

郡 役 所
戶 長 役 場
小 學 校

小學校職員月俸支給規則左ノ通相定ム

○小學校職員月俸支給規則

第一條 小學校長教員ノ俸給ハ毎月廿六日支給スルモノトス但シ休日ニ當ルハ順次繰上トス

第二條 新任ノ者ハ實務ニ就キタル當日ヨリ俸給ヲ支給スルモノトス

第三條 轉校ヲ命セラレタル者ハ事務引渡済迄ハ前校ニ於テ之ヲ支給スルモノトス

第四條 前條新任轉校及ヒ免職等ノモノニシテ在勤日數一ヶ月ニ滿タサルハ日割

- ヲ以テ支給スルモノトス
- 第五條 歸省スル者十五日間以後ハ俸給日割ノ三分一ヲ欠勤日數ニ乘シ支給シ三十日以上ニ超ルトキハ一切給セサルモノトス
- 第六條 病氣欠勤スル者三十日以後ハ俸給日割ノ三分一ヲ欠勤日數ニ乘シ支給シ六十日以上ニ涉ルトキハ一切給セサルモノトス
- 第七條 歸省中發病シ續テ療養スルモノハ前後ノ日數ヲ通算シ二十日以後ハ俸給日割ノ三分一ヲ欠勤日數ニ乘シ支給シ六十日ヲ超ヘレハ一切給セサルヘシ
- 第八條 忌引中ハ月給全額ヲ給スヘシ但シ父母墓參ノ爲メ歸省ヲ乞フ者モ其忌引日數中ハ之ヲ減スルコトナシ
- 第九條 犯罪嫌疑ノ廉ヲ以テ拘引セラレ、者及ヒ私事訴訟ノ原告人又ハ引合人トナリ出校セサルキハ其日數ヲ算シテ之ヲ給セサルヘシ

○同上職員旅費規則

○茨城縣令乙第十三號 (明治十九年十二月十一日)

郡 役 所
戶 長 役 場
小 學 校

小學校職員旅費支給規則左之通相定ム

廿年第
三號
改正ノ
面

- 小學校職員旅費支給規則
- 第一條 小學校職員ノ旅費ハ管内外ニ區別シ別表定ムル處ニ從ヒ順路ノ路程ニ依リ瀛車賃瀛船賃車馬賃及日當ヲ支給スルモノトス
- 第二條 瀛車賃ハ里數瀛船賃ハ海里數車馬賃ハ陸路ノ里數日當ハ休宿泊及其他ノ諸賃ニ充ツル爲メ日數ニ應ジ支給スルモノトス
- 第三條 瀛車瀛船及ヒ車馬賃ハ其種類毎ニ經過セシ路程ノ總數ヲ合算シテ之ヲ支給スヘシ但シ一里未滿ノ端數ハ計算セサルモノトス
- 第四條 管外旅行ノ爲メ管内ヲ通過スルトキハ其路程ハ管外ニ準シ又管内旅行ノ際便宜ニ依リ管外ヲ通過スルトキハ管内ニ準スヘシ
- 第五條 日當ハ陸路六里未滿ノ旅行ニハ支給セサルモノトス但公務ノ都合ニ依リ宿泊ヲ要スルトキハ其數ニ應ジ支給スルモノトス
- 第六條 新任ノモノハ在勤校ニ至ルマテ本職相當ノ旅費ヲ支給スルモノトス
- 第七條 轉校ノモノハ本職相當ノ瀛車瀛船及ヒ車馬賃ノ二倍ヲ支給スルモノトス但旅費日當其新任ノ校ヨリ支弁スヘシ
- 第八條 非常急行等普通車馬賃ヲ以テ支弁シ難キ場合ハ總テ實費トス
- 第九條 解職ノモノ在勤中取扱タル事務取調等ノ爲メ召喚スルキハ前職相當ノ旅費ヲ支給スヘシ

種別	漕車賃		船賃		管外車馬賃		管內車馬賃		管外日當		管內日當	
	一里毎ニ	一海里毎ニ	一里毎ニ	一里毎ニ	一里毎ニ	一日毎ニ	一日毎ニ	一日毎ニ	一日毎ニ	一日毎ニ	一日毎ニ	
學校長及訓導	金六錢	金六錢	金六錢	金七錢	金六錢	金六十錢	金五十錢	金六十錢	金五十錢	金六十錢	金五十錢	
授業生	金五錢	金五錢	金五錢	金六錢	金五錢	金五十錢	金四十錢	金五錢	金五錢	金五錢	金四十錢	

○同上勉勵賜金手續

○茨城縣令乙第十四號 (明治十九年十二月十一日)

郡役所
戶長役場
小學校

小學校職員勉勵賜金手續左之通相定ム

○小學校職員勉勵賜金手續

- 第一條 小學校長教員職務勉勵ノ者ハ郡長又ハ戶長ノ具申ニ依リ知事之ヲ賞與ス
- 第二條 前條ノ勉勵賜金ハ其在勤校ヨリ支辨スルモノトス
- 第三條 勉勵賜金額ハ一ヶ月分俸給額ヨリ多カラズ其五分ノ一ヨリ少ナカラサルモノトス

第四條 郡長及戶長ハ其管理部內學校職員中職務勉勵ノモノアルハ知事へ具申ス

第五條 戶長ハ毎年一月十五日迄ニ其具申書ヲ郡長へ差出シ郡長ハ之ニ當否ノ意見ヲ附シ且自ラ管理スル所ノ具申書ト併セ毎年一月三十一日迄ニ縣廳へ差出ス

第六條 知事ハ前條具申ノ當否ヲ檢査シ毎年二月賞與スルモノトス

第七條 賞與ヲ具申セントスルハ左ノ項目ヲ調査掲載ス

- 一 項 就職又ハ昇級ノ年月日
- 二 項 俸給額及賞與金額
- 三 項 前年中出勤及欠勤ノ日數
- 四 項 前年中受持生徒ノ學級及ヒ其生徒數
- 五 項 前年中受持生徒ノ大小試驗ニ及第セシモノノ員數
- 六 項 生徒及父兄ノ信否
- 七 項 受持諸帳簿ノ整否
- 八 項 授業及管理ノ巧拙
- 九 項 受賞ノ年月日及其金額 (此例規ニ依リ受賞セシモノ又ハ此例規設定以前學校限リ手當等ヲ支給セシモノハ此項ニ掲載ス)

十項 品行ノ良否

十一項 懲罰ノ有無(懲戒ノ處分ヲ受ケシ等ノコトアラハ之ヲ掲ク)

以上(右項目ノ外掲載スヘキモノアルハ順次項目ヲ設ケテ記載スヘシ)

第八條 知事ノ見込ニ依リ郡長又ハ戸長ノ具申ヲ俟スシテ直チニ賞與スルコトアルヘシ

第九條 授業生勉勵ノ者アルトキハ戸長ヨリ郡長ヘ具申シ郡長之ヲ賞與シ又高等小學校授業生ハ郡長直チニ賞與スルコトナ

第十條 前條戸長ハ毎年一月十五日迄ニ郡長ヘ差出スヘシ郡長ハ執行ノ后其事由ヲ詳具シ二月廿日迄ニ縣廳ヘ報告スヘシ

第十一條 前條賞與金ノ支辨及其金額又ハ調査ノ項目ハ第二條第三條第七條ニ依ル

○茨城縣令乙第十七號 (明治十九年十二月十三日)

郡 役 所
戸 長 役 場
小 學 校

小學校檢閱規則左之通相定ム

○小學校檢閱規則

第一條 小學校檢閱ハ管内小學校ノ實況ヲ視察スル爲メ施行スルモノトス

第二條 檢閱ハ各郡役所部内ニ就テ毎年一回以上之ヲ施行ス

第三條 檢閱委員ハ臨時之ヲ命ス

第四條 郡長戸長ハ其部内檢閱ノ際臨席スヘシ

第五條 檢閱ヌヘキ種目及日限ハ遅クモ其十日前ニ之ヲ示達スヘシ

第六條 郡役所ハ前條ニ發セル示達其部内ニ告示シ且ツ檢閱ニ關スル必用ノ準備ヲ

ナスヘシ

第七條 檢閱ノ事項ヲ大別シテ左ノ三種トス

第一 學區ニ係ル事項

第二 學校ニ係ル事項

第三 教員ニ係ル事項

第八條 學區ニ係ル事項ハ左ノ如シ

第一 區内一般ノ情態

第二 就學不就學ノ景況

第三 生徒授業料ノ金額及納否ノ景況

第四 學校ニ屬スル資産ノ管理及收支ノ景況

第五 學校費ニ係ル町村費賦課ノ方法及徴收ノ景況

廿年乙
第四十
九號退
加ノ面

- 第六 戶長役場若クハ郡役所ニ於テ學校費出納ニ係ル帳簿
- 第九條 學校ニ係ル事項ハ左ノ如シ
 - 第一 學校全体管理ノ整否
 - 第二 各教室ノ整否
 - 第三 教授器械及器具ノ整否
 - 第四 教授器械及教室器具ノ適否
 - 第五 教員配置ノ當否
 - 第六 授業ノ良否
 - 第七 体育ノ狀況
 - 第八 教則實地ノ概況
 - 第九 生徒學力ノ進否及身体ノ健否
 - 第十 諸表簿ノ整否
 - 第十一 學校諸費出納
- 第十條 教員ニ係ル事項ハ左ノ如シ
 - 第一 學力
 - 第二 勤惰
 - 第三 品行

第四 信憑

- 第十一條 檢閲ヲ免除スル者左ノ如シ
 - 第一 三等以上ノ訓導
 - 第二 教員免許狀受領后若クハ檢閲后六ヶ月ヲ經サル訓導
- 第十二條 第一種ハ該學區ニ就キ第二種ハ各學校ニ就キ第三種ハ各教員ヲ召集シ各之ヲ檢閲ス
- 第十三條 第三種ヲ檢閲ヲ施行スルトキハ郡役所ニ於テ第一號書式ニ據リ教員出頭名簿ヲ製シ檢閲委員ニ差出スヘシ
- 第十四條 前八條ニ掲ケタル第一項乃至第五項ハ郡長若クハ戶長ニ於テ第三號書式ニ據リ實際ノ景況及改良等ノ意見ヲ記シ檢閲委員ニ差出スヘシ第六項ハ其帳簿等ニ就テ之ヲ檢閲ス
- 第十五條 前九條ニ掲ケタル第一項乃至第八項ハ學校全体ニ就キ第九項ハ各級ニ就キ既修ノ學科ニ應シタル問題ヲ發シ第十項第十一項ハ縣廳ニ於テ定メタル規則及表簿ニ依リ各之ヲ檢閲ス但第六項乃至第九項ハ其學校ノ授業時間ニ於テ之ヲ檢閲ス第九項ハ時宜ニ由リ各級ニ行ハヌシテ現在級ノ内二三級ヲ撰ミ檢閲スルコトアルヘシ
- 第十六條 前十條ニ掲ケタル第一項ハ其資格ニ適應スル問題ヲ發シ其學力ヲ檢閲シ

第三項乃至第四項ハ郡長若シハ戸長ニ於テ第四號書式ニ據リ實際ノ狀況及意見ヲ記シ封書ヲ以テ檢閲委員ニ差出スヘシ

第十七條 前十一條ニ該當スルモノハ郡役所ニ於テ第二號書式ニ據リ其姓名簿ヲ製シ檢閲委員ニ差出スヘシ

第十八條 教員ハ檢閲ノ際病氣或ハ事故等ニテ欠席セシキハ便宜隣郡ニ召集シテ之ヲ檢閲ス

第十九條 檢閲委員ハ檢閲中其成績ノ良否如何ヲ陳述スルコトアルヘシ
第一號書式(用紙美濃野)
教員出頭名簿

何師範學校何等科卒業 何等訓導 姓名 何年何月
何那何學區何小學校在勤 姓名 何年何月

何等師範學校卒業者 何人
何等科教員免許狀受領者 何人
右ノ通ニ候也

何等科教員免許狀 全 姓名 何年何月
檢閲規則第十七條相當者姓名名簿
何那何學區何小學校
卒業證書若シハ免許狀ヲ受領スル者ハ茲ニ記載スヘシ 校長 姓名 何年何月

計何人
檢閲委員 御中

何師範學校何等科卒業(何等科教員免許狀)

全 (一)(二)(三)等訓導 姓名 何年何月

何等訓導 姓名 何年何月

此者ハ何年何月免許狀受領若シハ何郡ニ於テ檢閲ヲ受ケ爾后六ヶ月ヲ經サル者

(右ノ例ニ依リ列記スヘシ)
計何人
右ノ通ニ候也

年月日 何郡役所
檢閲委員 御中

第三號書式
何那何學區ニ係ル取調
區内一般ノ情態

何々 就學不就學ノ景況

何々 生徒教育科ノ金額及不納ノ景況

右ノ例ニ依リ列記ス

何那何町村 年月日 何那何町村 戸長役場

(何郡役所印)
檢閲委員 御中

第四號書式
勤惰品行及信憑
何那何學區何小學校在勤

勤惰 何等訓導 姓名
品行 何年何月

何々

信憑

何々

右ノ例ニ依リ列記ス

右ノ通ニ候也

○同上建築心得

○茨城縣令乙第十八號 (明治十九年十二月十三日)

何郡何町村

年月日

戸長印

(何郡長印)

檢閲委員 御中

郡役所

戸長役場

小學校

小學校建築心得左之通相定ム

○小學校建築心得

一 小學校ノ建築如何ハ教授管理衛生通學等ニ直接ノ利害ヲ及ホシ又間接ニ教育ノ盛衰ニ關スル最大ナリトス故ニ建築ノ初ニ於テ宜シク之カ計畫ニ注意ヲ加ヘサルヘカラス因テ其至要ノ諸件ヲ示スコト左ノ如シ

敷地ニ關スルコト

一 廣表

廣表ハ先ツ學區内學ニ就クヘキ兒童ヲ算シ然ル後其數ニ應ノ之ヲ定ルヲ要ス其割合ハ土地ヲ得ルノ難易ニ依リテ不得止モノアルト雖モ少クモ一人ニ付三坪半ニ下ラサルヲ要ス若シ生徒ノ數一百人ニ滿タサルキハ猶此割合ヲ增加スヘシ

一 位置

位置ハ通學ニ便アルト空氣ノ流通及ヒ太陽ノ射照充分ニシテ身體ノ健康ニ利アルヲ要ス

市區ハ大抵人家稠密ニシテ喧嘩雜鬧タルヲ免レヌ故ニ如此ハ可成之ヲ避ケ稍偏スルモ閑靜ク地眺望ノ佳ナルモノヲ求メ可シ然レモ始テ閑靜ヲ主トシ便宜ヲ顧ミサレハ又宜シキヲ得タルモノト云フ可カラズ

一 地質

卑濕ノ地ハ往々泥濘氣ヲ發シ衛生ヲ害スルコト少カラズ故ニ可成宏壯ノ地ヲ撰フヘシ又清淨ノ飲水ヲ得ルニ便ナルト否トハ尤モ注意ノ緊密ナルヲ要ス

一 形狀及方向

土地ノ便宜ニ任セ強テ之カ制限ヲナスヲ要セスト雖モ形狀ハ長方形ニ就テ方向ハ正南又ハ東南ニ面スルヲ長シトス敷地ノ西北ニ方ニ樹木アルハ夏季ハ西日ノ焦灼ヲ防キ冬季ハ西北風ノ凜冽ヲ遮リ氣候ヲ調和スルニ於テ大ニ益アリトス

一 構造堅牢ヲ主トシ其種類ハ洋風ニ擬シ平家建ヲ尤モ便ナリトス然レトモ人家稠密ノ地ニアリテ適當ノ敷地ヲ得ル能ハズル場合ハ二階造リトス之レ獨リ敷地ノ廣袤ヲ減スルノミナラス又ク空氣ヲ清爽ニスルノ益アリトス

但二階造リノ校舍ニアリテハ幼年ノ兒童及女子ノ教場ハ可成階下ヲ長シトス

一 床及回廊
床ハ其高サ二尺以上ナルヲ要ス否ハ其地ノ高低ニ依リテ定ムルモ回廊ハ其巾四尺以上ニシテ風雨ヲ防テ備アルヘシ

一 昇降口

昇降口ハ内部ニハ下足傘架等ヲ設アリテ且ツ風雨ノ備ヘ充分ナルヲ要ス廣サハ生徒ノ多少ニ關スル素ヨリモ雖下モ少クモ一間半ニ下ラサルヘシ

一 階梯

階梯ハ昇降シ易キヲ要スル者ナレハ之ヲ直行又ハ彎曲ナラシメス半折シテ喰違狀ニ造ル可トス其幅ハ四尺以上ニシテ各級ノ幅八寸其高サ四寸乃至五寸ナルヘシ又欄干ヲ附スルハ必要ノコトナリトス多數ノ兒童ヲ容ル、學校ニアリテハ便宜ノ場所ニ於テ二ヶ所ノ階梯ヲ設クヘシ

一 教場
教場ハ校舍中ノ最要部ナルヲ以テ其配置構造最モ注意セサル可カラズ故ニ其要領

ヲ左ノ如ク分記ス

(イ) 教場ノ數ハ兒童ノ多寡ニ應ス各級其教場ヲ分ツハ授業上極テ益アリ

(ロ) 廣狹ハ兒童一人ニ付三尺平方以上ノ率トス

(ハ) 形狀ハ長方形ナルヲ可トス

(ニ) 天井ノ高サハ少ナクモ床上九尺ニ下ラスシテ可成高キヲ要ス若シ故アリテ本文ノ如クスル能ハサルトキハ教場内空氣ノ容積ヲ増サン爲メ屋根裏ヲ露ハシ天井ヲ設ケサルヲ可トス

(ホ) 壁ハ堅質ナルヲ要シ又床面ヨリ三尺許ニ至ルマテ腰板ヲ付スルヲ良トス又日光ノ射入スル教場ノ壁ハ鼠色ノ如キ反照少ナキ者ヲ要ス

(ヘ) 窓ハ兒童ノ左右ニアルヲ要ス其高サハ床面ヲ距ル三尺以上ノ所ヨリ天井下ニ達シ其構造ハ簡單ニシテ開閉ニ便ニシ可成大且ツ多キヲ良トス又鎖格若クハ木格ヲ併メ萬一ノ危険ニ備フヘシ

但窓ノ内部ハ白色又ハ鼠色ノ布ヲ垂レ光線ノ過劇ヲ減殺スルノ裝置アルヲ可トス

(ト) 暖室ノ裝置ハ教場ニ缺クハカラサルノ要タルヲ以テ建築ノ初メ豫メ其位置ニ注意スヘシ

一 講室

講室ノ形狀ハ長方形ニシテ其大サハ全校生徒ノ半數以上ヲ容ル、ニ足ルヲ要ス若シ講室ヲ設ケ難キトキハ二三ノ教場ノ中隔ヲ除キ之ヲ合併シテ一個ノ大室トナシ以テ講室ニ代用スルノ便ヲ設クヘシ

一 雜室

事務室教員詰所小使部屋湯呑所食室等ハ又缺クヘカラサルモノニ付宜シク其位置等ニ注意スヘシ

運動場ニ關スルコト

一 体操場

体操場ハ遊戯場ト相通スルノ場所ヲ撰ミ別ニ一室ヲ設クルハ乃チ完全ナルモノトス若シ別ニ建設スル能ハサルトキハ校内ノ一部ヲ以テ之ニ充テ共ニ風雨ノ備ヘ充分ニシテ通氣ノ設ケ善良ナルヲ要ス其廣サハ益廣キヲ可トス

一 遊戯場

遊戯場ハ屋外ニ在リテ兒童ノ隨意ニ遊戯スルノ場所トス故ニ地質ハ充分ニ乾燥ニシテ且ツ平滑ニ廣サハ愈大ニシテ愈良シ之ヲ小ニスルモ其比例兒童一人ニ付少ナクモ二坪半ニ下ラサルヘシ
遊戯場ハ通常其面ニ細砂ヲ散布シ以テ之ヲ乾燥ニシ且平坦ナラシムヘク又場ノ西方ニハ常綠樹ヲ植ヘ南方ニハ落葉樹ヲ植ヘ以テ夏季ハ日光ノ劇射冬季ハ寒風ノ凜

冽ヲ防クノ要ニ供スヘシ
便所ニ關スルコト

一 便所

便所ハ管理上便利ニシテ校舍ヲ離レ日光ノ射照甚シカラサル場所乃チ北方樹林アルカ如キ地ヲ最モ適當トス若シ不得止シテ他ノ方位ニ置キハ其近傍ニ常綠樹ヲ栽ヘ日光ヲ遮リ臭氣ノ蒸散ヲ防クヘシ

又男女ハ便所ヲ異ニスヘシ

構造ノ材ハ總テ堅緻ナルヘク大小便溜槽ハ陶甕又ハ油石灰製等ヲ用ヒ其周圍ハ亦油石灰ヲ以テ敷ムヘシ

小便所ノ溜槽ハ可成之ヲ壁后又ハ地底ニ設ケ且數十人共用ノ制ヲ避クヘシ大便所ノ數ハ大約百人ニ付三個以上ヲ率トナスヘシ

○同上教員發令前ノ免許狀有効期限内ハ授業生タルヲ得

○茨城縣令甲第四號 (明治二十年一月十八日)

容年本縣令甲第三十八號同三十九號發令前ニ於テ授與シタル小學校教員免許狀ヲ有スルモノハ其有効期限内ハ小學校授業生タルコトヲ得ヘシ

但中等科免許狀同數科免許狀ヲ有スルモノハ高等小學校授業生初等科免許狀同數科免許狀ヲ有スルモノハ尋常小學校授業生トス

○小學校簡易科教員及授業生試驗用書

○茨城縣令甲第九號 (明治廿年二月十二日)

明治十九年(十一月)甲第三十九號小學校簡易科教員及小學校授業生免許規則第二條試驗科目程度ニ依リ試驗用書左ノ通相定ム

小學校簡易科教員及小學校授業生試驗用書

一修身

小學校修身訓

一讀書

小學校讀本

理科讀本

一地理

茨城縣地誌略

新撰中地理書

一歷史

小學校日本歷史

一教育

改教授術及續編

西村茂樹選錄

阿部弘藏著

中川謙二郎譯補

山田行元編述

石村貞一編次

若林虎三郎編纂

伊澤修二著

文部省体操傳習所刊行

○小學校職員職制

○茨城縣令甲第二十二號 (明治二十年三月十六日)

小學校職員職制左之通相定ム

小學校職員職制

第一條 學校長ハ校務ヲ整理シ訓導授業生ヲ監督シ教室ノ秩序ヲ保持スルコトヲ掌ル

但學校長ハ訓導ノ職掌ヲ兼ヌルコトヲ得

第二條 學校長ヲ缺クトキハ首座訓導學校長ノ職務ヲ掌ル

第三條 訓導ハ學校長ノ指揮ヲ承ケ教授ノ事ヲ掌ル

第四條 授業生ハ學校長ノ指揮ヲ承ケ訓導ノ職掌ヲ助ク

第五條 訓導授業生ノ員數ハ生徒ノ員數ニ應シテ之ヲ定ム

○同上職員俸額表

○茨城縣令甲第二十三號 (明治廿年三月十六日)

小學校職員俸額表左之通相定ム

小學校職員俸額表

學校長	月俸	四拾圓以下拾五圓以上	廿五圓以下拾貳圓以上
訓導	月俸	三拾五圓以下拾圓以上	廿圓以下七圓以上
授業生	月俸	拾圓以下六圓以上	八圓以下五圓以上
		高等小學校	尋常小學校

○同上標札

○茨城縣令甲第八十九號 (明治二十年十二月二日)

公私立小學校標札左ノ雛形之通相定ム

何郡第何番學區

○公立何々尋常小學校

木品適宜
長四尺五寸
橫壹尺

(編者曰ク何郡第何番學區ノ七字ハ設置區域ノ變更ニ依リ消滅)

但分教場ニハ校名ノ下ニ分教場ノ三字ヲ記スヘシ

○私立何々高等小學校

寸法前ニ準ス

○學事年報諸表樣式及學事表簿取扱心得
○茨城縣令乙第四十八號 (明治二十年十二月十二日)

郡 役 所
戶 長 役 場
小 學 校

學事年報諸表樣式自今別表之通相定候條曆年ノ調査ニ依リ別紙學事表簿取扱心得ニ準シ表簿調製本年分ヨリ施行シ郡長ニ於テハ毎年一月三十一日限り差出スヘシ但生徒學籍簿生徒出席簿ハ來明治二十一年一月ヨリ施行スヘシ
(別紙)

學事表簿取扱心得

此表簿ハ學齡兒童其他ノ修學ヲ調査シ且毎年一回郡役所ヨリ縣廳へ申報スル學事年報ヲ製スルノ順序方法ヲ示スモノニシテ其取扱心得ヲ示ス左ノ如シ

生徒學籍簿 此簿ハ公私立小學校ニ於テ取扱フモノニシテ生徒入退校一切ノ事ヲ調査スルノ用ニ充ツ

生徒出席簿 此簿ハ公私立小學校ニ於テ取扱フモノニシテ生徒ノ出席ヲ調査スルノ用ニ充ツ

公私立小學校年末調查表

公立諸學校年末調查表
私立幼穉園年末調查表

此五表ハ各學校幼穉園ニ於テ調査スルモノニシテ毎年一回戸長役場ヘ申報シ戸長役場ニ於テ之ヲ一括シ郡役所ニ差出シ郡役所ニ於テハ縣廳ヘ申報スル年報ノ料ニ充ツ

但郡長管理ニ屬スル學校ニ在テハ直チニ郡役所ヘ差出スモノトス

學齡修學調査表

學事統計表

公學費出納表

公學所有品及學資寄付表

公立諸學校表

此三表ハ戸長役場ニ於テ調査スルモノニシテ毎年一回郡役所ニ差出シ郡役所ニ於テハ縣廳ヘ申報スル年報ノ料ニ充ツ

但郡長管理ニ屬スル學校ノ分ハ郡役所ニ於テ調製スルモノトス

學事統計表、公學費出納表、公學所有品及學資寄付表

公立諸學校表

此三表ハ郡役所ニ於テ統計シ毎年一回縣廳ニ申報スルモノトス

生徒學籍簿

(用紙美濃紙)

部	生徒姓名	入學年月日		從前ノ教	父母又後見人姓名	同住所	同族籍職業	入級年月日				退學年月日	退學理由	
		年	月					第一年生	第二年生	第三年生	第四年生			

明治 年 月 日

學校長(首座教員)

何

某

(用紙美濃紙)

公立諸學校年末調査表

名	稱	所	在	地	創	立	年	月	學	科	學	期	年	數	教		員	生	徒	卒	業	生	徒
															男	女							
一	ヶ	年	授	業	料	總	額	歲	費	金	額	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓

明治 年 月 日 調

學校長(首座教員)私立ハ設置者

何

某

(用紙美濃紙)

公立幼稚園年末調査表

名	稱	所	在	地	創	立	年	月	主	管	者	男	女	保	姆	幼	男	女	計	兒

明治 年 月 日 調

主管者(私立ハ設立者)

何

某

(用紙美濃紙)

學齡修學調査表

學	區
---	---

廿五年
乙
第十
號
加
二
面

小										學 齡 人 員								人 口	
學 校 長					學 校					合 計				學 修					
公 學		私 學		公 學	私 立		公 立			未 卒 業 退 學 者		未 就 學		卒 業 退 學 者		就 學			
男	女	男	女	男	高 等 科	尋 常 科	簡 易 科	高 等 科	尋 常 科	簡 易 科	女	男	女	男	女	男	女	男	

四百六

學 郡	區 名	明 治 年 月 日 調	明 治 年 月 日 調	學 齡 人 員								人 口	
				合 計				學 修 不 卒 業 退 學 者		學 修 就 業 退 學 者			
		郡	郡	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男
		郡	郡										
		戶長	何										
		村町	某										
總 計													

四百五

幼	校學種各										校																													
	生					教					徒					業					卒					學														
	徒					員					高					尋					等					常					科									
	私學		公學			私學		公學			私學		公學			私學		公學			私學		公學			私學		公學												
公	私	公	私	公	私	公	私	公	私	公	私	公	私	公	私	公	私	公	私	公	私	公	私	公	私	公	私	公	私	公	私	公	私	公	私	公	私	公	私	公
立	立	立	立	立	立	立	立	立	立	立	立	立	立	立	立	立	立	立	立	立	立	立	立	立	立	立	立	立	立	立	立	立	立	立	立	立	立	立	立	

		學																																					
簡 易 科	日 々 出 席 生 徒 平 均 數	徒						生						授			教																						
		高		尋		簡		高		尋		簡		業		生	員																						
		等		常		易		等		常		易		生		生	員																						
公學		私學		公學		私學		公學		私學		公學		私學		公學	私學																						
女		男		女		男		女		男		女		男		女	男																						

園		種			
幼	兒		私立		
	私立	公立	女	男	
	女	男			

人口及學齡人員ハ本籍寄留ヲ論セス總テ現在居住スル者ヲ算入スヘシ

諸數中其全年ニ涉ル者ハ一曆年ニ據リ現在數ニ係ル者ハ其年十二月末ノ數ニ據リ調査スヘシ就學ノ欄内ニハ年末現員ハ勿論退學者ト雖トモ本年中就學セシ者ハ總テ之ヲ算入スヘシ

卒業退學者ノ欄ニハ高等科及尋常科簡易科等ヲ卒リテ本年中就學セサル者ヲ算入シ未卒業退學者欄ニハ尋常科簡易科等ヲ卒スシテ本年中就學セサル者ヲ算入スヘシ生徒ハ總テ年末ノ現員ニシテ本年中出席シタル者ヲ算入スヘシ

明治 年 月 日 調

郡

公學費出納表

種別	小學校	總計	種別	小學校	總計
前年より越高	圓	圓	學校長給料	圓	圓

部											
計					雜納金	地方稅	町村補助費	町村費	積金利子	有志寄附金	授業(保育)料
出											
計				諸雜費	營繕費	書籍器械費	借地借家費	生徒給費	雜給	諸給料	授業生給料
部											

小學校教員給料及小學校生徒授業料比較				
種別	最金額	平均額	授業料	
			教員給料	生徒授業料
男	圓			
女	圓			
男	圓			
女	圓			
總計				

公學所有品及學資寄附表

種別	敷地坪數		敷地價		種別	金額
	坪	圓	坪	圓		
小學校					小學校	
總計					總計	
有			所			
附屬地坪數	內官有地	敷地	敷地	金額	附屬地坪數	金額
坪	圓	坪	圓	圓	坪	圓
坪	圓	坪	圓	圓	坪	圓
坪	圓	坪	圓	圓	坪	圓
資			學			
器	書	家	地	金額	器	書
械	籍	屋	面	圓	械	籍
筒	部		坪	圓	筒	部
筒	部		坪	圓	筒	部
筒	部		坪	圓	筒	部

給料授業料最多寡額ハ年末現員中ニ就キ其月額ヲ揭ケ授業料平均額ハ授業料ヲ納ムル者ノ現數ニ就キ計算スヘシ
 所有品中積米等アツハ金額ニ改算ノ上積金額目中ニ併記スヘシ
 本年中廢止セシ學校ノ學費ハ各種類ニヨリ其欄内ニ記入スヘシ

明治 年 月 日調 郡 (諸學校)

品						附		寄	
附屬地價	家屋價	書籍價	器械價	積金額	雜品價額	寄附人員			

公私立諸學校表

名稱	學期	學科	所在地	創立年	年數	教員		員生		徒	卒業生徒	一ヶ年授業料總額	歲費金額	學校設置者
						男	女	男	女					

																			圓																			圓
--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	---	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	---

町村立ト私立トハ符合ヲ付シテ區別スヘシ
 ○數學科ヲ教フル者ハ其主眼ノ學科ノミヲ揭ク可シ
 ○私立學校ノ歲費金額ハ之ヲ揭クルヲ要セス
 ○小學校授業生欠員ノ節一時雇入レノ件
 ○茨城縣令乙第五十三號 (明治廿年十二月廿四日)

郡 役 所
 戶 長 役 場

尋常小學校ニ於テ授業生欠員ノ際一時雇員ヲ要スル場合ニハ月俸四圓以內ヲ以テ管理
 理者ヨリ郡長ノ認可ヲ經テ雇入ルヽコトヲ得

○小學校事務引繼手續

○茨城縣訓令第七十四號 (明治二十年五月九日)
 小學校ノ事務引繼ノトキハ左ノ手續ニヨリ取扱ハシムヘシ

各郡長宛
 ○小學校事務引繼手續

第一條 小學校長首座訓導轉免ノ辭命ヲ受ケタルトキハ三日以內ニ於テ後任者ニ其
 事務ヲ引繼互ニ其証書ヲ交付スヘシ

第二條 後任者赴任セサルトキハ次席ノ者ニ引繼追テ次席ノモノヨリ更ニ引繼ノ手
 續ヲナスヘシ

第三條 未決ノ事務ハ勿論重要ナル事件ハ總テ演說書ヲ以テ之ヲ引繼クヘシ

第四條 書籍器械帳簿類ハ總テ目錄ニ添ヘ引繼クヘシ

第五條 引繼ノ際後任者ニ於テ引受クヘカラサルモノアル歟若クハ引繼ヲ了シ難キ
 事由アルトキハ管理者ノ指揮ヲ受ムヘシ

第六條 引繼了リタルトキハ其旨双方連署ニテ管理者ヘ届出ヘシ

○同上教科用書圖書

○茨城縣令甲第六十九號 (明治二十一年七月二十一日)
 小學校教科用圖書別表ノ通相定候條來ル八月二十一日ヨリ各學年級共同時ニ實施ス
 へシ

小學校教科用圖書配當表

尋 常 科	第一	第二	第三	第四	高 等 科
	第一	第二	第三	第四	

讀 書				字 習	算 術			
日本讀本初歩	普通讀本	讀書入門	尋常小學讀本	新日本讀本	當分未定	小學算教授書	小學尋常科算書	尋常小學算全書
二	二	一	二	二	全	全	全	全
二	三	三	四	三	全	全	全	全
二	四	二	二	四	全	全	全	全
三	五	四	五	五	全	全	全	全
四	六	五	六	六	全	全	全	全
三	七	六	七	七	全	全	全	全
四	八	七	八	八	全	全	全	全
全	全	全	全	全	全	全	全	全
五	六	五	六	六	當分未定	小學算教授書	小學尋常科	珠算全書
六	七	六	七	七	全	全	全	全
全	全	全	全	全	全	全	全	全
全	全	全	全	全	全	全	全	全
全	全	全	全	全	全	全	全	全
全	全	全	全	全	全	全	全	全
全	全	全	全	全	全	全	全	全
全	全	全	全	全	全	全	全	全
全	全	全	全	全	全	全	全	全
全	全	全	全	全	全	全	全	全
全	全	全	全	全	全	全	全	全
全	全	全	全	全	全	全	全	全

圖 書				地 理			歷 史	
畫學階梯	新書學入門	圖畫指要						
全	全	全						
全	全	全						
全	全	全						
全	全	全						
全	全	全						
全	全	全						
全	全	全						
全	全	全						
全	全	全						
全	全	全						
全	全	全						
全	全	全						
全	全	全						
全	全	全						
全	全	全						
全	全	全						
全	全	全						
全	全	全						
全	全	全						

歌 唱		業 農		語英	科	理
幼穉園唱歌集	同					
小學唱歌集	同					
同	同					
同	同					
小學唱歌集		農業初步 （小學）農業道 ざるべ	同	小農業新書	理科初步 小學校用理科	新撰理科書
同		同	同	全	全	全
		同	同	全	全	全
同		同	同	全	全	全
同		同	同	全	全	全
同		同	同	全	全	全

本表掲載スル圖書中用器書本縣地理英語唱歌等ノ外數種撰定シタルモノハ其中ニ就キ一種ヲ採擇スルモノトス
 ○讀本類ハ總テ掛圖ヲ併セ用サル可シ但普通讀本掛圖ハ改製照會中新日本讀本掛圖ハ調製中

○（小學）筆算教授書ハ尋常科ニ在リテハ首卷ヨリ第三卷迄ノ四字ヲ課シ高等科ニ至リテハ第四卷ヨリ第八卷迄ヲ課ス但シ等差等比ノ兩級數ヲ除ク

○（小學）筆算教授書尋常科共（高等科）筆算書ハ教科書トシ生徒ニ携ヘシムルモノニシテ教師カ教授用ノミニ用サルモ適宜ナルヘシ

○圈點ヲ附シタル算術書三部簿記書三部圖二部ハ單ニ教授用ニ充ツルモノニシテ生徒ニ携ヘシムルモノニアラズ且簿記書ハ假定シタルモノニシテ三部ヲ斟酌シテ教授スルモノトス又珠算全書ハ全部ヲ用サルニアラス算珠運用加減乗除ノ五卷ヲ用サルノミ

○茨城縣地誌ハ假定トス
 理科初步ハ生理地文ノ二門ヲ欠ク依テ（小學校用）理科ノ生理篇地文篇ヲ以テ補充スヘシ

○幼稚園唱歌集ハ尋常科ニ於テ遊戲ノ唱歌ニ課スルモノトシ小學唱歌集ハ高等科ニ在リテハ全篇ヲ通シテ課スレトモ尋常科ニ在リテハ歌曲ノ容易キモノ、ミヲ課ス
 ○著者姓名及出版訂正等ノ年月ハ次表ニ依ルヘシ

小學校教科用圖書配當表

書名	冊數	定價	價厘	著者名	出版者名	出版訂正年月
日本讀本初歩	二	一〇〇	〇	新保磐次	原亮三郎	明治二十年八月
日本讀本	六	四六〇	〇	前全	前全	同年十一月
普通讀本	八	七五〇	〇	高橋熊太郎	小林八郎	全十九年十一月
讀書入門	一	四四	〇	文部省編輯局	全	全二十年五月
尋常小學讀本	七	五九一	〇	同	同	同
尋常小學讀本	八	六四〇	〇	辻敬之	辻敬之	同二十年九月正訂
尋常小學讀本	八	七七〇	〇	文學社	小林義則	同二十一年五月
新日本讀本	八	七七〇	〇	文學社	小林義則	同二十一年五月
算術	算	算	算	算	算	算
小算算教授書	四	七四〇	〇	宮川保全	宮川保全	同二十年十月
小尋常科筆算書	五	五四〇	〇	中條澄清	內田正義	同廿一年三月正訂
教師用	四	四六〇	〇	佐久間文太郎	原亮三郎	同二十年十月
珠算全書	五	七八〇	〇	黑田定治	原亮三郎	同十八年五月
教師用	三			中條澄清	牧野善兵衛	同十九年十一月
小學珠算書	三			中條澄清	牧野善兵衛	同十九年十一月
唱歌	一	八〇	〇	文部省編輯局	同	同廿年十二月
幼稚園唱歌集	一	八〇	〇	文部省編輯局	同	同廿年十二月
小學唱歌集	三	二九九	〇	同	同	同十四年十一月
讀書	八	一三三	〇	三宅米吉	原亮三郎	同廿一年五月
高日本讀本	八	一三四	〇	新保磐次	小林八郎	同廿年九月正訂
科用普通讀本	八	一三四	〇	高橋熊太郎	小林八郎	同廿年九月正訂
小學高等讀本	八	一二四	〇	岡村増太郎	阪上半七	同廿年十二月正訂
算術	算	算	算	算	算	算
簿記	簿	簿	簿	簿	簿	簿
小算算教授書	五	九一〇	〇	宮川保全	宮川保全	同廿一年四月
小學科算筆書	五	五六〇	〇	中條澄清	內田正義	同廿一年三月正訂

書名	冊數	定價	價厘	著者名	出版者名	出版訂正年月
日本讀本初歩	二	一〇〇	〇	新保磐次	原亮三郎	明治二十年八月
日本讀本	六	四六〇	〇	前全	前全	同年十一月
普通讀本	八	七五〇	〇	高橋熊太郎	小林八郎	全十九年十一月
讀書入門	一	四四	〇	文部省編輯局	全	全二十年五月
尋常小學讀本	七	五九一	〇	同	同	同
尋常小學讀本	八	六四〇	〇	辻敬之	辻敬之	同二十年九月正訂
尋常小學讀本	八	七七〇	〇	文學社	小林義則	同二十一年五月
新日本讀本	八	七七〇	〇	文學社	小林義則	同二十一年五月
算術	算	算	算	算	算	算
小算算教授書	四	七四〇	〇	宮川保全	宮川保全	同二十年十月
小尋常科筆算書	五	五四〇	〇	中條澄清	內田正義	同廿一年三月正訂
教師用	四	四六〇	〇	佐久間文太郎	原亮三郎	同二十年十月
珠算全書	五	七八〇	〇	黑田定治	原亮三郎	同十八年五月
教師用	三			中條澄清	牧野善兵衛	同十九年十一月
小學珠算書	三			中條澄清	牧野善兵衛	同十九年十一月
唱歌	一	八〇	〇	文部省編輯局	同	同廿年十二月
幼稚園唱歌集	一	八〇	〇	文部省編輯局	同	同廿年十二月
小學唱歌集	三	二九九	〇	同	同	同十四年十一月
讀書	八	一三三	〇	三宅米吉	原亮三郎	同廿一年五月
高日本讀本	八	一三四	〇	新保磐次	小林八郎	同廿年九月正訂
科用普通讀本	八	一三四	〇	高橋熊太郎	小林八郎	同廿年九月正訂
小學高等讀本	八	一二四	〇	岡村増太郎	阪上半七	同廿年十二月正訂
算術	算	算	算	算	算	算
簿記	簿	簿	簿	簿	簿	簿
小算算教授書	五	九一〇	〇	宮川保全	宮川保全	同廿一年四月
小學科算筆書	五	五六〇	〇	中條澄清	內田正義	同廿一年三月正訂

教師用簿記學	一	二〇〇	三浦千代太郎	原亮三郎	同廿一年二月
高等小教授書	一	二〇〇	三浦千代太郎	原亮三郎	同廿一年二月
教師用簿記學階梯	二	七五〇	森下岩楠 森嶋修太郎	森嶋修太郎	同十一年十月
教師用簿記學階梯	二	七五〇	森嶋修太郎	森嶋修太郎	同十一年十月
簿記學階梯	二	八〇〇	大坪文次郎	同	同廿一年三月
圖畫	自在畫 用器畫				
小學習畫帖	八	八六四	文部省編輯局	全	同十八年六月
普通畫學階梯	十	六五〇	岡村政子	岡村竹四郎	全十九年七月
新畫學入門	九	四五五	同	同	同廿一年四月
教師用圖畫指要(解說)	一	二三〇	平瀬作五郎	原亮三郎	同廿一年五月
小用器畫法	三	三〇〇	平瀬作五郎	原亮三郎	同廿一年九月
教師全說解	三	二〇〇	同	同	同
地理					
小學地誌	四	八〇〇	辻敬之 岡村增太郎	辻敬之	同廿年五月
新撰地誌訂正	四	一〇〇〇	岡村增太郎	小林義則	同廿年五月
小學地理教本	四	七五〇	大村芳樹	原田庄左衛門	同廿年四月訂正
小學茨城縣地誌略	一	九〇	名越時孝	同	同廿年七月
歷史					
新撰小學歷史	三	七五〇	藤本真	阪上半七	同廿一年四月訂正
小學日本歷史	三	八六〇	山縣悌三郎	同	同廿一年四月
高等日本歷史	三	五五〇	柏倉一德	內田芳兵衛	同廿年十月訂正
理科					
新撰理科書	八	一四〇〇	高島勝次郎	小林義則	同廿年十二月訂正
理科初步	六	一二八〇	三宅米吉 新保磐次	原亮三郎	同廿年三月
小學理科	八	一二七〇	朝夷六郎 平賀義美	辻敬之	同廿年八月
英語					
物理化學					同廿一年八月
動物生理					同廿一年八月
確物地文					同廿一年五月

新撰地誌訂正	四	一〇〇〇	岡村增太郎	小林義則	同廿年五月
小學地理教本	四	七五〇	大村芳樹	原田庄左衛門	同廿年四月訂正
小學茨城縣地誌略	一	九〇	名越時孝	同	同廿年七月
歷史					
新撰小學歷史	三	七五〇	藤本真	阪上半七	同廿一年四月訂正
小學日本歷史	三	八六〇	山縣悌三郎	同	同廿一年四月
高等日本歷史	三	五五〇	柏倉一德	內田芳兵衛	同廿年十月訂正
理科					
新撰理科書	八	一四〇〇	高島勝次郎	小林義則	同廿年十二月訂正
理科初步	六	一二八〇	三宅米吉 新保磐次	原亮三郎	同廿年三月
小學理科	八	一二七〇	朝夷六郎 平賀義美	辻敬之	同廿年八月
英語					
物理化學					同廿一年八月
動物生理					同廿一年八月
確物地文					同廿一年五月

農業	コーナショナル リーダ	四	舶來 和製上 下	二四〇〇〇 九五〇〇〇	ハルンス會社 同	會社
小學業新書	三	五四〇	後藤達三	同	上	同廿一年一月
農業初步訂正	三	四九〇	里宮武雄 中根壽	小林八郎	同	同十九年十一月
小學業道なるべ	三	四四〇	小花春吉 原亮三郎	同	同	同廿年七月
唱歌						
小學唱歌集	三	二九〇	文部省音樂取 調掛	同	上	十四年十一月 同十六年三月 同十七年三月

○公立小學校經費收支報告
 ○茨城縣令乙第二十一號 (明治廿二年七月廿三日)

公立小學校ノ經費收支ハ管理者ヨリ每ニヶ月六月九月左ノ書式ニ據リ翌月十五日限リ報告ス可シ
 郡市役所
 町村役場

(書式) 用紙半紙
 明治何年度自何月至何月何小學校經費收支報告
 支出之部

費目	全年豫算高		支		差引殘金
	圓	圓	三ヶ月支出高	報告濟支出高	
體給					
何費					
何費					
合計					
收入之部					
種別	全年豫算高		收		差引殘金
	圓	圓	三ヶ月收入高	報告濟收入高	
積金學田等收					
利					
授業料					

寄付金	雜入	市町村費	合計

右之通報告候也

年 月 日

知事宛

郡市長又ハ町村長氏名印

一金何圓
內譯
備考

何小學校俸給

金何圓

何 月 分

但金何圓訓導何人内何圓一人金何圓授業生何人内何圓一人(金何圓教授備何人
内何圓一人(増給其他日割ニ係ルモノハ詳記スヘシ)

金何圓

何 月 分

但全上
金何圓
但全上

何 月 分

○同王經費

○茨城縣訓令第八十四號 (明治二十二年七月廿三日)

郡市役所
町村役場

公立小學校ハ市制町村制施行ニ就テハ市町村ノ經濟ニ屬シ授業料寄付金等ハ市町村
ノ收入トナシ其經費ハ授業料寄付金等ヲ主トシ支辨スルヲ要ス尙不足アルトキハ他
ノ市町村費ヨリ補フモノト心得ヘシ

○茨城縣訓令第八十五號 (明治二十二年七月廿三日)

郡市役所
町村役場

明治廿二年七月縣令甲第五十七號ヲ以テ小學校學資取扱規則ヲ廢止候ニ付テハ高等
小學校ハ當分從前ノ通郡長ニ於テ管理スル儀ト心得ヘシ

○第四款 校舎

○學校ヲ假用シ諸集會ヲ舉行スル向不都合無之様注意
(明治十五年一月十六日)

小學校
學務委員

從來學校等ヲ假用シテ諸般ノ集會舉行スル向モ有之候處其行爲ノ遊興弄戲ニ屬スル
モノ并書論ノ猥褻詭激ニ涉ルモノハ教育上妨害少カヲサル儀ニ付右ニ充用セシメサ
ルハ勿論都テ學校監督上ニ不都合無之様取引可致此旨相達候事

○學校新築増築伺出ノ件

○茨城縣訓令第四十四號 (明治二十年二月二十五日)

學校建築方ノ儀ハ教育ニ至大ノ關係ニ付自今新築増築等ニ懸ルキハ敷地ノ坪數建築
ノ種別其經費額學齡人員及就學生徒數ヲ記シ校舍ノ圖面ハ方位及ヒ其建坪并内部ノ
各建坪ヲ區分詳細取調伺出候様取計フヘシ

○第五款 教員集會

○小學校教員集會規程

○茨城縣令甲第十五號 (明治二十年二月二十二日)

小學校教員集會規定左ノ通相定ム

小學校教員集會規程

第一條 本會ハ普通教育ノ上進ヲ議ランカ爲メニ設クルモノトス

第二條 會員ハ公私立小學校校長又ハ首坐教員ノ内一名トス

第三條 本會ニ會頭一名幹事三名ヲ置ク
但會員中ヨリ撰舉スヘシ

第四條 會頭ハ本會ヲ統轄シ幹事ハ事務ヲ掌理スル者トス

第五條 本會ノ細則ハ會員ニ於テ編製シ知事ノ認可ヲ經可シ

第六條 會期毎年四月十月ノ二回トス

但會日ハ五日ヲ超ヘ時間ハ一日五時ヨリ縮ムヘカラス

第七條 會員ハ故ナク欠席スルヲ得ス若シ病氣等ノ節ハ次坐教員ヲシテ代ラシメ其
旨幹事ヲ經テ郡長ニ届出ヘシ

第八條 郡長ハ本會ヲ監督シ會員ノ出席次席ヲ調査シ閉會后七日以内ニ會議ノ狀況
ヲ知事ニ開申スヘシ

第九條 會場ニハ出席簿及集會日記ヲ編製シ他日ノ參考ニ供スヘシ

第十條 會員旅費ハ小學校職員旅費支給規則ニ據ルヘシ

第十一條 會場費用ハ各校ヨリ支弁スヘシ

第十二條 大祭日諸祝日ノ外ハ休會スルヲ得ス

第十三條 會期聯合校及集會場ヲ定ムル左ノ如シ

廿二年
第六號
改正
面

廿七	廿五	廿三	廿一	十九	十七	十五	十三	十一	九	七	五	三	一	會
日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日
ヨ	ヨ	ヨ	ヨ	ヨ	ヨ	ヨ	ヨ	ヨ	ヨ	ヨ	ヨ	ヨ	ヨ	ヨ
リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	期

西真	西葛	結城	筑波	北相	信太	新治	行方	鹿嶋	多賀	久慈	那珂	水戸	聯
茨壁	葛飾	茨城	茨城	茨城	茨城	茨城	茨城	茨城	茨城	茨城	茨城	茨城	茨城
郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡

西真	猿嶋	結城	筑波	北相	信太	新治	行方	鹿嶋	多賀	久慈	那珂	東茨	集
茨城	茨城	茨城	茨城	茨城	茨城	茨城	茨城	茨城	茨城	茨城	茨城	茨城	茨城
高等	高等	高等	高等	高等	高等	高等	高等	高等	高等	高等	高等	高等	高等
小	小	小	小	小	小	小	小	小	小	小	小	小	小
學	學	學	學	學	學	學	學	學	學	學	學	學	學
校	校	校	校	校	校	校	校	校	校	校	校	校	校

○乙第九號 (明治十九年一月廿二日)

町村立學校ニ於テ火災盜難等總テ其財産ニ損害ヲ被リタルトキハ其事由及ヒ損害ノ財産ヲ取調七日以内ニ可届出此旨相達候事

戸長 役 場

勅令第十三號 (明治十九年四月九日)

師範學校令

- 第一條 師範學校ハ教員トナルヘキモノヲ養成スル所トス
但生徒ヲシテ順良信愛威重ノ氣質ヲ備ヘシムルコトニ注意スヘキトス
- 第二條 師範學校ヲ分チテ高等尋常ノ二等トス高等師範學校ハ文部大臣ノ管理ニ屬ス
- 第三條 高等師範學校ハ東京ニ一箇所尋常師範學校ハ府縣ニ各一箇所ヲ設置ス
- 第四條 高等師範學校ノ經費ハ國庫ヨリ尋常師範學校ノ經費ハ地方稅ヨリ支弁ス
- 第五條 尋常師範學校ノ經費ニ要スル地方稅ノ額ハ府知事縣令其豫算ヲ調整シテ

部大臣ノ認可ヲ受クヘシ

第六條 師範學校長及教員ノ任期ハ五箇年トシ滿期ノ後續ホ繼續スルコトアリヘシ

第七條 尋常師範學校長ハ其府縣ノ學務課長ヲ兼ヌルコトヲ得

第八條 師範學校生徒ノ募集及卒業後ノ服務ニ關スル規則ハ文部大臣ノ定ムル所ニ依ル

第九條 師範學校生徒ノ學費ハ其學校ヨリ之ヲ支給スヘシ

第十條 高等師範學校ノ卒業生ハ尋常師範學校長及教員ニ任スルキモノトシ但時

宜ニ依リ各種ノ學校長及教員ニ任スルコトヲ得

第十一條 尋常師範學校ノ卒業生ハ公立小學校長及教員ニ任スルキモノトシ但時

宜ニ依リ各種ノ學校長及教員ニ任スルコトヲ得

○尋常師範學校ノ學科及其程度

○文部省令第九號 (明治十九年五月二十六日)

勅令第十三號師範學校令第十二條ニ基キ尋常師範學校ノ學科及其程度ヲ定ムルコト左ノ如シ

尋常師範學校ノ學科及其程度

第一條 尋常師範學校ノ學科ハ倫理教育國語漢文英語算學珠算ハ加減乗除及四則雜題

第二條 各學科ノ程度左ノ如シ

倫理 人倫道德ノ要旨

教育 總論智育德育體育ノ理學校ノ設備編制管理ノ方法教育ニ關スル本邦法令

國語 本邦教育史外國教育史ノ概略教授ノ原理各種學科ノ教授法及實地授業

漢文 日本ノ文法文學ノ要略及作文

英語 支那ノ文法文學ノ要略

算學 綴字習字讀法文法及翻譯

珠算 ハ命位記數四則分數小數比例利息算自乘法開平開立乘積法

代數 ハ釋義記法符號四則分數一次方程式自乘法乘積法指數法二次方程式

幾何 ハ定義公理直線直線形面積比圖形平面立體角

簿記 簿記及複記

地理歷史 地理ハ總論日本地誌外國地誌ノ要略製圖法及地文ノ概論

歷史 ハ日本歷史外國歷史ノ要略

博物 植物ハ總論根莖枝葉花實等ノ形論及其作用生活種類分類法解剖法配種法

採集法ノ要旨及隠花植物ノ概略
 動物ノ總論有脊動物及無脊動物中ノ主要ナル諸綱ノ論及其解剖ノ初步ノ
 身生理ノ要旨

礦物ノ總論形像化學及物理上ノ性質等及煤鑛類金鑛類石鑛類齒石類ノ諸
 論普通鑛物鑛識ノ概略

物理化學 物理ノ總論力學物質論熱學音響學光學越歷學磁氣學ノ要畧

化學ノ非金屬金屬中重ナル諸元素及其化合物ノ製法性質及農業工業
 上重要ナル有機物ノ性質等ノ要略

農業手工

農業ノ土ノ成分分類植物ノ成分等及肥料ノ用法家畜ノ選擇保護等
 要略耕作ノ實業器具ノ用法

手工ノ木工具金工具ノ種類用法等及工業上ノ理財ノ要略

習字圖書

習字ノ楷書行書草書

圖書ノ自在書法及用器書法ノ要略

音樂

單音唱歌複音唱歌樂器用法及音樂上ノ名稱記號旋律和聲拍子等ノ要畧

普通體操ノ準備法矯正術徒手亞鈴棍棒球等ノ諸體操兵式體操ハ生兵學中

隊學行軍演習兵學大意測圖

第三條

尋常師範學校ノ修業年限ヲ四箇年トシ一學年ヲ以テ一學級トス

第四條 尋常師範學校ノ修業年限ハ一年四十週一週多ク四十週以上トス
 第五條 各學科授業ノ時間配當ハ左表ニ依ルヘシ

尋常師範學校學科授業時間配當表

	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年
倫理	一	一	一	一
教育		二	八	四 二八
國語	三	一		
漢文		二	二	二
英語	五	四	三	三
數學	四	三	三	
簿記				二
地理歷史	三	三	三	
博物	二	二	二	三

農	業	工	工	二	二	二	六
習	字	圖	畫	四	四	一	六
音	樂			二	二	一	二
體	操			六	六	六	六
				三四	三四	三四	二八

第四年ハ其學級ヲ二分シ交互輪換シテ其一部ハ學業ヲ修メ他ノ一部ハ當地授業ニ就クヘキモノトス

尋常師範學校生徒募集規則

○文部省令第十號 (明治十九年五月二十八日)

勅令第十三號師範學校令第八條ニ基キ尋常師範學校生徒募集規則ヲ定ムルコト左ノ如シ

尋常師範學校生徒募集規則

- 第一條 尋常師範學校ノ生徒ハ左ノ資格ヲ有スルモノヨリ募集スヘシ
- 一 身體強健ニシテ師範學校令第一條但書ノ目的ヲ達シ得ヘキト認ムルモノ

九年六月廿一日
正副校長
ノ面

一 高等小學校卒業以上ノ學力ヲ有スルモノ

一 男子ハ齡十七年以上二十年以下女子ハ齡十五年以上二十岁以下ノモノ

一 其府縣下在籍ノモノ

第二條 尋常師範學校ノ生徒ハ左ノ二種ヨリ募集スヘシ

第一種 郡區長ノ薦舉ニ係ルモノ

第二種 直ニ師範學校ニ願出タルモノ

第三條 尋常師範學校ニ於テハ入學志願者ノ身體學力等ヲ檢定シテ之ヲ選フヘシ
身體ノ檢定ハ府縣立病院或ハ他ノ適當ノ醫員ヲシテ施行セシメ學力ノ檢定ハ高等小學校ノ學科程度ニ依テ之ヲ施行スヘシ

第四條 生徒ノ募集ハ毎年一度學期ノ始ニ於テシ其期日及員數ハ其都府前以テ廣告スヘシ

第五條 入學ヲ許可セントスルトキハ初メ試驗生一シテ一箇月以上三箇月以内假

ニ入學セシメ其實性品行等ヲ審察シ適當ト認ムルモノニ限リ本入學ヲ許スヘシ

第六條 入學志願者ノ願書履歷書及履歷書ハ左式ニ依テ之ヲ出スヘシ

第一種志願者願書式

某志願者ノ名ニ依リ小學校教員志願ニ付御校へ入學ノ許可ヲ得度所部區長並學務主任並其親類縁也

何府縣何國何郡區何町村何番地居住誰方同居

何府縣華士族平民

戶主誰長男女弟妹等

入學志願者 姓

名 印

當何年何月幾年幾月

何師範學校長某殿

薦學書式

族籍

姓

名

右ノ者儀豫テ當郡區内小學校教員志願ニ付今般御校生徒ノ募集ニ應シ入學志願ノ旨申出候尤同人儀ハ別紙履歷書ノ通何年何月當郡區何小學校卒業生ニシテ爾來何職ニ從事シ若クハ何郡區何學校ニ於テ何科ヲ修メ云々ト其資性品行ニ付テハ師範學校令第一條但書ノ目的ヲ達スルニ適スルモノト認メ候ニ付薦學候也

年月日

何郡區長

姓

名

印

何師範學校長某殿

第二種志願者願書式

某志願者ノ名ニ儀小學校教員志願ニ付御校へ入學ノ許可ヲ得度尤某ノ身上ニ關

一、何府縣何國何郡區何町村何番地居住誰方同居

何府縣何國何郡區何町村何番地居住誰方同居

何府縣華士族平民

戶主誰長男女弟妹等

入學志願者 姓

名 印

當何年何月幾年幾月

何府縣何國何郡區何町村何番地居住

何府縣華士族平民

保證人 姓

名 印

何師範學校長某殿

前書保證人ハ保證ノ責ニ任シ得ル者ト認ム

何府縣何國何郡區長

姓

名

印

年月日

履歷書式

履歷書

何府縣何國何郡區何町村何番地居住誰方同居

何府縣華士族平民

生所 何縣何郡何村

戸主誰長男女弟妹等

姓

名 印

何年何月生

一何年何月ヨリ何年何月マテ何所何學校ニ於テ何科修業

卒業證書ノ寫

何々

一何年何月ヨリ何年何月マテ何所何職ニ従事ス

一何年何月ヨリ何年何月マテ何學校補助員ニ雇ハル

一何年何月何所ニ於テ何職ニ付何賞ヲ受ケ或ハ何罰ヲ受ク

一何々

年 月 日

第七條 保證人ハ其府縣下ニ本籍ヲ定メ現ニ入學志願者居住ノ郡區内ニ居住スル

戸主タルヘシ

但シ師範學校長ニ於テ保證人ヲ不十分ト認ムルトキハ之ヲ易ヘシムルコトアルヘシ

第八條 保證人ノ住所師範學校ノ所在地ヨリ一里以外ニアルモノハ別ニ其以內ニ

居住者クハ寄留スルモノヲ以テ保證人代理者トナシ豫テ其學校ニ届置不時急劇

ノ用ニ應スヘシ

但師範學校長ニ於テ保證人代理者ヲ不十分ト認ムルトキハ之ヲ易ヘシムルコトアルヘシ

第九條 尋常師範學校生徒ノ員數ハ左表ノ如シ

尋常師範學校生徒員數表

府縣名	生徒數	府縣名	生徒數
東京	一〇〇	青森	一二〇
京都	一五〇	山形	一五〇
大阪	二四〇	秋田	一五〇
神奈川	一二〇	福井	一四〇
兵庫	二〇〇	石川	一五〇
長崎	一二〇	富山	一四〇
新潟	二四〇	鳥取	一四〇
埼玉	一五〇	嶋根	一四〇
群馬	一四〇	岡山	一八〇

○尋常師範學校卒業生服務規則
 ○文部省令第十一號 (明治十九年五月二十八日)
 勅令第十三號師範學校令第八條ニ基キ尋常師範學校卒業生服務規則ヲ定ムルニ
 左ノ如シ

- 尋常師範學校卒業生服務規則
- 第一條 尋常師範學校卒業生ノ服務年限ハ卒業證書受得ノ日ヨリ男子ハ十箇年女子ハ五年トシ其間教職ニ從事スルノ義務ヲ有スルモノトス
 - 第二條 尋常師範學校卒業生ハ卒業證書受得ノ日ヨリ男子ハ十箇年女子ハ二箇年間其府知事縣令指定ノ學校ニ奉職スルノ義務ヲ有スルモノトス
 但郡區長ノ薦學ニ係ル生徒ハ卒業證書受得ノ日ヨリ五箇年間其郡區長指定ノ小學校ニ奉職スルノ義務ヲ有スルモノトス
 - 第三條 第一條第二條ノ義務ヲ盡ス能ハサルノ事故アルモノハ其理由ヲ具シテ府知事縣令ノ指揮ヲ請フヘシ
 - 第四條 第一條第二條ノ義務ヲ終ヘタルモノハ其經歷書ヲ具シテ其府縣廳ニ届出ヘシ
 - 第五條 謂ハレナク第一條第二條ノ義務ヲ盡サ、ルモノ或ハ服務年限内ニ於テ品行不正ニシテ其職務ヲ免シタルモノアトキハ其都府知事縣令之ヲ文部大臣

千	葉	一五〇	廣	嶺	一八〇
茨	城	一四〇	山	口	一五〇
朽	木	一〇〇	和歌山		一四〇
三	重	一五〇	德	嶋	一四〇
愛	知	二〇〇	愛媛		二〇〇
靜	岡	一五〇	高	知	一五〇
山	梨	一〇〇	福	岡	二〇〇
滋	賀	一〇〇	大	分	一四〇
岐	阜	二〇〇	佐	賀	一〇〇
長	野	二〇〇	熊	本	一五〇
宮	城	一〇〇	宮	崎	一〇〇
福	嶋	一八〇	鹿	嶋	一五〇
岩	手	一五〇			

北海道及沖繩縣ハ追テ之ヲ定ムヘシ
 第十條 郡區長ノ薦學ニ係ル生徒ノ員數ハ郡區長ノ所轄區域毎ニ府知事縣令之ヲ定ムヘシ
 第十一條 郡區長ノ薦學ニ關スル方法ハ府知事縣令之ヲ定ムヘシ

ニ具申スヘシ
第六條 府知事縣令ハ服務規則ニ關スル細則ヲ定ムルコトヲ得

尋常師範學校尋常中學校高等女學校教員免許規則

○文部省令第二十一號 (明治十九年十二月二十二日)

尋常師範學校尋常中學校及高等女學校教員免許規則ヲ定ムルコト左ノ如シ

尋常師範學校尋常中學校及高等女學校教員免許規則

第一條 尋常師範學校尋常中學校及高等女學校教員免許狀ハ高等師範學校卒業生

及丁年以上ニシテ文部省ノ檢定ヲ經タルモノニ之ヲ授與スルモノトス

第二條 高等師範學校ノ男子師範學科卒業生ニハ尋常師範學校尋常中學校及高等

女學校ノ教員免許狀ヲ授與シ女子師範學科卒業生ニハ尋常師範學校女子部及高等

女學校ノ教員免許狀ヲ授與シ体操專修科卒業生ニハ体操ノ教員免許狀ヲ授與ス

第三條 高等師範學校ノ卒業生ニアラスシテ某學科ノ教員免許狀ヲ得ント欲スル

者ハ文部省ノ檢定ヲ受クヘシ

第四條 檢定ハ文部大臣檢定委員ヲシテ之ヲ施行シヨム

第五條 檢定ノ要目左ノ如シ

一學力

一品行

廿年文
令第十
二號十
二年同
第四號
加改日
ノ日退
面

一身體

第六條 學力ノ檢定ハ試驗ニ依ル

但内外國高等學校卒業生等ハ檢定委員ニ於テ教員タルニ適スヘキ學力アリト

認ムルモノニ限リ特ニ本文ノ例ニ依ラサルコトアルヘシ

第七條 試驗ハ尋常師範學校尋常中學校及高等女學校ノ學科中受檢者志願ノ學科

ニ就テ之ヲ施行シ該學科教員タルニ適スルヤ否ヲ判ス

第八條 身體ノ檢定ハ檢査ニ依ル

第九條 檢定ヲ受ケント欲スルモノハ族籍姓名宿所生年月及志願ノ學科ヲ記シ

ル願書ニ左ノ書面ヲ添ヘ文部省宛地方廳ニ差出スヘシ北海道廳長官府縣知事ハ

本人ノ品行ニ付意見ヲ付記シテ文部大臣ニ差出スヘシ

但檢定方出願ノ時期ハ文部大臣之ヲ定メテ告示スル者トス

一學業業務賞罰等ノ履歷ニ係ル書面

一學業證書免狀ノ寫

第十條 檢定ヲ受ケント欲スルモノハ檢定料貳圓ヲ納ムヘシ

但檢定料ハ願書ト共ニ地方廳ニ差出スヘシ其既ニ差出シタル檢定料ハ願書ト

ナシ若クハ試驗ニ應セサルトキト雖モ之ヲ還付セサルモノトス

第十一條 免許狀ハ分テ一等二等三等トシ初メテ授與スル免許狀ハ三等トス又

第六等但書ニ依リ授與スル免許狀ハ無等トス其既ニ得タル免許狀ヨリ高等ノモノヲ得ント欲スルモノ及無等免許狀ヲ有スルモノニシテ相當ノ有等免許狀ヲ得ント欲スルモノハ更ニ檢定ヲ受クヘシ

但一等免許狀ハ二等免許狀ヲ有シ五箇年以上二等免許狀ハ三等免許狀ヲ有シ

二箇年以上教職ニ從事シ其性格能幹超衆ノモノニ限リ授與スルモノトス

第十二條 免許狀ヲ受クルモノハ高等師範學校卒業生ヲ除クノ外免許料金壹圓ヲ納ムヘシ

第十三條 免許狀ヲ毀損亡失シ若クハ姓名ヲ變更シタルカ爲メ其舊換ヲ請フモノハ書換料金壹圓ヲ納ムヘシ

第十四條 左ノ一項若クハ數項ニ觸ルモノハ免許狀ヲ授與セズ又既ニ授與シタルモノト雖モ之ヲ沒收ス

但特別ノ事情アルモノハ本文ノ例ニ依ラサルコトアルヘシ

一新法ニ依リ輕重禁錮以上ノ刑ニ處セラレ若クハ信用又ハ風俗ヲ害スル罪ヲ犯

シテ罰金ヲ刑ニ處セラレ若クハ監視ニ付セラレタルモノ但信用又ハ風俗ヲ害

スル罪ニアラサルモノヲ犯シ罪金ヲ納ムルコト能ハスシテ輕禁錮ノ刑ヲ受ケ

タルモノハ此限ニアラス

一賭博犯處分規則ニ依リ懲罰ニ處セラレタルモノ

一身代限ノ處分ヲ受ケ未タ辨償ノ義務ヲ終ヘサルモノ

一荒亂暴激等總テ教員タルノ面目ニ關スル所行アルモノ

一舊法ニ依リ懲役若クハ禁錮若クハ鎖錮ノ刑ニ處セラレタルモノ

一贖金罰金ヲ納ムルコト能ハスシテ本文ノ刑ヲ受ケタルモノハ此限リエアラ

ス
一前項ノ處刑ニ處セラレ存留養親老小癡疾婦女等ノ故ヲ以テ收賄ヲ聘サレタルモノ

第十五條 前條ノ處分ヲ要スルモノアルトキハ北海道廳長官府縣知事ヨリ文部大臣ニ具申スヘシ

免許狀様式

何等免許狀 (第六條但書ニ依リ授與スルモノハ等ヲ付セス)

族籍

姓

名

生年月

右何學校何科教員タルコトヲ免許ス

文部大臣勅諭姓名印

年

文部
省印

部印

番號

輪廓ハ高等師範學校卒業生ニ授與スルモノハ紅色トシ第六條ニ依
リ授與スルモノハ綠色トシ第六條但書ニ依リ授與スルモノハ藍色
トス

○同上發令前授與シタル卒業証狀効力

○文部省令第二十二號 (明治十九年十二月二十二日)

文部省令第二十一號尋常師範學校尋常中學校及高等女學校教員免許規則發令前文
部省ニ於テ授與シタル中學校師範學校教員免許狀及東京師範學校ニ於テ授與シ
タル中學校師範學校卒業證書ハ尋常師範學校尋常中學校及高等女學校教員免許狀ト同
一ノ効チ有スルモノトス

○尋常師範學校ノ女生徒ニ課スヘキ學科及程度

○文部省令第八號 (明治二十二年十月二十五日)

明治十九年(五月)文部省令第九號尋常師範學校ノ學科及程度第一條中家事ノ二
字及同條但書全文第二條中家事ニ關スル項第五條授業時間配當表中家事及其授業
時數並ニ女生徒ニ課スル音樂體操ノ時數ヲ刪除シ更ニ尋常師範學校ノ女生徒ニ課
スヘキ學科及程度ヲ定ムルコト左ノ如シ

尋常師範學校ノ女生徒ニ課スヘキ學科及程度

第一條 尋常師範學校ノ女生徒ニ課スヘキ學科ハ倫理教育國語數學地理歷史理科
家事習字圖書音樂體操トス

第二條 各學科ノ程度左ノ如シ

倫理 人倫道德ノ要旨

教育 總論智育體育ノ理學校ノ設置編制管理ノ方法教育ニ關スル本邦法

令教授ノ原理各學科ノ教授方法及實地授業

國語 日本ノ文法文學ノ要畧及作文

數學 筆算ハ命位記數四則分數小數比例利息算自乘法開平開立求積法珠算ハ

加減乘除及四則雜題

幾何ノ大意

地理歷史 地理ハ總論日本地誌外國地誌ノ要畧及地文ノ概論

歷史ハ日本歴史及外國歴史ノ要略
 理科 博物生理及物理化學ノ要略
 家事 衣食住作法育兒等ニ關スル事項簿記載
 習字圖書 習字ハ楷書行草書

圖書ハ自任書法及用器書法ノ要略
 音樂 單音唱歌複音唱歌樂器用法及音樂上ノ名稱記號旋律和聲拍子等ノ要略
 體操 普通體操

第三條 尋常師範學校女生徒ノ修業年限ヲ三箇年トシ一學年ヲ以テ一學級トス
 第四條 尋常師範學校ノ女生徒ノ授業時限ハ一年四十週一週三十一時以上トス
 第五條 各學科授業ノ時間配當ハ左表ニ依ルヘシ

尋常師範學校ノ女生徒ニ課スヘキ學科授業時間配當表

國語	算術	倫理	年		
			第一	第二	第三
五	三	一	一	一	一
四	五	一	一	一	一
四	六	一	一	一	一
	二八				

數學	地理	歷史	理科		家事			習字	圖書	音樂	體操
			博物生理	物理化學	簿記	縫	裁				
三	四	二	二	一	一	一	三	四	二	三	
三	二	二	二	二	一	一	三	三	二	三	
三	二	二	三	三	二	二	三	三	二	三	

○中學校令

朕中學校令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

(明治十九年四月九日)

勅令第十五號

中學校令

- 第一條 中學校ハ實業ニ就カント欲シ又ハ高等ノ學校ニ入ラント欲スル者ニ須要ナル教育ヲ爲ス所トス
- 第二條 中學校ヲ分チテ高等尋常ノ二等トス高等中學校ハ文部大臣ノ管理ニ屬ス
- 第三條 高等中學校ハ法科醫科工科文科理科農業商業等ノ分科ヲ設クルコトヲ得
- 第四條 高等中學校ハ全國ニ北海道沖繩縣ヲ除クテ五區ニ分置シ每區ニ一ヶ所ヲ設置ス其區域ハ文部大臣ノ定ムル所ニ依ル
- 第五條 高等中學校ノ經費ハ國庫ヨリ之ヲ支辨シ又ハ國庫ト該學校設置區域内ニ在ル府縣ノ地方稅トニ依リ之ヲ支辨スルコトアルヘシ但此場合ニ於テハ其管理及經費負擔ノ方法等ハ別ニ之ヲ定ムヘシ
- 第六條 尋常中學校ハ各府縣ニ於テ便宜之ヲ設置スルコトヲ得但其地方稅ノ支弁又ハ補助ニ係ルモノハ各府縣一箇所ニ限ルヘシ
- 第七條 中學校ノ教科書ハ文部大臣ノ定ムル所ニ依ル

第八條 中學校ノ教科書ハ文部大臣ノ檢定ヲ受ケルモノニ限ルヘシ

第九條 尋常中學校ハ區町村費ヲ以テ設置スルコトヲ得ス

○尋常中學校ノ學科及程度

○文部省令第十四號 (明治十九年六月二十二日)

勅令第十五號中學校令第七條ニ基キ尋常中學校ノ學科及其程度ヲ定ムルコト左ノ如シ

尋常中學校ノ學科及其程度

- 第一條 尋常中學校ノ學科ハ倫理國語漢文第一外國語第二外國語農業地理歷史數學博物物理化學習字圖畫唱歌及体操トス第一外國語ハ通常英語トシテ第二外國語ハ通常獨語若クハ佛語トス但第二外國語ト農業トハ其一ヲ缺クヲ得又唱歌ハ當分ノヲ缺クモ妨ケナシ
- 第二條 尋常中學校ノ修業年限ハ五箇年トス
- 第三條 尋常中學校ニ於テハ五級ヲ設ケ每級ノ授業期限ヲ一年トシ一年內ニ於テハ凡四十週授業スヘキモノトス
- 第四條 尋常中學校ノ各學科授業ノ時數凡左ノ如シ

第五級 第一級 第二級 第三級 第四級 第五級

第一年 第二年 第三年 第四年 第五年

倫	國語及漢文	第一外國語	第二外國語	地	歷	數	博	物	化	習	圖
理	文	語	語	理	史	學	物	理	學	字	畫
一	五	六	六	一	一	四	一			二	二
一	五	六	六	二	一	四				一	二
一	五	七	七	二	二	四	二				二
一	三	五	四	一	一	四				二	二
一	二	五	三			三	三	三			一

計	操	歌
二八	三	二
二八	三	二
二八	三	二
二八	五	
二八	五	

第二外國語ト農業トナ並ヘ置クトキハ其一ヲ生徒ニ課スルモノトス
 第五條 尋常中學校ノ各學科ノ程度左ノ如シ

- 倫理 人倫道德ノ要旨
- 國語及漢文 漢字交リ文及漢文ノ講讀書取作文
- 第一外國語 讀方譯解講讀書取會話文法作文翻譯
- 第二外國語 讀法譯解書取會話作文
- 農業 農業初步及實業
- 地理 地文及政治地理
- 歷史 日本及外國ノ歷史
- 數學 算術 比例及利息算
- 諸則ノ理由

二十一年
第一號
廿二年
文令第
三號
附
面

代數 釋義整數四則分數一治方程式自乘開平開立指數根數二次方程式準二次
 方程式比例等差數等比級數調和級數順列組合二項法對數
 幾何 定義公理直線圓積平面立體角角三角球圓錐圓球
 三角法 角度三角法比對數表用法三角形距離等測法球面三角
 博物 通常ノ動植物ノ示教
 植物 觀察解析記述分類大意及植物ノ生活上緊要ナル現象
 動物 觀察記述分類大意諸部類ノ相互及外物ノ關係
 人體ノ生理及衛生
 物理 物理上ノ緊要ナル現象及定律
 化學 普通ノ化學上ノ現象緊要ナル元素及無機化合物ノ性質
 習字 楷行草三體ノ書寫及細字ノ速寫
 圖畫 自在畫法及用器畫法
 唱歌 單音及複音唱歌
 體操 普通及兵式體操
 第六條 尋常中學校ノ第五級ニ入ルコトヲ得ヘキモノハ品行端正身體健康年齡滿
 十二年以上ニシテ小學校又ハ其他ノ學校ニ於テ該級ノ課程ヲ修ムルニ堪フヘキ
 學力ヲ得タルモノトス

其他ノ級ニ入ルコトヲ得ヘキモノハ前項ノ例ヨリ推シテ相當ノ年齡ニ達シ其設
 程ヲ修メ得ヘキ學力ヲ有シ且品行端正身體健康ナルモノトス
 第七條 尋常中學校ニ於テハ土地ノ情況ニ因リ商業工業ノ科ヲ設クコトヲ得
 ○小學
 ○小學校令
 朕小學校令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
 御名 御璽
 (明治十九年四月九日)
 勅令第十四號

小學校令
 第一條 小學校ヲ分チテ高等尋常ノ二等トス
 第二條 小學校ノ設置區域及位置ハ府知事縣令ノ定ムル所ニ依ル
 第三條 兒童六年ヨリ十四年ニ至ル八箇年ヲ以テ學齡トシ父母後見人等ハ其學齡
 兒童ヲレテ普通教育ヲ得セシムルノ義務アルモノトス
 第四條 父母後見人等ハ其學齡兒童ノ尋常小學科ヲ卒ラサル間ハ就學セシムヘシ
 其就學ニ關スル規則ハ文部大臣ノ認可ヲ經テ府知事縣令ノ定ムル所ニ依ル
 第五條 疾病家計困窮其他止ムヲ得サル事故ニ由リ兒童ヲ就學セシムルコト能ハ
 スト認定スルモノニハ府知事縣令其期限ヲ定メテ就學猶豫ヲ許スコトヲ得

- 第六條 父母後見人等ハ小學校ノ經費ニ充ツル爲メ其兒童ノ授業料ヲ支辨スヘキ
モノトス其金額ハ府知事縣令ノ定ムル所ニ依ル
- 第七條 寄附金及其他ノ收入金アリテ小學校ノ經費ニ供スルトキハ其收入及支出
ノ方法ハ府知事縣令ノ定ムル所ニ依ル
- 第八條 授業料及寄附金等ヲ以テ小學校ノ經費ヲ辨シ能ハサル場合ニ於テハ區町
村會ノ議決ニ依リ區町村費ヨリ其不足ヲ補フコトヲ得
- 第九條 小學校教員ノ俸給旅費ハ府知事縣令ノ定ムル所ニ依ル
- 第十條 小學校資金ノ收入及支出ハ其管理者ヨリ毎三箇月府知事縣令ニ報告スヘ
ク
- 第十一條 小學校ニ屬スル資産ノ管理ニ關スル規程ハ府知事縣令ノ定ムル所ニ依
ル
- 第十二條 小學校ノ學科及其程度ハ文部大臣ノ定ムル所ニ依ル
- 第十三條 小學校ノ教科書ハ文部大臣ノ檢定シタルモノニ限ルヘシ
- 第十四條 私立學校ニ於テ小學校ト均シキ普通教育ヲ兒童ニ施サントスルモノハ
豫メ府知事縣令ノ認可ヲ經ヘシ
- 第十五條 土地ノ情況ニ依リテハ小學簡易科ヲ設ケテ尋常小學科ニ代用スルコト
ヲ得但其經費ハ區町村費ヲ以テ之ヲ支辨スヘシ

第六條 小學校ノ學科及其程度ハ文部大臣ノ定ムル所ニ依ル

○文部省令第八號 (明治十九年五月二十五日)

- 勅令第十四號小學校令第十二條ニ基キ小學科及其程度ヲ定ムルノ左ノ如シ
- 第一條 尋常小學科ノ修業年限ヲ四箇年トシ高等小學科ノ修業年限ヲ四箇年トス
- 第二條 尋常小學科ノ學科ハ修身讀本算術體操トス土地ノ情況ニ因テハ
圖書唱歌縫女兒ノ一科ヲクハ數科ヲ加フルコトヲ得
- 第三條 高等小學科ノ學科ハ修身讀本算術地理歴史理科圖書唱歌體操裁
縫(女兒)トス土地ノ情況ニ因テハ英語農業手工商業ノ一科ヲクハ二科ヲ加フル
コトヲ得唱歌ハ之ヲ缺クモ妨ケナシ
- 第四條 土地ノ情況ニ因テハ小學校ニ補習科ヲ設ケ六箇月以上十二箇月以內兒童
ヲシテ既修ノ學科ヲ補習シ且之ヲ補修モシムルコトヲ得
- 但尋常小學校ニ於テハ修業年限ノ外高等小學校ニ於テハ修業年限ノ内ニテ之
ヲ設クヘシ
- 第五條 尋常小學校ニ於テハ兒童ノ數八十八以下高等小學校ニ於テハ六十八以下
ハ教員一員ヲ以テ之ヲ教授メルコトヲ得

十九年
文令第
廿五號
同第十
年第一
號
二號改
正
而

第六條 小學校ニ於テ教員二人ヲ置クトキハ二學級ヲ設クハ一兒童ノ數百二十八
ヲ超フルトキハ三學級トナスルシ

但教員三人以上ヲ置クトキハ本文ニ準シテ學級ヲ設クヘシ

第七條 小學校ハ一箇年內凡八週間及日曜日六祭日祝日ハ休業スヘシ

但土曜日ハ午後休業ニスルコトヲ得

第八條 小學校ノ授業時間ハ毎日凡五時トス

第九條 各學科ノ毎週授業時間凡左ノ如シ

修身	一 時 三 分	高等小學校	一 時 三 分
讀書	一 時 三 分	高等小學校	一 時 三 分
作文	十 四 時	高等小學校	十 時
習字	十 四 時	高等小學校	十 時
算術	六 時	高等小學校	六 時
地理	六 時	高等小學校	六 時
歷史	六 時	高等小學校	六 時
理科	六 時	高等小學校	六 時
體操	六 時	高等小學校	六 時
音樂	六 時	高等小學校	六 時
裁縫	六 時	高等小學校	六 時

第十條 各學科ノ程度左ノ如シ

修身 小學校ニ於テハ内外古今人士ノ善良ノ言行ニ就キ兒童ニ親切ニシテ且理
解シ易キ簡易ナル事柄ヲ談話シ日常ノ作法ヲ教ヘ教員身自ラ言行ノ模範
トナリ兒童ヲシテ善ク之ニ習ハシムルヲ以テ專要トス

讀書 尋常小學校ニ於テハ假名ノ單語短句簡易ナル漢字交リノ短句及地理歴史
理科ノ事項ヲ交ヘシ漢字交リ文高等小學校ニ於テハ稍之ヨリ高キ漢字
交リ文

作文 尋常小學校ニ於テハ假名ノ單語短句簡易ナル漢字交リノ短句漢字交リ文
口上書類及日用書類高等小學校ニ於テハ漢字交リ文及日用書類

習字 尋常小學校ニ於テハ假名日用文字口上書類及日用書類(行書)高等小學校
ニ於テハ日用文及日用書類(楷書行書草書)

算術 尋常小學校ニ於テハ珠算ヲ用ヒ加法減法乘法除法普通ノ度量衡貨幣日用
適切ノ雜題及暗算高等小學校ニ於テハ筆算ヲ用ヒ算用數字簡易ナル命題
記數法減法乘法除法分數小數比例利息算雜題簿記ノ概略及暗算

體操 尋常小學校ニ於テハ假名ノ單語短句簡易ナル漢字交リノ短句漢字交リ文
口上書類及日用書類高等小學校ニ於テハ漢字交リ文及日用書類
習字 尋常小學校ニ於テハ假名日用文字口上書類及日用書類(行書)高等小學校
ニ於テハ日用文及日用書類(楷書行書草書)
算術 尋常小學校ニ於テハ珠算ヲ用ヒ加法減法乘法除法普通ノ度量衡貨幣日用
適切ノ雜題及暗算高等小學校ニ於テハ筆算ヲ用ヒ算用數字簡易ナル命題
記數法減法乘法除法分數小數比例利息算雜題簿記ノ概略及暗算

尋常小學科ニ於テ筆算ヲ用フルトキハ算用數字簡易ナル命位記數加法減法乘法除法普通ノ度量衡貨幣日周適切ノ雜題及暗算トキ高等小學科ニ至リ分數小數比例利息算開平開立求積雜題簿記ノ概略及暗算トス

地理

又尋常小學科ニ於テハ筆算珠算ヲ併置スルモ妨ケナシ
地理ハ學校近傍ノ地形其郷土其郡區府縣本邦地理地球ノ形狀晝夜四季ノ原由大洋大洲ノ名目等及外國地理ノ概畧

歷史

歷史ハ建國ノ體制神武天皇ノ即位王朝ノ政治藤原氏ノ專權朝府ノ創立徳川氏ノ治績王政維新外國交通貿易及世態文物人情風俗ノ變遷等ニ關シ重要ナル事柄及忠良賢哲ノ事蹟

理科

理科ハ果實動物菜草草木人體禽獸蟲魚金銀銅鐵等人生ニ最モ緊切ノ關係アルモノ日月星空氣溫度水蒸氣雲霧霜雪霰氷雷電風雨火山地震潮汐燃燒銷腐敗唧筒噴水音響返響時計寒暑計晴雨計蒸氣器械眼鏡色虹槓杆滑車天秤磁石電信機等日常兒童ノ目擊シ得ル所ノモノ

圖畫

唱歌

体操

圖畫ハ自在畫及用器畫
唱歌ハ單音唱歌複音唱歌
体操ハ幼年ノ兒童ニハ遊戲滑稽ナル兒ニハ經体操男兒ニハ兵式体操ヲ

裁縫

裁縫ハ選針法縫半單物等通常衣服類ノ縫方裁方及刺綴方

○小學校教員免許規則

○文部省令第十二號 (明治十九年六月二十一日)

勅令第十六號諸學校通則第四條ニ基キ小學校教員免許規則ヲ定ムルコト左ノ如ク

小學校教員免許規則

第一條 小學校教員免許狀ハ師範學校卒業生及男子ハ丁年以上女子ハ齡十八年以上ニシテ小學校教員學力檢定試驗ニ及第シタルモノニ之ヲ授與スルモノトス

但尋常師範學校女子ノ卒業生及小學校教員學力檢定試驗ニ及第シタル女子ニハ尋常小學校(男兒女兒)ノ教員免許狀若クハ高等小學校(女兒)ノ教員免許狀

ヲ授與ス

第二條 小學校教員免許狀ハ普通免許狀地方免許狀ノ二種トス

第三條 普通免許狀ハ文部大臣ヨリ授與シ全國ニ通シテ有効ノモノトス

第四條 地方免許狀ハ府知事縣令ヨリ授與シ其管轄地方ニ限り有効ノモノトス

第五條 普通免許狀ハ無期有效ノモノトス

第六條 地方免許狀ハ有期若シハ無期有效ノモノトス

第七條 有期ハ地方免許狀ハ五箇年ヲ以テ一期トス期滿ル與ニ同義ノ經歷ニ依リ

適任ノモノト認ムルトキハ更ニ免許狀ヲ授與スルモノトス

適任ノモノト認ムルトキハ更ニ免許狀ヲ授與スルモノトス

廿五年文
令第五
號廿二
年同第
十一號
追加ノ
面

第八條 有期ノ地方免許狀ヲ有シ五箇年以上勤務ノモノニハ其經歷ニ依リ適任ノモノニ限リ無期ノ地方免許狀ヲ授與スルモノトス

第九條 普通免許狀ハ高等師範學科卒業生若クハ地方免許狀ヲ有シテ五箇年以上勤務シ學術授業トモ超衆ノモノニ之ヲ授與スルモノトス

第十條 有期ノ地方免許狀ハ尋常師範學科卒業生若クハ小學校教員學力檢定試験ニ及第シタルモノニ之ヲ授與スルモノトス

第十一條 小學校教員學力檢定試験ハ尋常師範學科及其程度ニ據リテ之ヲ施行ス

但一科若クハ數科ニ限リタル教員學力檢定試験モ本文ニ準スヘシ

第十二條 左ノ一項若クハ數項ニ觸ル、者ニハ免許狀ヲ授與セス又既ニ授與シタルモノト雖モ之ヲ沒收スヘシ

但本文免許狀ヲ沒收シタルモノアルトキハ府知事縣令ヨリ其族籍姓名并事由ヲ具シテ文部大臣ニ開申スヘシ

一 新法ニ依リ輕重禁錮以上ノ刑ニ處セラレ若クハ信用又ハ風俗ヲ害スル罪ヲ犯シテ罰金ノ刑ニ處セラレ若クハ監視ニ付セラレタルモノ但信用又ハ風俗ヲ害スル罪ニアラサルモノヲ犯シ罰金ヲ納ムルコト能ハスシテ輕禁錮ノ刑ヲ受ケタルモノハ此限ニアラス

一 賭博犯罪規則ニ依リ懲罰ニ處セラレタルモノ

一 身代限ノ處分ヲ受ケ未ダ辨償ノ義務ヲ終ヘサルモノ

一 荒亂暴激等總テ教員タルノ面目ニ關スル所行アルモノ

一 舊法ニ依リ懲役若クハ禁錮若クハ鎖錮ノ刑ニ處セラレタルモノ

但贖金罰金ヲ納ムルコト能ハスシテ本文ノ刑ヲ受ケタルモノハ此限ニアラス

一 前項ノ刑ニ處セラレ存留養親老小癩疾婦女等ノ故ヲ以テ收贖ヲ聽サレタルモノ

第十三條 前條ノ一項若クハ數項ニ觸ル、モノト雖モ府知事縣令ニ於テ特ニ小學校教員ヲシメントスルトキハ其族籍姓名並事由ヲ具シテ文部大臣ノ認可ヲ經ヘシ

第十四條 小學簡易科教員及小學校授業生免許規則ハ府知事縣令之ヲ定ムヘシ

第十五條 小學校教員學力檢定試験ヲ受クルモノ及小學校教員免許狀ヲ受クルモノハ其手数料ヲ納ムヘシ

但師範學科卒業ノ際免許狀ヲ受クルモノハ手数料ヲ納ムルヲ要セス

第十六條 小學校教員學力檢定試験ニ係ル細則ハ府知事縣令之ヲ定ムヘシ

第十七條 小學校教員免許狀ノ書式左ノ如シ

有期免許狀書式

地方免許狀

族 籍

姓

何年何月生

右ハ明治何年何月何日ヨリ明治何年何月何日マテ五箇年間小學校(何科)教員タルコトヲ免許ス

明治何年何月何日

府知事縣令位勳爵 姓名印

番 號

無期免許狀書式

地方免許狀

族 籍

姓

何年何月生

右ハ小學校(何科)教員タルコトヲ免許ス

明治何年何月何日

府知事縣令位勳爵 姓名印

番 號

普通免許狀

族 籍

姓

何年何月生

右ハ小學校(何科)教員タルコトヲ免許ス

明治何年何月何日

文部大臣位勳爵 姓名印

番 號

同上發令前授與ノ免許狀効力

○文部省令第十三號 (明治十九年六月二十一日)

文部省令第十二號小學校教員免許規則發令前ニ於テ授與シタル小學校教員免許狀ハ從前ノ通有效ノモノトス

但小學初等科免許狀ヲ有スルモノハ小學簡易科小學中等科免許狀ヲ有スルモノハ尋常小學科以下小學高等科免許狀ヲ有スルモノハ高等小學科以下ノ教員タルコトヲ得

○同上發令前授與シタル卒業証効力

○文部省令第二十三號 (明治十九年十二月二十二日)

文部省令第廿二號小學校教員免許規則發令前東京師範學校及府縣立師範學校ニ於テ授與セラル小學校教員免許證書ハ其有効年限間小學校教員免許狀ト同一ノ効チ有スルモノトス

但初等師範學科卒業證書チ有スルモノハ尋常小學校以下中等及高等師範學科卒業證書ヲ有スルモノハ高等小學校以下ノ教員タルコトヲ得

○小學校教員普通免許狀ノ手数料

文部省告示第一號 (明治十九年十一月十六日)

文部省令第十二號第九條ニ據リ授與スル小學校教員普通免許狀ノ手数料ハ金壹圓ト定メ該免許狀書換ノ手数料ハ金五拾錢ト定ム

○從前授與ノ免許狀及卒業證書ノ有効年限延期スルコトヲ得

○文部省令第六號 (明治二十年八月四日)

明治十九年(六月)文部省令第十三號ヲ以テ從前ノ類有効ノモノトナシタル小學校教員免許狀ヲ有スル者及明治十九年(十二月)文部省令第廿三號ヲ以テ小學校教員免許狀ト同一ノ効チ有スルモノトナシタル小學校教員普通證書チ有スルモノニシテ該免許狀若クハ卒業證書ノ有効期限ニ至リ猶教員タラント欲スルモノハ北海道廳長官府縣知事ニ於テ其勤務ノ經歷ヲ調査シ適任ト認メタルモノニ限り該免許狀書換ノ手数料ハ金五拾錢ト定ム

○地方官廳ニヨリ授與スル小學校教員免許狀ノ發給

地方ノ情況ニ依リテハ當分北海道廳長官府縣知事ハ小學校教員免許狀ヲ發給スル者ノ資格ヲ明治十九年(六月)文部省令第廿二號小學校教員免許規則ニ依ラス便宜檢定シテ相當ノ小學校教員假免許狀ヲ授與スルコトヲ得
但本文假免許狀ノ有効年限ハ四ヶ年以内ニ於テ之ヲ定ムヘシ

○公私立小學校教員用圖書採定方法

文部省訓令第三號 (明治二十年三月二十五日)

北海道廳
府縣

公私立小學校教員用圖書採定ノ方法左ノ通必得ヘシ

公私立小學校教員用圖書採定方法

第一條 北海道廳長官府縣知事ハ公私立小學校ノ教員用圖書ヲ新定又ハ更定セントスルトキハ其都度小學校教員用圖書審査委員ヲ設ケテ其事由ノ當否實施ノ時期等ヲ審議セシメ併セテ圖書ヲ採擇セシムヘシ
第二條 審査委員ハ左ノ諸員ヲ以テ組織スヘシ
一 該常備師範學校校長若シハ長補

二學務課員一名

三尋常師範學校教頭及附屬小學校上席訓導

四小學校教員三名

五該地方經濟上ノ情况ニ通スル者二名

第三條 北海道廳長官府縣知事ハ審査ニ係ル圖書ニ掲載スル所ノ事務ニ通スル教員等ヲシテ該圖書ノ採擇上ニ限リ審査委員ト同一ノ資格ヲ以テ便宜之ニ參與セシムルヘシ但一種類ノ圖書ニ付キ一名ニ限ルヘシ

第四條 審査委員ニ於テ審査上ニ關スル事項ヲ決定スルハ會議ニ依ルヘキ者トス

第五條 北海道廳長官府縣知事ハ審査委員中ニ就キ審査委員會ノ議長ヲ命ス

第六條 審査委員ハ自己及其親屬並其地方隨學務課員ノ著撰採述編纂校閱及出版等ニ係ル圖書ヲ採擇スルコトヲ得サルモトス但已ムテ得サル場合ニ於テハ北海道廳長官府縣知事ニ其事情ヲ詳具シ認可ヲ經テ本文ノ例ニ依ラサルコトヲ得

第七條 審査員ハ未タ文部大臣ノ檢定ヲ經サル圖書ト雖モ之ヲ採擇スルコトヲ得但北海道廳長官府縣知事ハ本文ニ依リ採擇セタル圖書ヲ新定又ハ更定ノ圖書ニ充ントスルトキハ豫メ文部大臣ノ檢定ヲ經ヘシ

廿一年
文訓令
第三號
改正ノ
面

官府縣知事ニ申報スヘシ

第九條 北海道廳長官府縣知事ニ於テ教科用圖書ヲ新定又ハ更定スルニハ一學科ニ就キ一種ノ圖書ヲ採擇スヘシ

但都鄙山海等土地ノ情况ニ依リ己ムテ得サル場合ニ於テハ一學科ニ就キ二種以上ノ圖書ヲ採擇スルモ妨クナシ

第十條 北海道廳長官府縣知事ハ教科用圖書ノ新定又ハ更定ヲ公布スル二箇月前ニ於テ其事由實施ノ時期圖書ノ目錄及第八條審査委員ノ申報又第六條但書第九條但書ノ場合ニ屬スル處分アルトキハ其事情ヲ具シ文部大臣ニ報告スヘシ

○從前授與セシ小學師範學科卒業證書教員免許狀ト同一ノ有効期限

○文部省令第七號 (明治二十二年十月二十五日)
明治十八年八月以後東京師範學校ニ於テ小學師範學科卒業ノ者又ハ明治十九年四月以後高等師範學校ニ於テ舊東京師範學校所定ノ小學師範學科卒業ノ者ニ授與シタル卒業證書ハ其證書面ニ記載ノ日ヨリ七箇年間小學校教員免許狀ト同一ノ効チ有フルモノトス

但有効ノ期滿ニ至リタル者ハ明治二十年(八月)文部省令第六號ニ準據スルコトヲ得又本文ノ證書チ有スル者コトヲ明治十九年(六月)文部省令第十二號小學校教員免許狀則第十二條ノ一項若クハ教員ニ關ル者ハ本文教員タルノ効力ヲ失

○小學簡易科要領

○文部省訓令第一號 (明治十九年五月二十五日)

北海
道
府

小學簡易科ハ左ノ要領ニ依リ土地ノ情況ヲ考ヘ其教則ヲ定ムヘシ

小學簡易科要領

一 修業年限 三ヶ年以内タルヘシ

但六箇月以上十二箇月以内ノ期限ヲ以テ補修科ヲ設クルコトヲ得

一 學科 讀書作文習字算術

但授業時間四時以上ナルトキハ修身體操ヲ加フルヲ得

一 學級 兒童六十人以下ノ場合ニ於テハ學級ヲ分ツコトヲ得ス其他ハ尋常小學校ニ準ス

一 授業時間 毎日二時ヨリ少カラヌ五時ヨリ多カラス

○ 雜

○ 諸學校通則

朕諸學校通則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

文部省
第三號
改正
加ノ面

御名 御璽

明治十九年四月九日

勅令第十六號

諸學校通則

第一條 師範學校ヲ除クノ外各種ノ學校又ハ書齋館ヲ設置維持スルニ足ルヘキ金額ヲ寄附シ其管理ヲ文部大臣又ハ府知事縣令ニ願出ルモノアルトキハ之ヲ許可シ官立又ハ府縣立ト同一ニ之ヲ認ムルコトヲ得但寄附人ノ望ニ依リ其名稱ヲ附スルコトヲ得

第二條 寄附金ハ其寄附人ヨリ指定セシ用途ノ外ニ支消スルコトヲ得ヌ

第三條 學校幼稚園書齋館等ノ設置變更廢止其府縣立ニ係ルモノハ文部大臣ノ認可ヲ經ヘク其區町村立ニ係ルモノハ府知事縣令ノ認可ヲ經ヘシ其私立ニ係ルモノハ設置變更ハ府知事縣令ノ認可ヲ經ヘク廢止ハ府知事縣令ニ上申スヘシ

第四條 凡教員ハ文部大臣若クハ府知事縣令ノ免許狀ヲ得タルモノナルヘシ

第五條 公立學校ノ用地ハ免稅タルヘシ

○公立學校職員名稱ヲ定メ判任ヲ以テ待遇

○訓令第三十五號 (明治十九年十一月廿八日)

公立學校職員ノ名稱ハ尋常中學校及等位ノ之ニ準スヘキ學校ニ於テハ學校長教諭

助教諭書記トシ小學校及等位ノ之ニ準スヘキ學校ニ於テハ學校長訓導トシ總テ判任ヲ以テ待遇スヘシ

○某學校ノ教員免許狀ヲ有スルモノノ諸學校以下ノ教員ヲハテ得

○文部省令第二十四號 (明治十九年十二月二十二日)

某學校ノ教員免許狀ヲ有スルモノハ等位ノ該學校ニ準スヘキ諸學校以下ノ教員ナルコトヲ得

○生徒卒業ノ片査定證書授與及師範學校生徒選抜方

○文部省訓令第十一號 (明治二十年八月六日)

北海 道 廳
府 縣

凡ソ學校ニ於テハ當ニ其生徒ノ學力ノミナラス兼テ人物ノ如何ニ注目シテ學力ト人物トヲ査定シ各尋常優等ノ二等トシ卒業ノトキニ至リ之ヲ證明スル證書ヲ授與セルムヘシ就中尋常師範學校生徒卒業ノ上高等小學校長ニ任シ若クハ高等師範學校生徒ニ選舉スルモノ、如キハ先ツ其人物ノ優等ナルモノヨリ之ヲ選抜スヘシ

○教科用圖書檢定制

○文部省令第二號 (明治廿年五月七日)

明治十九年(五月)文部省令第七號教科用圖書檢定制例ヲ廢シ師範學校小學校及中

學校教科用圖書ノ檢定ニ關スル規則ヲ定ムルコト左ノ如シ

教科用圖書檢定制

第一條 教科用圖書ノ檢定ハ止テ圖書ノ教科用タルニ弊害ナキコトヲ證明スルヲ旨トシ其教科用上ノ優劣ヲ問ハサルモノトス

第二條 圖書ノ出版者ハ該圖書ノ檢定ヲ文部省ニ請フコトヲ得

第三條 第二條ニ依リ檢定ヲ請フ者ハ圖書一種ニ付其目的トスル所ノ學校一種毎ニ該圖書二十部ノ定價ニ等シキ手数料及該圖書二部ヲ檢定願書ニ添ヘ地方廳ヲ經テ文部省ニ納ムヘシ但定價ヲ記載セサル圖書ニ就テハ手数料金十五圓ヲ納ムヘク又檢定ヲ得タル後定價ヲ増加シタルトキハ本文ノ例ニ準シ其差額ヲ追納スヘシ

第四條 第二條ニ依リ檢定ヲ請ヒタル圖書中瑣少ノ修正ヲ加フレハ檢定ヲ與ララルコトヲ得ヘシト認ムルモノアルトキハ其廉ヲ檢定出願者ニ指示スルコトアルヘシ

第五條 檢定シタル圖書ハ文部省ヨリ官報ヲ以テ其名稱、冊數、定價、目的トスル學校並學科ノ種類、版權免許又ハ出版屆ノ年月日並該圖書ニ記載スル所ノ著譯者及出版者ノ族籍住所姓名等ヲ廣告スヘシ

第六條 檢定ノ効力ハ檢定ヲ得タル後修正ヲ加ヘタル圖書ニ及ハサルモノトス

第七條 第五條ニ依リ廣告シタル定價、版權免許又ハ出版届ノ年月日並著譯者及出版者ノ族籍住所姓名等ニ異動ヲ生シ圖書中其記載方ヲ變更シタルトキ又ハ同條ニ依リ廣告シタル冊數ヲ變更シタルトキハ更ニ官報ヲ以テ其旨ヲ廣告スルコトヲ要ス

第八條 檢定ヲ得サリシ圖書ハ出版者ノ願ニ依リテハ其圖書、檢定ヲ得サリシ事由メ大要ヲ指示スルコトアルヘシ

第九條 檢定出願中ノ圖書若クハ檢定ヲ得タル圖書ニ修正ヲ加ヘ檢定ヲ請フ者ハ更ニ第三條ノ手数料ヲ納ムルコトヲ要セス

第十條 圖書ノ出版者ハ其檢定ヲ得タル圖書ニシテ第七條ノ變更アルニ會スルトキハ其事項ノ廣告ヲ文部省ニ請フヘシ

第十一條 檢定ヲ請ヒタル後其願下ヲナストキト雖モ其既ニ納メタル手数料、之ヲ還付セサルモノトス

第十二條 本規則ニ於テ修正ト稱スルハ圖書ノ名稱ヲ變更シ文章字句圖書ヲ增減若クハ校訂シ又ハ字體畫形ヲ變更シ又ハ註解附錄序跋ヲ加除若クハ變更スル等ノ場合ヲ包含スルモノトス

○同檢定條例ニ依リ檢定ヲ得タル圖書有効ノ件
○文部省令第三號 (明治二十年五月七日)

明治十九年(五月)文部省令第七號教科用圖書檢定條例ニ依リ檢定ヲ得タル教科用圖書ハ本年(五月)文部省令第二號教科用圖書檢定規則ニ依リ檢定シタルモノト同一ノ効ヲ有スルモノトス

○教員ニシテ集會條例ニ依リ處分ヲ受ケタル者等教員差止ノ件
○文部省令第十二號 (明治二十二年十二月二十日)

小學校及其他普通學校ノ教員ニシテ集會條例ニ依リ罰金ノ處分ヲ受ケタル者又ハ政黨ニ關係スル者ハ其情狀ニ依リ府縣知事ヨリ文部大臣ニ稟申シ該府縣内ニ於テ教員タルコトヲ差止ムヘシ

○第十七章 衛生

○第一款 種痘天然痘及傳染病中毒地方病

○種痘細則

○甲第十二號 (明治十九年二月十七日)

明治十七年(三月)乙第十六號布達種痘規則ヲ廢シ種痘細則別紙之通相定ム
右布達候事

○種痘細則

第一條 此細則ハ明治十八年(十一月)布告種痘規則ニ依リ設ケタルモノトス
第二條 戶長ハ其部内便宜ノ地ニ種痘所ヲ設クヘシ

第三條 戶長ハ種痘擔當醫ヲ定メ其氏名ハ縣廳ヘ届出ツヘシ

第四條 種痘ハ春秋二期トシ其時日ハ戶長ニ於テ之レヲ定メ一期毎ニ郡内ヘ告示スヘシ

但種痘規則第三條ノ場合ハ此限リニ非ス

第五條 種痘料ハ初種再種ヲ區別シテ每一人金拾錢ヨリ多カラサルノ額ヲ領收スヘシ

但貧困無資ニシテ種痘シ難キ者ハ戶長ノ差圖ヲ受クヘシ

第六條 種痘所ニ關スル費用ハ種痘料ヲ以テ支弁スルト難ク其町村衛生費ヲ以テ補助スルコトアルヘシ

第七條 種痘所ニ於テ種痘ヲ行ヒタルトキハ該擔當醫ニ於テ別紙第壹號甲書式ニ倣ヒ證書正副二通ヲ交付スヘシ

第八條 擔當醫師ニアラスシテ種痘ヲ行ヒ若クハ天然痘ニ罹タル者ノ診察シタルトキハ別紙第壹號甲乙書式ニ倣ヒ證書正副二通ヲ交付スヘシ

第九條 醫師ヨリ受ケタル種痘証若クハ天然痘証ハ一週日以内ニ其副書ヲ戶長後場ヘ差出シ其正書ハ常ニ保存シ臨時點檢ノ用ニ供スヘシ

第十條 種痘規則第四條ノ届ヲナシタル者病氣全快又ハ事故ノ解ケタル片ハ速ニ種痘ヲ爲スヘシ

第十一條 戶長ハ種痘調査簿ヲ製シ置キ第九條ノ證書ヲ受ケタルトキハ其善感不善感及天然痘濟等ノ事由ヲ詳記スヘシ

但疾病事故ハ別冊ニ登記シ他日ノ參考ニ備ヘ置クヘシ

第十二條 戶長種痘又ハ天然痘濟ノ證書及ヒ病氣事故ニヨリ種痘シ能ハサル者ノ届書ヲ半年毎ニ一括シ(一月七月)十日限リ所屬郡役所ヘ差出スヘシ

第十三條 郡役所ハ別紙第二號書式ニ倣ヒ一郡毎ニ種痘明細表ヲ調製シ(一月七月)二十日限縣廳ヘ差出スヘシ

(別紙)

第一號甲書式

証

何國郡町村番地

何某何男(又ハ)何某何女(何々) 氏

何年何ヶ月 名

初種 再種 三種等ヲ朱印

押捺スヘシ

第一號乙書式

証

何國郡町村番地

何某何男(又ハ)何某何女(何々) 氏

何年何ヶ月 名

右天然痘濟

左何類種痘濟
右何類種痘濟
年月日
何國何郡町村番地
種痘醫氏名印

年月日
何國郡町村番地
醫師氏名印

不善感ノ者ハ種痘濟ノ文字ニ代フルニ不善感ノ文字ヲ以スヘシ
第二號書式

茨城縣何郡種痘明細表

明治何年上半期
下半年期

再種	初種		區別
	善感	不善感	
疾病事故ニテ種痘セサル者	善感	不善感	滿一年以上二年以上五年以上十年以上十五年以上
不善感	善感	不善感	以內滿一年滿五年滿十年滿十五年以上
疾病事故ニテ種痘セサル者	善感	不善感	合計

合計	三種	
	善感	不善感
疾病事故ニテ種痘セサル者	善感	不善感
合計	善感	不善感

種痘規則第三條ニヨリ接種セシ者ハ表中ニ算入セス表末ニ於テ其人員及感否ノ別ヲ附配スヘシ

○種痘天然痘取調書式
○乙第二拾壹號 (明治十九年二月二十日)

今般甲第拾貳號ヲ以テ種痘細則布達候ニ付テハ從前種痘又ハ天然痘ヲ爲シタル者及ヒ未痘者トモ別紙書式ニ據リ一町村限リ取調置クヘシ
右相達候事
書式

明治十九年一月一日現在種痘調

何町ノ分			未痘	天然痘濟	某女	氏名	生年月
善感	不善感ノ別	再種	三種以上				
年月	初種	年月	三種以上				

備考 本表ハ年齢廿五年以下ノ者ヲ調査スヘシ表中年月トアルハ種痘初種再種三種以上ヲ爲シタル年月ヲ記入スルモノトス

○醫術開業免狀所持ノ者種痘施行差許

○甲第七十一號 (明治十七年十二月廿四日)

醫術開業免狀所持ノ者(齒科整骨科ヲ除ク)ハ自今種痘免狀ヲ付與セス施術差許候條施術ヲ爲サントスル者ハ所轄郡役所ヲ經テ届出ツヘシ此旨布達候事

但明治十四年縣廳乙第百六號布達ハ廢止トス

○麻疹病報告方

○乙第貳拾七號 (明治十八年三月廿一日)

戸生委員 長

麻疹病者有之節ハ傳染病報告用紙裏面ヘ左ノ三項記載差出候様衛生委員ニ於テ開業醫師ヘ可通示此旨相達候事

一發病ノ原因

一初再感ノ別

一病症ノ輕重

(參考)

○麻疹病豫防心得

○乙番外 (明治十八年三月十日)

麻疹ハ觸接傳染性ノ病毒ニシテ一種特異ノ熱病ナレハ一旦之ニ感染スルヤ危險ノ恐レ有ルノミナラス間々餘病發生ノ誘引トナルモノナレハ勉メテ之レカ豫防ヲ爲サハルヘカラス過般長崎兵庫等ノ諸縣ニ於テ會マ該病ノ發生スルヤ暫時ニシテ神奈川東京等ノ府縣ニ傳播ヒリ病勢ノ銳キコト此ノ如シ則チ彼ノ流行地方ニ近接セル我茨城縣ノ如キ何時之レカ侵入ヲ被ムルヤモ亦計リ知ルヘカラス豈一日モ忽セニスヘケンヤ依テ其未タ發生セサルニ先チ左ノ豫防心得ニ基キ不測ノ禍害ヲ被ラサル様精々注意致スヘシ此旨諭達候事

麻疹病豫防心得

一麻疹病ニ罹ルノ初期ハ殆テ感冒ニ類似タルモノ故聊ニテモ感冒ノ氣味アル時ハ

- 可及的速ク醫師ノ診斷ヲ受クヘシ
- 一 麻疹病ニ罹リタル者ハ尤モ他病ヲ惹起シ易ク且之レカ爲メ危篤ニ陥ル恐レ往々アルモノ故万一該病ニ罹リタリト思慮タル時ハ可及的速ク醫師ノ治療ヲ受クヘシ
 - 一 一家内ニ麻疹病者アル時ハ未タ該病ニ罹ラヌ者ハ勿論襲ニカ、リシ者ト雖トモ成ヘシ病者ト接近スヘカラス
 - 一 看病人ハ既ニ該病ニ罹リシ事アル者ヲ撰ヒ且屢之ヲ交換スヘカラス
 - 一 麻疹病者ノ涙液涕液唾液又痰汗等ニハ特ニ病毒ヲ含メルモノナレハ布片又ハ紙片ヲ以テ屢之ヲ拭ヒ取リ其都度燒棄スヘシ
 - 一 麻疹病者ノ襯衣ニハ(フラスルモンハモメン)ノ類ヲ用ヒ又夜具ニハ木綿ヲ被覆履ヒ時々熱湯ヲ以テ洗滌ヘシ
 - 一 一家内ニ該病者アルトキハ同居ノ兒童ヲ學校ニ出サシムヘカラス
 - 一 不潔ハ病毒傳染ノ媒介トナルモノナレハ其衣服居室ハ勿論其近圍ヲモ勉テ清潔ニスヘシ

○虎列刺病檢疫手續

(編者曰獸類傳染病ハ上編勸業ノ部ニアリ)

○乙第二百二十四號

(明治十五年七月廿四日)

虎列刺病檢疫手續地方衛生會ノ決議ヲ經別冊ノ通相定候條此旨布達候事

但檢疫所設置ノケ所及實施ノ期日ハ其都度示スヘシ

檢疫手續

- 第一條 檢疫ハ虎列刺病本縣近接ノ府縣ニ於テ流行猖獗ヲ極ムルノ際實施スル者トス
- 第二條 檢疫所設置ノ場合ニハ警察官吏衛生官吏衛生委員開業醫師ヲ以テ該所ノ事務及ヒ避病所ニ係ル一切ノ事務ヲ擔當セシム
- 但時宜ニ依リ本文職員ノ内ヲ以テ當ラシムルコトアルヘシ
- 第三條 檢疫所設置ノケ所ハ他管交接ノ地ニシテ船舶來往行旅四通ノ場所ニ設立スル者トス
- 第四條 檢疫所設置ノ後病毒該設置所内ニ侵染スルトキハ既設ノ檢疫所ハ廢止スル者トス
- 但病毒侵染ノ勢ニヨリ各郡町村ヲ區畫シ臨時ニ檢疫所又ハ豫防事務所ヲ設クルコトアルヘシ
- 第五條 檢疫ヲ分ツテ船舶檢疫旅人檢疫トス般舶檢疫ハ其船舶ニ就キ患者ノ有無ヲ視察シ旅人檢疫ハ其要路ニアリテ旅人及物品ノ運送等ヲ視察スヘシ
- 第六條 船舶乗込中虎列刺患者若クハ死者アルヲ發見スルトキハ停船ヲ命シ左ノ手續ニヨリ消毒法ヲ施行シ然ル後他所ニ進行ヲ許スヘシ

十八年
甲第九
第十五號
刪除ノ
面

一患者死者ハ速ニ豫定ノ場所ニ移シ乗込人ハ沐浴ヲ爲サシメ衣服及ヒ携提品ハ蒸法ヲ施スヘシ尤モ船中豫防法已ニ整頓シテ他ニ感染ノ虞ナシト認ル場合ニ於テハ各自沐浴又ハ蒸法ヲ要セサルコトアルヘシ

一船舶ノ消毒法ハ汽船其他家根日覆等ノ装置アルモノハ蒸法ヲ施シ荷船渡船ノ類ハ石礮水其他相當ノ消毒藥ヲ以テ洗淨スヘシ

第七條 旅行人病者ト認ムル者ハ醫員ヲ診察セシメ其症狀ノ疑似ニ涉ルキハ其地ニ於テ相當ノ治療ヲ爲サシメ又虎列刺病ト診斷スルトキハ豫定ノ避病所ニ送致スヘシ

第八條 船舶入港スルキハ檢疫係少クモ二名速カニ其船舶ニ至リ虎列刺病流行地方ヨリ來レルモノハ第五條第六條ニ依リ支障ナキ場合ニ於テハ荷物等ノ陸揚ケ又ハ他所進行スル許可証(左ノ雛形ニ依リ)ヲ船長ニ與フヘシ
但本文ノ手續ハ船付ノケ所ニ適用ス

第三寸 第 號
檢疫濟之証
年 月 日
檢疫係、
〇傳染病患者報告手續

〇傳染病患者報告手續

十八年
九月甲
第九十
三號退
加ノ面

〇茨城縣令甲第五號 (明治廿二年一月五日)

明治十五年(七月)乙第百二十五號傳染病患者報告手續左ノ通改正明治二十二年四月一日ヨリ施行ス

傳染病患者報告手續

第一條 此手續ニヨリ報告ヲ要スル傳染病トハ虎列刺、腸窒扶斯、赤痢、實扶的里亞、發疹窒扶斯及痘瘡ノ六病トス

但六病ノ外ニ傳染性流行病アリテ其勢盛ナルノ兆アルトキハ此手續ニヨリ報告スヘシ

第二條 傳染病報告ヲ發期終期ノ二トス初診報告ヲ發期報告トシ全癒死亡又ハ轉症報告ヲ終期報告トス

第三條 傳染病患者ヲ診斷シタル醫師ハ條末書式ニ倣ヒ發期報告ハ診斷ノ後遅クモ二十四時間以内ニ終期報告ハ一週日以内ニ患者所在ノ戸長ヘ報告スヘシ

第四條 戸長ニ於テ醫師ノ報告ヲ受領シタルトキハ受領ノ年月日及時間ヲ記入シ速ニ之ヲ所轄郡役所ヘ差出シ同時ニ最寄警察署分署若クハ巡查駐在所ヘ通報スヘシ

第五條 郡役所ニ於テ報告ヲ受領シタルトキハ速ニ之ヲ縣廳ヘ送付スヘシ但病勢劇烈コシテ蔓延ノ兆アリト認ムル場合ハ其狀況ヲ具申スヘシ

第六條 傳染病報告用紙ハ別途縣廳ヨリ醫師ヘ交付スヘキモ臨時缺乏ノ際ハ醫師ニ

於テ別ニ之ヲ製シ用ユルモ妨ケナシ

第七條 傳染病患者ヲ診察シタル醫師ハ其豫防消毒法ノ要旨ヲ其戸主若クハ家族ヘ
墜示スヘシ

第八條 治療中ノ患者ニシテ轉醫若クハ休藥シタルトキハ其旨患者所在ノ戸長ヘ報
告シ又其患者ヲ引受ケタル醫師ハ終期報告ノ際報告書冒頭ニ轉醫ト朱記スヘシ

第九條 報告書記載方左ノ如シ

一 終期報告ハ○印アルモノノミヲ記載スヘシ

二 發病ノ地名、今原因ハ虎列刺發疹室扶斯報告ニ限り記載スヘシ

三 種痘濟否ハ痘瘡報告ニ限り記載スヘシ

四 備考ハ特發又ハ傳染并病症ノ寛猛等ヲ記載スヘシ

傳染病報告書式(用紙半紙一通)

傳染病(發期終期)報告

往所族籍職業

何某父母兄弟姊妹

氏

年

名 齡

○一 病名

一 發期ノ年月日

一 初診ノ年月日及時間

○ 終期ノ年月日

一 發病ノ地名

一 發病ノ原因

一 種痘ノ濟否

一 備考

何郡何町村

醫師 氏

名

印

何郡何町村外何ヶ(町村)

戸長 氏

名

印

報告年月日(午前午後)時分

報告受領年月日(午前午後)時分

○丙第三十一號 (明治十六年五月五日)

戸長

衛生委員

虎列刺病者有之節ハ自今別紙書式ニ準據衛生委員ニ於テ調査シ每週一回取纏メ可差
出此旨相達候事

記載ノ解

問答ノ体ヲ上下ニ列示
シタルハ記載ニ便ナラ
シメタル者ニシテ其法ハ
例ヘハ第一項郡區町村
トアルニ某郡某村ニテ
發セシ者ナレハ區町ノ
二字ヲ塗抹シマテ某區
某町ニテ發セシモノナ
レハ郡村ノ二字ヲ塗抹
スルカ如シ他ノ項目モ
亦之ニ倣フヘシ
(一)郡區町村番地ハ本
籍寄留ニ拘ラヌ本人現
住ノ地名ヲ記入シ又職
業ハ各本人ノ現業ヲ明
記シ例ヘハ農業主(農

虎列刺病者取調書

(一)	郡區町村	番地
職	男	女
業	姓	名
(二)	發病ハ何日何時頃ナルカ	月 日 午 後 前 時
(三)	發病ノ場所ハ如何	町 郡 村 區
(四)	体格ハ如何	強 弱
(五)	婚姻セシヤ	未 既 有 配 偶 無 配 偶
(六)	發病前ニ罹リタル病ハ無キヤ	有 無
(七)	常ニ虎列刺病ヲ甚シク畏ルカ	畏 否
(八)	發病ノ誘因ハ如何	
(九)	前年其住家ニ同病患者アリヤ	有 無
(十)	前年家族中ニ同病患者アリヤ	有 無

ニシテ自ラ勞役セサル
者)ト自ラ耕作スル者
トナ區別シ又婦女老幼
等ニシテ職業ナキ者ハ
戶主何職業ト記スヘシ
(二)發病ハ醫師ノ診斷
時日ニハ拘ラズ發病
タル時日ヲ記入スヘシ
(三)發病ノ場所ハ其發
シタル郡區町村名ヲ記
シ自宅ナレハ自宅旅籠
屋ナレハ旅籠屋學校ナ
レハ學校途上ナレハ途
上等ト明記スヘシ(八)
發病ノ誘因ハ例ヘハ不
良若クハ過度ノ飲食並
其品名或ハ非常勞動等

(十一)	同病多キ地ニ行キシアリヤ	有 無
(十二)	家内ニ同病患者アリヤ	有 同時 以前 無
(十三)	近隣ニ同患者アリヤ	有 同時 以前 無
(十四)	同病患者又ハ其汚物等ニ觸接セシヤ	觸 不觸
(十五)	暮シ方ハ如何	上 中 下
(十六)	住家及其向ハ如何	表 裏 一 戸 建 裏 表 長 屋 東 西 南 北
(十七)	間數並現在人ノ數ハ如何	四 間 以 上 三 間 以 下 入 疊
(十八)	家屋ハ清潔ナリヤ	清 潔 不 潔
(十九)	飲料水ハ如何	上 水 掘 井 共 一 家 用 堀 井 共 一 家 用
(廿)	同一ノ飲料水ヲ用フル者ニシテ同病ニ罹リシ者ナキヤ	有 無
(廿一)	便所ハ如何	一 家 用 總 雪 隠

渾テ其誘因ト認ムル者

(廿二) 同一ノ便所へ同病患者ノ行

有 無

ヲ記入スヘシ若シ無キ

(廿三) 下水ハ如何

通 阻

キハ記入ニ及ハフ(十七)

(廿四) 近傍ノ潔否及燥濕ハ如何

清潔 不潔 燥濕

數並現任人ノ數ヲ記入

(廿五) 療養ノ場所ハ如何

自宅 病院

シ四間以上ナレハ記入ニ及ハス

○虎列刺病毒者排泄物死屍大埋葬ニ從フヘシ

○丙第五十一號 (明治十一年六月卅日)

戸長 衛生委員

虎列刺病毒ノ止舎墊伏スル所ハ該病患者ノ排泄物等ニ在ルハ勿論ニシテ殊ニ屍体ヲ以テ最トナス故ニ傳染病豫防規則中首トシテ排泄物并死屍ヲ處分スルノ方法ヲ設ケラレ燒棄埋却ノ二法アルモ永ク后患ヲ絶タシニハ燒棄スルヲ以テ最モ効力ヲ有スルモノニシテ其埋却ノ方法ハ事實燒棄ニ能ハサル場合ノ便宜法ニ出ルモノトス然ルニ本縣從來死體ノ火葬ヲ忌避スルノ弊遂ニ習慣トナリ會々虎列刺病流行ノ際ニ當リテモ病毒再燃ノ恐ル可キヲ顧ミテ徒ニ火葬處分ヲ嫌忌スルモノトナカラス現ニ昨年間ニアリテハ該病死者十中七八ハ埋葬法ニ從ヘリ埋葬ノ法モ亦成規ニ因ルルハ大ナル

妨ケ無キカ如キト雖モ地所ノ卑濕棺槨ノ粗造等ニヨリ果シテ后虞ナキヲ保ス可ラヌ故ニ爾後該病流行ノ場合ニ於テハ可成排泄物ハ燒棄シ死屍ハ火葬ノ方法ニ從フヘシ若シ埋葬ヲ要スルモノハ必ズ成規ノ埋葬法ニ從フヘキニヨリ豫テ相達置候通速カニ埋葬地ヲ定メ置キ候様告示可致地方衛生會決議ヲ經此旨相達候事

○茨城縣令第十九號 (明治二十年二月二十六日)

地方病患者報告手續別紙之通相定ム

○地方病患者報告手續

第一條 地方病ハ專ラ風土習俗ニ徴シ其病原ヲ探治シ將來豫防改良ノ方法ヲ設クル目的ヲ以テ調査スルモノトス

第二條 地方病ハ脚氣、間歇熱、偃麻質私ノ三種トス

但三種ノ外一町村若クハ一地方ヲ限局シテ流行スル疾病ハ此手續ニヨリ報告スヘシ

第三條 醫師地方病患者ヲ診察シタルトキハ條末書式ニ倣ヒタル報告表ヲ每半ケ年ニ調製シ一月七月十日限リ戸長役場ヲ經テ差出スヘシ

但製表用紙ハ縣廳ヨリ下付スルモノトス

第四條 醫師數名ノ治療ニ係ル患者ハ其主任醫ヨリ報告スヘシ

書式

一 郡町村名ハ現ニ發病地ノ郡町村ヲ記入スヘシ
一 職業ハ本人ノ現業ヲ詳記シ婦女老幼等ニテ職業ナキモノハ戶主何職業ト記スヘシ

明治何年 自何月 至何月 地方病患者左記之通報仕候也

何國郡(町村)何番地

明治何年何月何日

醫師 氏 名 印

茨城縣知事宛

病名	發日	熄日	郡名	町村名	職業	男別	女別	氏名	年齢

○中毒患者報告手續

○茨城縣令甲第二十號 (明治二十年二月二十六日)

中毒患者報告手續別紙之通相定ム

○中毒患者報告手續

第一條 中毒患者報告ヲ分ツテ發期終期ノ二回トス

第二條 醫師中毒患者ヲ診察シタル日發期ハ第一號書式ニ倣ヒ診察後二日以内終期

ハ第二號書式ニ倣ヒ全檢死亡又ハ轉症ノ際患者所在ノ戶長役場ヲ經テ報告スヘシ

但毒物ノ成分判然セサル分ハ現品相添ヘ發期報告同時ニ差出ヌヘシ

第三條 醫師數名ノ治療ニ係ル患者ハ其主任醫ヨリ報告スヘシ

第一號書式 「用紙半紙」

中毒患者發期報告

茨城縣何國郡町村番地居住(寄留)

族籍職業

何某父母兄弟姉妹等

氏 名

何年何ヶ月

右之者何年月日(午前)後何時何處ニ於テ何々ノ際何品(煮、燒、干等ヲ區別スヘシ)凡何程飲(食)用レ何々ノ症狀ヲ呈シ(何年月日午前)後何時死亡(候ニ付何々中毒ト致診斷候右ハ本人何々)何々タルヲ知ラサルカ又ハ誤用シタシタル原因ニ有之候(毒物現品相添ヘ)此段報告仕候也

年 月 日

何郡(町村)番地

醫師 氏 名 印

茨城縣知事宛
前書之通報告ニ付進達候也

戸長

氏名印

第二號書式 (用紙半紙)

中毒患者終期報告

茨城縣何國郡町村番地居住(寄留)

族籍職業

何某父母兄弟姉妹等

氏名

何年何ヶ月

右之者何々中毒ニ罹リ候旨報告致置候處何年月日全治死亡又ハ何々ニ轉症致シ候
此段報告仕候也

年月日

何郡(町村)番地

醫師氏名印

前書之通報告ニ付進達候也

茨城縣知事宛

戸長

氏名印

(参照)

傳染病豫防法心得書

○内務省乙第卅六號 (九月十日)

東京警視本署
府 縣

本年第三十四號傳染病豫防規則布告相成候ニ付傳染病豫防心得書別冊相達候條各
地方廳ニ於テ時宜ヲ量リ節畧論達シ實際上豫防行届候様取計フヘシ此旨相達候事
傳染病豫防法心得書

凡ソ傳染病ハ其種類多シト雖モ流行性傳染病ノ一旦萌動シテ其蔓延ノ熾ナルニ至
テハ救療ノ法モ治ク及ヒ難ク終ニ其猖獗ヲ縱ニシ滲酷ヲ極ムルニ至ル然ルニ豫防
法アリテ之ヲ守ル嚴ナルキハ其病害ヲ未熾ニ防遏スヘシ加之消毒法アリテ之ヲ行
フ密ナルキハ各種ノ病毒ヲ消滅スルヲ得ヘシ消毒法ハ即チ豫防法ノ一種ニシテ殊
ニ其効驗確實ナルモノナリ目今本邦流行傳染病中最モ豫防注意ヲ要スヘキハ虎列
刺、腸窒扶私、赤痢、實布埜利亞、發疹窒扶私、痘瘡ノ六病トス而テ各種ノ病症ニ從
ヒ豫防ノ法モ亦其趣異ニスト雖モ其要領ハ之ヲ約スルニ四項ニ出テ其ハ病

毒ノ萌動及ヒ蔓延ノ因ヲ除却スルニアリ(即チ清潔法)其二ハ各人体中有スル所ノ感受性ナラシムルニアリ(即チ攝生法)其三ハ病毒傳播ノ媒介ヲ隔離スルニアリ(即チ隔離法)其四ハ傳染病毒ヲ消滅スルニアリ(即チ消毒法)右ノ四項ニ依リ豫防ノ事ヲ施サ、ルヘカラス故ニ其大意ヲ示ス、左ノ如キ

清潔法大意

流行性傳染病毒ノ眞性ハ確知シ難シト雖モ病理家ノ論斷ニ據ルニハ微ノ有機物アリテ外方ヨリ人体ニ竄入シ以テ其病ヲ發スルモノアルカ如シ蓋シ此毒物ハ多ク地中及ヒ水中ニ在テ萌動シ尋テ氣中ニ混シ然レ後人體ニ入ルヲ得ルモノトス故ニ其病ニ罹ル者ノ排泄物地中若クハ水中ニ滲入スルトキハ即チ其毒ヲ散漫シ其地方ニ於テ衆人一齊ニ同一ノ病ヲ發スルヲ理ニ於テ疑フヘカラスナリ
此有機性病毒ハ地中或ハ水中氣中ニ生殖ヲナスニ必ス多少ノ助養物ナカルヘカラス而シテ其助養物タルハ凡百ノ有機物體ノ腐敗ニ向ハントスル者之カ發生ヲ助ル者ニ似タリ夫ノ魚市屠場等不潔ノ地及ヒ糞尿塵芥ノ堆積セル地ノ如キハ其腐敗物地中及ヒ水中ニ滲透シ又此ヨリ蒸發スルモノ大氣中ニ混入スルヲ以テ病毒ノ助養物甚ダ多クシテ忽チ蕃殖ノ速ナルヲ致ス故ニ土地ノ不潔ハ傳染病ヲ蔓延セシムルノ媒介タリ是ヲ以テ其病發生スルトキハ必ス家屋ヲ清潔ニシ溝渠、芥溜、廁圍等ノ汚物ヲ掃除セサルヘカラス是清潔法ヲ要スル所以ナリ

攝生法大意

凡ソ人強健ナルトキハ病毒ノ侵襲ヲ拒クヘキノ機能ヲ有スト雖モ過度ニ勞動シ及ヒ飲食ノ不良或ハ不足等ヲ以テ身體之カ爲メニ衰弱スルトキハ病毒ノ侵襲ヲ受クルノ最モ甚シトス彼ノ發疹室扶私ノ飢饉軍役ノ際ニ乘シ其猖獗ヲ逞フシ又平生飲食不節或ハ不良ニシテ病胃之カ爲メニ些少ノ損害アルトキハ虎列刺ノ侵襲ヲ受ルカ如キ等ヲ以テ証ス、其餘精神非常ノ感動及ヒ感冒等モ亦能ク病毒ヲ招クノ媒介トナルモノナリ故ニ流行ノ際ニ當テハ殊ニ攝生ノ法ヲ嚴守シ病毒浸入ノ地ナカラシムルヲ專要トス若シ人々普ク此豫防法ノ要訣ヲ守リ得ルニ至ラハ全ク傳染病ヲシテ流行蔓延ノ甚シキニ至ラシメサルヘシ是攝生法ヲ要スル所以ナリ

隔離法大意

傳染病ハ畜ニ地中若クハ水中ニ舍リテ傳播スルノミナラス患者ノ排泄物呼吸蒸發氣發氣等ヨリ直ニ感染スルヲアリ故ニ病體死體其排泄物等ハ速ニ之ヲ隔離シテ觸接ノ憂ナカランヘシ隔離法トハ患者ヲ別室ニ移シ門戸ニ病名票ヲ貼附シテ外人ニ表示シ或ハ之ヲ避病院ニ送致シ要用アル人ノ外務ヲテ交通ヲ絶ツ等ノ事是レナリ殊ニ其恐ルヘキ傳染病ニ於テハ患者ニ接近シタル看護人等モ亦他ノ健康人ト隔離セサルヲ得ス苟モ能ク其法ヲ守リ病毒ニ遠サカルヲ得ハ必ス傳染ノ蔓延ヲ致サ、ルヘシ是隔離法ヲ要スル所以ナリ

消毒法大意

凡ソ傳染病毒ハ其性分極メテ之微ニシテ見ルヘカラスト雖モ傳送物中ニ混入シテ
人体ニ達シ其病症ヲ發現スルモノトス此傳送物ヲ滅スルトキハ即チ病毒モ亦消盡
ス故ニ烈火ヲ用ヒ之ヲ燒盡スルハ消毒ノ最良トス然レモ其燒棄ニ付難キモノハ
或ハ藥劑ヲ用ヒテ蒸蒸若クハ灌注シ或ハ之ヲ洗滌シ以テ其病毒傳染ノ力ヲ撲滅ス
ルヲ得ヘシ然ラサレハ其病毒散蔓シテ終ニ消滅スルコトナカラン故ニ病毒萌動ノ後
ニアリテハ消毒ヲ以テ豫防法中ノ最モ緊要ナルモノトス

消毒法ヲ施スニ當テ其病性ト其施スヘキ物トニヨリ其科ヲ同クセス故ニ之ヲ分チ
第一患者及ヒ看護人等消毒法、第二死體及ヒ排泄物等消毒法、第三衣服臥具等消毒
法、第四家屋船舶等消毒法、第五什具運搬器等消毒法、第六廁間溝渠等消毒法トス
但實布埤利亞、發疹室狄私、痘瘡ノ三病ハ第六ノ消毒法ヲ行フノ限ニアラス
凡ソ病毒ノ最モ含藏シ易キモノ即チ毛布、綿布、綿絮、疊、蓆、敷物ノ如キ氣孔鬆疎
ナルモノト居室及ヒ室内ノ諸器具ノ如キハ其病毒浸染ノ深淺ニヨリ消毒法ヲ行フ
ヘキモノトス

右ニ載タル蒸蒸及ヒ洗滌ノ外其燒却ヲ憚ル品物ニシテ浸染セル病毒ノ萌生機能ヲ
消滅セシメント欲スル片ハ熱氣消毒竈ナルモノヲ用ヒテ華氏二百二十度ヨリ二百
五十度ニ至ルノ熱氣ヲ普ク四方ヨリ通セシメ以テ之ヲ滅滅スル法アリ然レモ其機

造宏大ニシテ各地ニ設ケ難キヲ以テ茲ニ詳記セス且ツ大氣日光ノ如キモ自然消毒
ノ功アルモノニシテ善ク微隙ニ達スト雖モ但タ其力藥品ニ比スレハ甚タ弱キヲ以
テ多少時日ヲ經サレハ其効ヲ奏シ難シトス

消毒藥劑ハ其品類頗ル多ク且ツ其性質功能モ亦同一ナラス故ニ其功能ヲ類別シテ
第一號ヨリ第十二號ニ至ル以テ各病消毒法ノ條ト相照シテ之ヲ用フルニ便ニス其
功用ノ如キハ化學作用ニ涉ルヲ以テ之ヲ略ス

○消毒藥

(第一) 濃厚石炭酸水

結晶石炭酸四分ヲ百分ノ水ニ溶シタルモノ

但石炭酸一分ニ盧利斯林又ハ亞爾簡保兒二分ヲ和シテ能ク溶解シ後チ本量ノ
水ヲ加フヘシ

(第二) 稍薄石炭酸水

結晶石炭酸二分ヲ百分ノ水ニ溶シタルモノ

但溶解法前ニ同シ

(第三) 石炭酸蒸氣

結晶石炭酸(或ハ之ニ二倍ノ亞的兒ヲ加ヘタルモノ)ヲ皿ニ入レ微火ニ上セ蒸發
セシメ或ハ石炭酸一分ニ餾水二十分ヲ和シ布片ニ蘸シ室内ニ懸ケ置キ蒸發セシ

（第四）石炭酸末

粗製石炭酸ヲ以テ砂、灰、木炭末、鋸屑等ヲ濕濡セシメタルモノ

但粗製石炭酸ハ四十分ヨリ六十分ノ「フェニール」酸（即チ結晶石炭酸）ヲ含ミ
稍々色ヲ帯ヒタル流動石炭酸ナリ

以下消毒同功アルモノニシテ通常用ヒサル品

サリシル酸三百倍ノ水ニ溶解ス

テール油

石炭酸石灰百分炭酸三分

（第五）硫酸鐵合劑

綠礬三百匁ヲ常水一斗ニ和シ粗製石炭酸百匁ヲ加ヘタルモノ

但此合劑ハ久ク貯フヘカラス用ニ臨ミテ調製スヘシ

（第六）硫酸硫酸鐵合劑

硫酸五分硫酸鐵六分水八十九分ヲ和シタルモノ

以下消毒同功アルモノニシテ通常用ヒサル品

鹽化亞八倍ノ水ニ溶解セルモノ

明礬

粗製明礬ノ過量ヲ水中ニ投シ能ク攪拌シテ後其上清ヲ取ル
コロール明礬四倍ノ水ニ溶解ス

皓礬百二十倍ノ水ニ溶解ス

（第七）木炭木炭二分生石灰三十分

（第八）石灰

其他木灰、鋸屑、土等ハ又多少收結ノ功アルモノトス

（第九）亞硫酸瓦斯

硫黃ヲ燒テ瓦斯ヲ發生セシム其法ハ疊敷ノ室ニ硫黃大約三百匁（木炭末大約十
匁ヲ加フルルハ更ニ宜シ）ヲ要ス但一時ニ火焰ノ昇騰スル恐レアルヲ以テ二三
ノ火鉢ニ分配シ熾炭ヲ之ニ點シテ徐々ニ焚燒セシムヘシ

但多數ノ物品ヲ消毒スルニハ密閉シタル室（土藏ノ類）ニ索ヲ張り消毒スヘキ
衣服等ヲ掛ケ或ハ竹架ヲ設ケテ之ヲ排列シ本量ノ硫黃ヲ蒸スヘシ又人々各自
ノ衣服等ヲ消毒スルニハ一握ノ粗製硫黃ヲ火鉢ニ入レ火ヲ點シ伏籠ノ類ヲ覆
ヒ之ニ衣服ヲ被ラセ蒸蒸スヘシ

（第十）亞硫酸溶液

（甲）強百分ノ十ヲ含ムモノ

（乙）弱百分ノ五ヲ含ムモノ

但製法ハ略ス

(第十一) 過滿俺酸加里溶液百倍ノ水ニ溶解ス

(第十二) コロール瓦斯

十分ノ食鹽ヲ五分ノ褐石末ニ密和シテ磁皿上ニ置キ十分ノ硫酸ヲ十分ノ水ニ混和シタルモノヲ注キテ之ヲ發生セシム

以下病毒同功アルモノニ通常用ヒサル品

亞硝酸瓦斯

磁皿ニ銅屑ヲ盛リ置キ硝酸ニ少許ノ水ヲ加ヘテ稍釋シ徐々ニ之ヲ注キテ

瓦斯ヲ發生セシム

コロール石灰溶液

コロール石灰一分ヲ水百分ニ溶解ス

硝酸 磁皿ニ盛リ微火ニ上セ蒸發セシム

以下六病各四項ノ區別ニ因リ豫防法實施ノ事ヲ類別開示ス而シテ其手續ハ各項自カラ帶シテ唇齒相保ツモノトス故ニ一事ニシテ其項ヲ同クセサルモノアリ例ヘハ虎列刺病ヲ豫防スルニ先ツ廁圍ノ掃除ヲ要スルハ清潔法ニ屬シ其患者ヲ尋常ノ廁ニ上ラシメス吐瀉物ヲ遠隔ノ地ニ運搬セシムルハ隔離法ニ屬シ其之ヲ運

搬セシムル前ニ病毒ヲ行フハ病毒法ニ屬ス其事ハ一途ニシテ前半ハ隔離法中ニ載セ後半ハ消毒法中ニ載スルカ如シ此心得書ニヨリ實施スル者宜ク相對照シテ其順序ヲ誤ルコト勿レ

虎列刺

虎列刺ハ特異ノ流行性傳染病ニシテ其病毒ハ患者ノ吐瀉物中ニアリ然シテ其吐瀉物ノ泡膿ニ向ハントスル時最モ傳播ノ媒介ヲナスコト甚シトス故ニ其病毒一回不潔汚穢ノ地中水中ニ入ルトキハ更ニ其蕃殖ノ力ヲ加ハヘ動モスレハ飲料水ニ混シ遂ニ人体中ニ入りテ發生ス其症タカ暴カニ吐瀉シ生力忽チ沈衰シテ而シテ斃ル傳染病中最モ急劇ナルモノト謂フヘシ印度地方ニ於テハ毎歲發動シテ地方病トナルト雖モ人氏ノ交通ニヨリ四方ニ蔓延シ到ル所或ハ三四年間流行シ或ハ全ク其痕跡ヲ絶タスニテ散發スルコトアリ總テ此病毒ハ夏月温熱ノ候ニ當リ其發動ヲ見ルモノトス其症及ヒ類似症ノ二種アリト雖モ具ニ傳染スルモノナリ故ニ其豫防ニ至テハ同様ノ注意ヲ要スヘシ

第一項 清潔法

第一條 虎列刺病ノ吐瀉物ハ一滴ダモ汚穢ノ地ニ滲入セシムヘカラス若シ滲入スルトキハ其泡膿力ヲ助ク忽チ蕃滋増殖スルモノナリ故ニ土地ヲシテ不潔ナラシムヘキ芥溜、下水、廁圍、魚市、屠場等ハ常ニ之ヲ掃除スヘシ其掃除スル毎ニ防臭

藥即チコロール石炭、明礬強溶液、テール油等ヲ適宜ニ撒注スルコトヲ良トス

第二條 虎列刺病毒ハ容易ニ水土ニ滲入シテ傳播スルカ故ニ常ニ飲料水ニ注意ヲ加ヘ井戸側及ヒ敷石若クハ敷板ヲ堅牢緻密ニシテ傍地水療ノ滲透ヲ防クヘシ其他飲料ニ供スル河水及ヒ水道ノ源ハ汚穢物ノ流入ヲ防クヘシ

第三條 虎列刺ノ病毒ハ排泄物ニヨリ傳播スルヲ以テ糞壺若クハ桶ヲ堅牢ニスヘシ且ツ常ニ注意シ糞尿ヲ汲取リテ之ヲ充滿セシムヘカラス殊ニ衆人群集スル所ノ厠圍又井水若クハ水道近傍ノ厠圍ノ如キハ最モ注意ヲ加フヘシ

第四條 糞壺若クハ桶等ノ罅隙アルトキハ糞汁之ヨリ滲漏シテ忽チ病毒ヲ地中ニ滋蔓セシム此ノ如キモノハ病毒藥ヲ施スモ其功ヲ奏スル能ハス故ニ豫メ壺桶ヲ點檢シ罅隙アルモノハ之ヲ改良スヘシ

第五條 芥溜ハ雨水滲入スルニヨリ其汚穢ヲ廣ク地中ニ浸漫セシムルヲ以テ木箱或ハ鐵葉箱等ヲ以テ其貯器トナシ板蓋等ヲ設ケ雨水ヲ禦キ且ツ塵芥ヲ堆積セシムヘカラス

第六條 下水溝渠ハ石若クハ堅質ノ木材ヲ用テ有底ノ放水樋ヲ設ケ遠隔ノ地ニ流注セシメ汚水ノ地底ニ滲入スルヲ防クヘシ其樋上ハ蓋ヲ以テ密閉スヘシ若シ其接合密ナラサレハ却テ其間ニ腐敗氣ヲ停蓄スルカ故ニ此ノ如キモノハ寧ろ上面ヲ開放シテ大氣ニ曝スヲ以テ愈レリトス

但塵芥ハ必ス溝渠ニ投棄セシムヘカラス

第七條 溝渠ハ注意シテ塵芥ヲ除キ淤泥ヲ浚フヘシ且ツ其泥芥ハ溝渠ニ留置カスシテ人家遠隔ノ地ニ搬送スヘシ然レ炎熱ノ候ニ當テ日中ニ泥芥ヲ攪動スレハ惡臭ヲ發シテ空氣ヲ汚濁スルノ恐アルニヨリ必ス他ノ時候ニ於テ之レヲ浚除スヘシ

第八條 魚市屠場ニ於テハ其流出スル所ノ汚水地中ニ滲入スルノ恐アルヲ以テ第六條ニ同シキ放水樋ヲ設ケ流注セシムヘシ且屠屠、腥汗ヲ培料ニ供スルカ爲メニ久ク貯積スヘカラス必ス有益ノ箱若クハ桶ニ入レ置キ速ニ人家遠隔ノ地ニ搬送スヘシ其他牛馬ノ厩舎及ヒ羊豚、鷄鶩ノ畜場等モ亦此旨意ヲ以テ掃除スヘシ

第九條 人家稠密ノ場所ニ於テハ培料ノ置場ヲ設クヘカラス若シ止ムヲ得スシテ設クルトキハ久ク堆積セシムヘカラス前條ノ旨意ヲ以テ人家遠隔ノ地ニ搬送スヘシ其汚汁滲入スルモノハ更ニ新土ヲ以テ之ヲ覆フヘシ

但村落廣潤ノ地ニ於テハ必スシモ之ヲ要セス

第十條 學校、囚獄、製造所、旅店、劇場等ハ流行ノ際更ニ清潔法ニ注意シ又避病院ニハ掃除專務ノ人夫ヲ設ケ殊ニ注意ヲ加フヘシ

第二項 攝生法

第十一條 虎列刺病ハ各人皆之ニ感スルノ素因アルニ似タリト雖モ就中不攝生ノ

人之ニ感スル最多シトス故ニ流行ノ際殊ニ飲食ヲ慎ミ其他不攝生ノ事ヲ戒ムルヲ以テ至要トス

第十二條 飲料水ハ必ス無色無味無臭ノモノヲ撰ヒテ之ヲ用フヘシ若シ止ムヲ得ス其稍々不良ノ疑アルモノヲ用フルトキハ之ヲ濾過スヘシ然レモ煮沸ノ後之ヲ用フルノ最良ナルニ如カス蓋シ病毒ハ之ヲ濾過力ヲ以テ盡ク之ヲ除キ去ルヘカラスト雖モ之ヲ煮沸スルトキハ其毒分ヲ全ク殲滅スルノ効アリトス

第十三條 氷及ヒ冷水ハ縱令其質不良ナラサルモ之ヲ過度ニ飲用スルトキハ之カ爲メニ下利ヲ發スルモノナリ故ニ流行ノ際ハ過量ノ飲用戒ムヘシ但不良ナリト認ムルモノハ決シテ之ヲ用スヘカラス

第十四條 酒ノ清醇ナルモノハ之ヲ適度ニ用フレハ害ナシト雖モ暴飲或ハ酸敗セルモノヲ用フレハ腸胃ヲ害シ或ハ下利ヲ發スルモノナレハ流行ノ際ハ必ス其品種ヲ擇ヒ務テ飲量ヲ節減スルヲ良トス

第十五條 食物ハ新鮮ノ肉類消化シ易キ蔬菜ヲ用ヒ平生ノ慣用ヲ改メサルヲ良トス但良好ノ食物ト雖モ之ヲ過食スレハ亦腸胃ヲ害シ此病ニ感シ易キカ故ニ流行ノ際ハ務メテ適度ニ食シ不消化物ヲ避ケ殊ニ不熟ノ果實ヲ食フヘカラス

第十六條 雨濕或ハ夜氣ニ昌觸シ或ハ過度勞役等皆此病ニ感シ易キヲ以テ流行ノ際ニハ殊ニ之ヲ慎ムヘシ

第十七條 流行ノ際ニ當テハ感冒下利ヲ豫防セシカ爲メ紋羽木綿等ニテ小腹ヲ巻キ務テ適度ノ溫暖ニ其身ヲ保持スルヲ良トス

第十八條 流行ノ際能ク此攝生法ヲ守リ腸胃健全ナルトキハ些少ノ病毒ヲ受クルモ猶ホ其病害ヲ免ル、コナシトモ看護人及ヒ汚穢物死體等ニ直接スルモノ、如キハ尤モ之ニ注意ヒサルヘカラス

第十九條 凡ソ豫防ハ平日攝生ノ謹嚴ナルヲ至要トス世間往々豫防藥ト稱スル方劑アリト雖モ多シハ無稽ノ考案ニ出テ之ヲ服用スルモ功ナキモノ多シトス

第三項 隔離法

第二十條 虎列刺病ハ患者ニ直接スルモ必スシモ感染スルノ理ナシト雖モ其吐瀉物ニ汚レタル患者ニ接シ又ハ其汚染セル物品等ニ觸ル、キハ其媒介ニ因リ病毒ヲ傳フ故ニ患者ト健者トヲ隔離スルヲ以テ豫防ノ要法トス

第二十一條 虎列刺病ハ眞症ト類似トナ論セス醫師診斷シタルトキハ直チニ其家ノ門戸ニ病名票ヲ貼附スヘシ

但患者治癒又ハ死亡若クハ避病院ニ送致シ其病室ニ消毒法ヲ行ヒタル後ハ即チ其病名票ヲ去ルヘシ

第二十二條 患者ノ吐瀉物ハ之ヲ金屬製或ハ陶製ノ漱盤便器等ニ承ケヘ木製ノ器ハ其毒滲浸ノ恐アリトス、毎回消毒法ヲ施シ壺或ハ桶ニ入レ戶外ニ置キ之ニ密

蓋ヲナシ運搬夫ニ付シ人家遠隔ノ地ニ搬送セヨメ溝渠、芥溜、田圃等ニ投棄スヘカラス且ツ患者ノ入りタル厠園ハ決シテ他人ヲシテ入ラシムヘカラス又初發嘔吐セシ地面等ノ處置ハ第八十一條消毒法ニ依ルヘシ

但吐瀉物等ヲ運搬スルトキハ日中ハ虎列刺吐瀉物ト表記アル號旗ヲ夜中ハ之ニ換ルニ提燈ヲ以テスヘシ

第二十三條 患者ハ其室ヲ異ニシ看護人ノ外ハ成クケ接近スヘカラス又止ムヲ得サル事故アルノ外他人ト交通ヲ絶ツヘシ

但家人ニ要用アリテ來訪スルハアルトキハ成クケ戶外ニ於テ之ト應接シ屋内ニ入ラシムヘカラス此時ニ於テハ家人及ヒ來訪人ニ消毒法ヲ行フヲ要セス

第二十四條 家族中ニ於テモ看護人ヲ定メ其他要用アル者ノ外老幼ハ成クケ早ク他家ニ退避セシムヘシ

但看護人ハ成クケ其人ヲ更換セサルヲ良トス

第二十五條 病室内ニハ不用ノ器具ヲ置クヘカラス

第二十六條 患者若シ死亡スルトキハ成クケ其屍傍ニ接近シ又ハ死體ニ沐浴セシムル等ノコトヲセサルヲ良トス

第二十七條 患者治癒若クハ死亡シ病室ニ消毒法ヲ行ヒシ後ハ家人其室内ニ起臥スルモ妨ケナシト雖モ若シ之ヲ用ヒサルモ日用ニ差支ナキ家ニ於テハ數日間空

室ノマ、窓戸ヲ開放シ大氣ヲ流通セシムヘシ

第二十八條 西洋形船舶航海中ニテ發病者アルトキハ其室ヲ異ニスヘシ或ハ之ヲ艙ノ方ニ移スモ可ナリ其看護人ノ外交通ヲ絶ツト猶ホ人家ニ於ケルカ如クスヘシ

第二十九條 船舶内ノ病室ニハ看護人ヲ定メテ吐瀉物ヲ承クルコト第二十二條ノ如クシ航海中ハ毎回海中ニ投棄スヘシ尤モ港灣河湖等ニ於テハ之ヲ投棄スヘカラス必ス最寄ノ地方ニ著シ其地警察官吏或ハ衛生委員ノ指圖ヲ受クヘシ

第三十條 船舶ヨリ患者若クハ死者ノ届ケアルトキハ警察官吏衛生委員ニ於テ検査ノ上患者ハ之ヲ隔離シ死者及ヒ汚穢物ハ消毒法ヲ行ヒ第五十四條ヨリ第五十八條マテニ依リ處置スヘシ

第三十一條 製造所、會社、學校、旅店等ニ在テ發病シ引取人ナキ者並ニ狹隘不潔ノ地ニ雜居スル者等ニシテ看護消毒法行届カス病毒ノ傳播ヲ防キ難キトキハ之ヲ避病院ニ送ルヘシ若シ避病院アラサルトキハ適當ノ空屋ニ移シテ之ヲ隔離スヘシ

第三十二條 避病院ノ位置ハ人家ニ接近セス且ツ運搬ニ便ナル地ヲ撰フヘシ然レトモ井泉河流ノ近傍或ハ往來多キ路傍等ニ設クヘカラス又監獄、墓地、火葬場等

ノ跡ハ用ヒサルヲ良トス

ノ跡ハ用ヒサルヲ良トス

第三十三條 避病院ヲ新ニ構造スルトキハ空氣ノ流通ヲ主トシ善美ヲ要セス其狀ヲ高クシ窓戶ヲ濶大ニシ且ツ板壁ヲ用ヒテ洗淨ニ便ニスヘシ但板葺苦葺等其一時ノ便ニ任シテ可ナリ

第三十四條 避病院ノ廣狹ハ大約人口千人ニ患者一人ノ割合ヲ以テシ例ヘハ人口六千人ノ町村ナレハ患者六人分ニシテ每人二坪ト見積リ十二坪ノ病室ヲ要スルノ類ナリ尤モ流行ノ勢ニ因リテハ建坪ヲ増加スルヲ得ルノ餘地ヲ豫メ計畫シ置クヘシ

第三十五條 避病院ノ病室ハ重症輕症及ヒ快復期ノ患者ヲ區別シテ之ヲ分隔シ二坪ニ患者一人ヲ置クヲ常トシ縱合ヒ患者輻湊ストモ一坪ニ一人ノ割合ヨリ狭クスヘカラス

但此他醫師詰所、事務所、看護人休息所、等便宜ニ之ヲ設クヘシ

第三十六條 避病院ニハ簡易ノ薰蒸室ヲ設クヘシ其構造ハ凡ソ一二坪許ノ小室ニシテ薰蒸氣ノ漏散セサル様密閉シ得ヘカラシメ其内ニ等架シ或ハ繩ヲ張り衣服等ヲ掛ルニ便ニス其小ナルモノハ尋常ノ戸柵等ヲ以テ之ニ當ツヘシ

第三十七條 避病院ノ門側ニハ輕易ナル風呂ヲ設ケ見舞人、看護人等外出ノ時入浴ノ用ニ供スヘシ

第三十八條 避病院ニハ別ニ清淨ナル屍室ヲ設ケ患者若シ死亡シタルトキハ直チ

ニ此ニ移スヘシ

但屍室ハ親族ノ用者ヲ容ル、カ爲メ其餘地ヲ設クヘシ

第三十九條 人家稀疏ノ村落ニ於テハ必スシモ避病院ヲ設クルヲ要セス若シ相當ノ空屋等アラハ假リニ之ヲ用フヘシ

第四十條 普通病院ニハ決シテ虎列刺患者ヲ入ルヘカラス但別ニ傳染病室ノ設アルモノハ此限ニアラス

第四十一條 避病院ニ用フル看護人ノ員數ハ重症ノ患者二人ニ一人ヲ附シ輕症ノ者ニハ四人ニ一人ヲ附シ其快復ニ趣ク者ニハ六人ニ一人ヲ附スル割合ヲ以テ便宜斟酌シ晝夜交代セシムヘシ

但看護人ニハ其表記アル衣服ヲ着セシメ且ツ成タケ其人ヲ交換セシメサルヲ良トス

第四十二條 避病院ニ在ル患者ノ親族又ハ別段ノ交誼アル者看護ヲ爲サントキハ望ムトキハ之ヲ許スヘシ

但其看護人ハ多人數ヲサラサルヲ要シ且ツ屢々更替スルヲ許サ、ルヘシ

第四十三條 避病院ニ在ル患者ノ親族又ハ別段ノ交誼アル者ハ其見舞ヲ許スヘシト雖モ室内ニ於テ飲食ヲ嚴禁シ且吐瀉物ニ接觸セサル様切ニ注意スヘシ

第四十四條 避病院ニ在ル患者ノ病况危篤ニ至ルハ速ニ其家ニ通知シ若シ死亡

スル片ハ入棺セサル前ニ其死體ヲ家族ニ示スヘシ

第四十五條 流行ノ勢猛烈ニ及ヒ其地ノ群集事業ヲ差止ムル片ハ先ツ祭禮、劇場、寄席等ヲ差止メ止ムヲ得サル場合ニ至ラサレハ學校、製造所等ヲ差止ムヘカラス又社寺參拜等ノ爲メ多人數旅行スルコトヲ差止ムコトアルヘシ

第四項 消毒法

第四十六條 虎列刺ノ病毒ハ其吐瀉物ニ含レリ故ニ吐瀉物及ヒ之ニ汚染スルモノハ嚴ニ消毒法ヲ行フヘシ就中之ヲ燒滅スルヲ以テ最良法トス患者及ヒ其死體ハ直チニ病毒ヲ傳フル者ニ非スト雖モ吐瀉物ニ汚染スルヲ以テ亦病毒法汚染物ト同視スヘシ

第四十七條 消毒法ハ其物ニ從テ區別スルコト左ノ如シ

第一 患者及ヒ看護人等消毒法

第四十八條 患者治癒ノ後始テ他人ト交通シ又ハ避病院ヨリ退出ノ節ハ必ス沐浴シ石鹼水ヲ用テ全身ヲ洗ヒ他ノ衣服若クハ消毒法ヲ施シタル衣服ヲ著スヘシ吐瀉物運搬人及ヒ避病院ノ醫師、看護人、死體取扱人等ノ他人ニ接スルトキモ亦此法ニ從フヘシ

第四十九條 看護人及ヒ患者死體運搬人又ハ船中ニテ患者ト同席シタル者ノ他人ト交通スルトキモハ必ス沐浴更衣スヘシ

第五十條 病家ニ於テ止ムヲ得サル事故アリテ看護人其他患者ニ親接セル者ノ他出スル片ハ必ス其身體ヲ洗淨シテ更衣スヘシ

第五十一條 自宅患者ヲ往診セル醫師及ヒ患者ノ家人ニシテ直接セサル者親戚朋友ノ一時見舞タル者等ハ消毒法ヲ行フヲ要セサレトモ其家ヲ出ルニ臨シテ盥漱スルヲ長トス

但誤テ吐瀉物ノ爲メニ其衣服等ヲ汚シタル片ハ稀薄石炭酸水(第二)ヲ噴注シ或ハ沸湯ヲ以テ之ヲ洗ヒ然ル後第六十二條六十三條ニ依リ消毒法ヲ行フヘシ

第二 死體及ヒ排泄物等消毒法
第五十二條 死體ハ十分ニ稀薄石炭酸水(第二)ニ浸シタル單衣若クハ綿布等ヲ以テ之ヲ包ミ成ルメケ速ニ棺内ニ歛ムヘシ若シ濃厚石炭酸水(第一)ヲ用テ灌腸シ然ル後綿ヲ以テ肛門ヲ塞クコトヲ得ハ最良トス

第五十三條 西洋形船舶航海中ニ死者アルトキハ速ニ濃厚石炭酸水(第一)ニ浸シタル單衣若クハ綿布ヲ以テ之ヲ包ミ成メケ前條ノ灌腸ヲ行ヒ假ニ棺内ニ歛メ通常屍室或ハ船中適宜ノ場所ヲ見計ヒ此ニ入レ置キ時々濃厚石炭酸水(第一)ヲ灌注スヘシ

但陸地ニ著スル上ハ其地方ノ警察官吏衛生委員ニ届出處分スヘシ
第五十四條 死體ハ醫師確認ノ後速ニ火葬セシムヘシ火葬場ナキ地方ハ人家ニ離

レタル所ニノ地質鬆疎ナラサルノ地ヲ擇ヒ簡易ノ火葬場ヲ設ケテ之ヲ燒クヘシ
第五十五條 吐瀉物ハ之ヲ便器漱盤等ニ承ケ之ト同量ノ濃厚石炭酸水(第一)石炭酸若シ缺乏ノ時ニ際シテハ硫酸鐵合劑、硫酸硫酸鐵合劑、亞硫酸溶液、生石灰等ヲ撰用スヘシ以下之ニ倣ヘシヲ灌クヘシ其屋外ニ持出ス手續ハ第二十二條ニ依ルヘシ

第五十六條 避病院及ヒ各病家ヨリ運搬セタル吐瀉物汚穢物ヲ燒却スルニハ其地方ニテ定メ置キタル地質鬆疎ナラサル所ニ適宜ノ穴ヲ掘リ厚ク灰或ハ石灰ヲ穴底ニ敷キ乾キタル葉、飽屑、落葉、枯草ノ類ニ石炭油ヲ澱キテ其上ニ置キ之ニ吐瀉物ヲ投シ再ヒ同前ノ燃料ヲ覆ヒテ火ヲ點スヘシ火勢滅スルトキハ更ニ油ヲ注キテ屢々攪挑シ全ク燒盡スルヲ期スヘシ且ツ其汚汁ノ地中ト滲透セサル様注意スルヲ要ス

但燃料及ヒ装置等ハ其他ノ便宜ニ隨フヘシ

第五十七條 患者ノ入りタル廁圍ノ糞汁ハ法ノ如ク燒却スヘキモ若シ大量ニシテ燒却シ難キモノハ亞硫酸溶液(第十) (糞汁ノ三分一)石炭酸末(第四) (糞汁ノ五分一)若シ其缺乏ニ際シテハ生石灰(糞汁ノ三分一)ヲ投シテ汲取り一定ノ所ニ埋却シ其廁圍ニハ稀薄石炭酸水(第二)ヲ注入スヘシ
第五十八條 吐瀉物ノ水分多クシテ燒却シ得サルトキ之ヲ埋却スルニハ多量ノ濃厚石炭酸水(第一)若クハ亞硫酸溶液(第十)ヲ灌キ一定ノ場所ニ於テ深ク埋却スヘシ

但吐瀉物ノ埋却場ハ豫メ井泉河流及ヒ人家道路等ニ接近セサル地ヲ撰定スヘシ

第五十九條 吐瀉物汚穢物ヲ運搬スルニハ其地方ニ於テ豫メ取扱人夫ノ手續ヲ定メ流行ノ間ハ毎日二三回病家ノ吐瀉物汚穢物ヲ取集メ燒却若クハ埋却ヒシムヘシ尤モ其運器ハ極テ注意シ臭氣ノ洩レサハ様(只臭氣ヲ恐ルニニアラス其毒蒸發シテ臭氣ニ混スルヲ恐レハナリ)相當ノ器ヲ用ヒ且ツ其汚汁多量ニシテ溢溢ノ恐アルトキハ鏝屑、落葉、枯草等ヲ入レテ之ヲ防クヘシ

但運器ノ木製ナルモノハ流行終熄ノ後盡ク燒却シ其金屬製及ヒ陶製ノモノハ稀薄石炭酸水(第二)若クハ亞硫酸溶液(第十)ヲ以テ洗淨スヘシ

第六十條 食料ニ供スヘキ物品ノ現ニ病毒ニ汚染シタルモノハ勿論病毒傳染ノ嫌ヒアルモノハ都テ之ヲ燒却スヘシ

但現ニ病毒ニ汚染セサルモノ其汚染ノ疑ヒアルモノハ「サリシ」酸溶液(三百倍)ニ溶解シテ以テ之ヲ洗淨スヘシ

第三 衣服臥具等消毒法

第六十一條 衣服、臥具、蚊帳、疊、蓆等ノ甚シク吐瀉物ニ汚染シタルモノハ之ヲ燒

但船中積荷ノ吐瀉物ニ汚レタルモノモ亦之ニ做フヘシ

第六十二條 衣服、臥具、蚊帳等吐瀉物ニ汚穢スル少クシテ洗濯ニ堪フヘキモノハ之ヲ桶ニ入レ稀薄石炭酸水(第二)ヲ灌キ侵シ置クコト二十四時間ニシテ更ニ沸湯ヲ注キ四五分時ヲ經ルノ後水ヲ以テ洗浄シ日光ニ曝スヘシ石炭酸等ノ缺乏スルトキハ熱湯中ニ入レ一時以上之ヲ煮沸スヘシ

第六十三條 衣服、臥具、蚊帳等ノ少シク吐瀉物ニ汚染シ洗濯ニ堪ヘサルモノハ其品種ニヨリテ亞硫酸瓦斯(第九)若クハ石炭酸蒸氣(第三)ヲ以テ薰蒸シ或ハ熱氣消毒法ヲ行ヒシ後日光及ヒ太氣ニ曝スヘシ

第六十四條 死體ニ著セシ衣服ハ其消毒法ヲ行フコト第六十一條第六十二條及ヒ第六十三條ニ同シ

第六十五條 避病院ニ用ヒタル蚊帳ハ其病室ニ在ルコト久キヲ以テ吐瀉物ニ汚染セサルモノト雖モ都テ之ヲ煮沸シ或ハ熱氣消毒法ヲ施スヘシ

第六十六條 吐瀉物運搬人及ヒ避病院ノ醫師、看護人、死體取扱人、等ハ患者及ヒ汚穢物ニ親接スルコト久ク若クハ屢次ナルヲ以テ其衣服等ニ消毒法ヲ施スコト第六十二條第六十三條ニ同シ

但本文ニ掲クル所ノ者日々衣服ヲ更換セハ沸湯中ニ入レ一時以上之ヲ煮沸ス

第六十七條 看護人及ヒ患者死體運搬人又ハ船中ニテ患者ト同席シタル者ノ衣服手道具ハ直ニニ病室ニ汚染セサルヲ稍々病毒侵染ノ疑ヒアルヲ以テ第六十三條ニ依リ消毒法ヲ行フヘシ

第四 家屋船船等消毒法

第六十八條 患者及ヒ死體ヲ置キタル室ノ壁、蓆類ハ之ヲ柱若クハ壁ニ倚セ懸ケ戸棚等ヲ開放シ室内ニアリシ諸器具ハ之ヲ排列シ窓戸ヲ密閉シテ六時乃至八時間亞硫酸瓦斯(第九)ヲ薰シ然ル後窓戸ヲ開キ吐瀉物ニ汚染ノ嫌ヒアル板敷等ハ稀薄石炭酸水(第二)ヲ以テ之ヲ拭淨シ其他器具ハ石鹼水又ハ沸湯ヲ以テ洗浄シ充分大氣及ヒ日光ニ曝スヘシ避病院ノ病室及ヒ屍室モ亦之ニ做フヘシ

但金銀器書齋其他彫色ヲ施セル物及ヒ絹帛等亞硫酸ノ爲メニ其色質ヲ變化スルノ恐アルモノハ初メニ之ヲ取除ケ別ニ石炭酸蒸氣(第三)或ハ熱氣消毒法等ヲ適宜採用スヘシ

第六十九條 患者アリタル西洋形船舶ハ其處置尋常ノ家屋ニ大異ナシト雖モ下等客室ニ至テハ衆多ノ乘客積荷ノ間ニ枕籍シ幾シト彼我ノ別ナキカ故ニ若シ其内ニ發病者アルトキハ満室ノ乘客積荷物等モ皆病毒ニ汚染シタル者ト看做シ乘客手荷物ハ上陸ノ時充分ニ消毒法ヲ行ヒ積荷ハ其儘其室ニ於テ六時乃至八時

間亞硫酸瓦斯(第九)或ハ品物ニヨリ石炭酸蒸氣(第三)ヲ薰スルノ後ニアラサレハ陸揚スルヲ許サス

第七十條 日本形小船ハ前條ノ方法ヲ斟酌シテ消毒法ヲ行ヒ海水ヲ以テ遍ク船身ヲ洗淨スヘシ

但海水モ亦消毒法ノ効アル者トス

第七十一條 避病院其他便宜ニヨリ他ノ家屋ヲ假用セシモノハ其病室ニ供セシ部分並ニ厠房ニ亞硫酸瓦斯(第九)ヲ薰シ後稀薄石炭酸水(第二)或ハ亞硫酸溶液(第十)ヲ注キ石鹼水ヲ用ヒテ洗淨スヘシ尤モ亞硫酸蒸氣法ノ充分ナルトキハ石炭酸水ヲ用フルヲ必要トセヌ

第七十二條 病室ハ不斷換氣法ニ注意スヘシ是亦多少消毒ノ効アルモノトス

第七十三條 臨時假設ノ避病院ニシテ其保存スヘカラサルモノハ流行終ル後之ヲ取毀ツヘシ尤其前汚穢ナル板敷、板壁及ヒ柱等ハ濃厚石炭酸水(第一)又ハ亞硫酸溶液(第十)ヲ以テ充分ニ洗淨シ數日間開放シテ大氣ニ曝スヘシ

第五 付具運搬器等消毒法

第七十四條 吐瀉物ヲ承ケタル漱盤便器等ハ之ヲ用フル毎ニ稀薄石炭酸水(第二)或ハ亞硫酸溶液(第十)ヲ以テ洗淨スヘシ其吐瀉物ニ汚染シタル紙屑、手拭其他之ニ類スルモノハ悉皆取集メ第二十二條ニ載セタル壺或ハ桶ニ投シ濃厚石炭酸

水(第一)或ハ亞硫酸溶液(第十)ヲ注キ吐瀉物ト共ニ之ヲ運搬セシムヘシ

第七十五條 患者必要ノ手道具ヲ携ヘ避病院ニ入ル者ハ出院ノ時必ス亞硫酸瓦斯(第九)薰蒸法ヲ行ヒ之ヲ交付スヘシ

第七十六條 患者及ヒ死體若クハ病毒ニ觸レタル物品ヲ運ヒタル舁舟車駕及ヒ運搬器等ハ稀薄石炭酸水(第二)ヲ灌注シ更ニ石鹼水若クハ沸湯ヲ以テ洗淨スヘシ其舁舟ノ如キハ海水ヲ以テ洗フモ可ナリ

第七十七條 病室ニ用ヒタル什具ハ總テ稀薄石炭酸水(第二)或ハ亞硫酸溶液(第十)ヲ灌キ然ル後石鹼水又ハ沸湯ニテ洗淨シ乾カスヘシ其洗フヘカラサルモノハ病室ニ消毒法ヲ行フノ際其内ニ排列シ(濕潤ニ堪フヘキモノハ之ヲ濕スヲ長

トス)亞硫酸瓦斯(第九)或ハ石炭酸蒸氣(第三)ヲ以テ一時間薰蒸スヘシ

第七十八條 書籍、新聞紙ノ類病室ニアリタルモノハ之ヲ縮展シ石炭酸蒸氣(第三)若クハ亞硫酸瓦斯(第九)ヲ薰蒸スヘシ或ハ熱氣消毒法ヲ行フモ可ナリ

第七十九條 醫術器械及ヒ木製、金屬製、陶製、漆製等ノ諸器ハ總テ稀薄石炭酸水第二ヲ以テ洗フヘシ

第六 廁圍溝渠等消毒法

第八十條 患者ノ入りタル廁圍及ヒ嘔瀉シタル地ニハ充分亞硫酸溶液(第十)或ハ硫酸鐵合劑(第五)ヲ注キ其廁圍ノ糞汁ハ速ニ悉皆之ヲ汲取り相當ノ消毒ヲ行ヒ

終ルノ間ハ他人ノ入ルヲ禁シ其嘔吐シタル地ハ速ニ之ヲ掃除シ其土ヲ更換スニシ且ツ其糞尿及ヒ嘔吐ノ穢土ハ人家遠隔ノ地ニ於テ燒却若シハ埋却スヘシ
第八十一條 糞壺及ヒ桶ノ破壊シテ病毒滲漏ノ疑ヒアルモノハ速ニ之ヲ掘除ケ其周圍并ニ底面ノ土モ亦深ク掘取リ濃厚石炭酸水(第一)或ハ亞硫酸溶液(第十)ヲ十分ニ灌注シテ人家遠隔ノ地ニ埋却シ其跡ニモ同様ノ消毒藥ヲ注キ更ニ新土ヲ填ムヘシ

但其消毒藥ノ量ハ其壺中糞汁ノ多少ニ因リ斟酌スヘシ大抵糞汁五分ノ一乃至三分ノ一タルヘシ嘔吐物モ亦之ニ準ス

第八十二條 若シ誤テ吐瀉物ヲ溝渠下水等ニ投棄スルコトアルトキハ十分ニ亞硫酸溶液(第十)或ハ硫酸硫酸鐵合劑(第六)ヲ注キ其淤泥ノ撈ヘ得ヘキモノハ之ヲ撈ヘテ人家遠隔ノ地ニ搬送シテ埋却スヘシ或ハ多量ノ水ヲ注キテ疏通セシムヘシ

但本條ノ如キ場處ニ於テ既ニ病毒ヲ混入スルトキハ消毒法モ其功ヲ奏シ難ク終ニ増殖ヲ致サシムヘシ故ニ豫メ戒諭シテ誤テ之ヲ投棄シ或ハ陰ニ投棄スル等ノ事ナカラシムルヲ要ス

腸室扶私

腸室扶私(英名泰裴士ト)ハ從來神經熱、稽留熱、腸熱、傷寒、溫疫等ノ稱スルモノ多ク

之ニ屬ス而シテ此病ハ時ヲ撰ハス不斷散在性トナリ或ハ地方性トナリ或ハ流行性トナリテ發スト雖モ夏月早魃後秋涼ノ候ニ於テ最モ多ク流行スルモノナリ此病ノ流行ハ空氣ノ不潔、飲料水ノ汚濁、食物ノ不良等之カ因トナルモノニシテ其病毒ハ特ニ患者ノ糞尿ニ由リテ傳播スル者ナリ然レモ其毒發疹室扶私、天然痘等ノ如ク揮發性ノモノニ非サルヲ以テ豫防ノ方法モ亦其趣ヲ異ニシ專ラ其糞尿ニ注意スルヲ以テ緊要ノ目的ト爲スヘシ

第一項 清潔法

第一條 腸室扶私ノ病毒ハ汚穢ノ地ニ萌動シテ飲料水ニ混シ其毒ヲ傳播セシムルノ例少カラス蓋シ是等ノ害ハ清潔法ヲ怠リ或ハ排泄物ヲ漫リニ放棄シ或ハ糞壺若クハ桶ニ破隙アル等ノ疎漏ヨリ生スルモノニシテ厠圍ト飲料水トノ注意ハ最モ肝要ナリ故ニ厠圍、芥溜、溝渠、下水等ノ掃除ヲ忽ニスヘカラス
但一處ノ水ヲ飲ム者一時ニ此病ニ罹ルコト多人數ナルトキハ直チニ其水ヲ試驗シ不良ナレハ其飲用ヲ禁スヘシ

第二項 攝生法

第二條 此病ハ不潔ノ飲料水若クハ食物等ヨリ來ルモノナルカ故ニ消化シ易キ物ヲ食シ清淨ナル水ヲ飲ムヘシ若シ善良ノ水ヲ得難キトキハ必ス之ヲ濾過煮沸シテ用フヘシ其他胃寒、疲勞等ヲ戒ムヘシ

第三項 隔離法

第三條 醫師ノ腸室扶私ト診断シタルトキハ直チニ其家ノ門戸ニ病名票ヲ貼附ス

但患者治癒又ハ死亡若クハ避病院ニ送致シ其病室ニ消毒法ヲ行ヒタル後ハ即チ其病名票ヲ去ルヘシ

第四條 患者ハ成タケ其室ヲ異ニシ他人ト交通ヲ絶チ看護人ハ年齢四十歳以上ノ者若クハ一回此病ニ罹リシ者ヲ撰フヘシ少壯ノ者ヲ用フヘカラス

但航海船中ニ於テ發病者アルトキモ本條ニ從ヒ處置スヘシ

第五條 一家ニ數人此病ニ罹ル者アルトキハ相當ノ看護人ヲ留メ其他ノモノハ他家ニ退退セシムヘシ

第六條 流行盛ナルニ際シ既ニ避病院ヲ設クルニ至ラハ狹隘不潔ノ地ニ雜居シ隔離行届キ難キトノハ入院セシムヘシ

但避病院ノ位置廣狹及ヒ區別法等ハ虎列刺ノ部第三十二條以下第三十八條迄ニ照依シテ之ヲ斟酌スヘシ

第四項 消毒法

第七條 腸室扶私患者ノ瀉下物及ヒ之ニ汚染シタル衣服、器具等並ニ其病室、廁間、便器等ニ盡ク病毒傳播ノ恐アルヲ以テ左ノ區別ニ從ヒ消毒スヘシ

第一 患者及ヒ看護人等消毒法

第八條 患者治癒ノ後始テ他人ト交通シ又久シク此患者ニ親接セル看護人ノ他人ト交通スルトキハ沐浴換衣スヘシ

第二 死體及ヒ排泄物等消毒法

第九條 死體ハ速ニ棺内ニ斂メシムヘシ若シ濃厚石炭酸水(第一)ニ浸セル綿ヲ以テ肛門ヲ塞クヲ得ハ最良トス

第十條 糞尿ハ之ヲ便器ニ承ケ稀薄石炭酸水(第二)ヲ注キ速ニ人家遠隔ノ地ニ搬送シテ之ヲ埋却スヘシ

但埋却ノ地ハ井泉河流ノ近傍ヲ避クヘシ

第三 衣服臥具等消毒法

第十一條 衣服、臥具ノ糞尿ニ汚染シタルモノハ稀薄石炭酸水(第二)ヲ以テ洗淨シ或ハ之ヲ煮沸シテ後石鹼水ヲ以テ洗淨スヘシ

第四 家屋船舶等消毒法

第十二條 患者及ヒ死體ヲ置キタル家屋船舶及ヒ避病院ノ病室屍室ハ亞硫酸瓦斯(第九)ヲ薰シ或ハ石炭酸水(第二)ヲ以テ拭淨スヘシ

但室内ハ常ニ注意シテ空氣ヲ流通スヘシ

第五 什具運搬器等消毒法

第十三條 什具運搬器、直チニ糞尿ニ汚穢スルニ非サレハ消毒ヲ要セサレトモ其汚穢セルモノハ亞硫酸溶液(第十)ヲ以テ洗滌スヘシ或ハ其品種ニヨリ熱湯ヲ注キテ後石鹼水ヲ以テ洗フヘシ

但木製ノ便器ハ其用ヲ終ルノ後之ヲ燒却スヘシ

第六 廁間溝渠等消毒法

第十四條 若シ誤テ患者ノ糞尿ヲ廁間、溝渠ニ混入セシトキハ硫酸鐵合劑(第五)ヲ注キテ之ヲ汲取リ人家遠隔ノ地ニ搬送シテ埋却スヘシ溝渠ハ「コロール」石灰ヲ撒布シ水ヲ以テ疏通セシムヘシ

赤痢

赤痢ハ一種ノ傳染病ニシテ其病毒地中ニ萌動シ人体ヲ侵ストキハ必ス大腸ニ著キテ下利ヲ發スルモノナリ然シテ此患者ノ瀉下スル所ノ糞尿ハ其病毒ヲ含有シテ水中地中或ハ氣中ニ散漫シ因テ廣ク他人ニ傳染スルニ至ルモノトス
此病毒ノ發生ヲ助クルハ温熱ト濕濡トニ因ルモノナレハ熱帶地方ニ於テハ殆ント周歲絶ルコトナク且ツ多クハ惡性ナリ又暖帶地方ニ於テハ季夏初秋ノ候ニ行ハルヲ以テ常トス又土地ノ景况ニ從テ一地方ヨリ流行スルコトアリ或ハ惡性ニシテ廣ク流行スルコトアリ此ノ如キ時ニ臨テハ務テ豫防法ニ注意シ其宜キヲ得ハ良性ノモノハ之ヲ撲滅スヘク惡性ノモノハ之ヲシテ良性ニ至ラシムルヲ得ヘシ故ニ流行

ニ際シテ豫防ノ法ヲ忽ニスヘカラス

第一項 清潔法

第一條 此病毒ハ汚濕ノ土地ニ萌動シテ氣中或ハ水中ニ混シ終ニ人體ヲ侵襲スルモノナレカ故ニ廁間、溝渠、芥溜下水、及ヒ魚市、屠場等ノ不潔ナル場所ハ勿論殊ニ監獄、製造所等ハ最モ掃除ヲ嚴ニスヘシ

但一處ノ水ヲ飲ム者一時ニ此病ニ罹ルコト多人數ナルトキハ直チニ其水ヲ試驗シ不良ナレハ其飲用ヲ禁スヘシ且ツ清潔法ノ細目ハ能ク虎列刺ノ部ヲ參考シテ之ヲ斟酌スヘシ

第二項 攝生法

第二條 此病ハ老少ノ別ナク皆之ニ感スルノ素因アルカ如シト雖モ就中一回之ヲ患ヘシ者及ヒ不潔ノ地處ニ住居スル者不良ノ水ヲ飲用スル者及ヒ露臥、夜行、過度ノ勞力等都テ不攝生ノ者ハ之ニ感シ易シトス又流行ノ際ニ當テハ下利秘結モ亦此病ノ誘因トナル故ニ宜ク之ニ注意シテ攝生ノ法ヲ守ルヘシ殊ニ此病ニ罹リシ者快復ニ向ハントスルコトキハ更ニ飲食ノ攝生ヲ嚴ニスヘシ些少ノ不消化物ヲ食フモ亦此病ノ再發ヲ促スノ恐アレハナリ

第三項 隔離法

第三條 此病毒ハ專テ其瀉下物ニ在ルヲ以テ之ニ汚染セル衣服便器、醫術器械等

ハ勿論其他ノモノモ亦皆傳播ノ媒介ナル故ニ患者ヲ隔離スルヲ以テ豫防ノ第一要法トス其惡性ノモノハ最モ此注意ヲ忽ニスヘカラス

第四條 醫師ヲ赤痢ヲ診斷シタル時ハ直チニ其家ノ門戸ニ病名票ヲ貼附スヘシ但患者治癒又ハ死亡若クハ避病院ニ送致シ其病室ニ消毒法ヲ行ヒタル後ハ即チ其病名票ヲ去ルヘシ

第五條 患者ハ其室ヲ異ニシ看護人ノ外ハ成クケ之ニ接近スヘカラス又老幼等ハ速ニ他家ニ避退セシムヘシ

第六條 若シ一家ニ數人此病ニ罹ル者アルトキハ看護人ヲ留メ其他ノモノハ他家ニ避退セシムヘシ

第七條 患者ハ必ス他人ト厠園、便器等ヲ共用セシムヘカラス其瀉下スル所ノ糞尿ハ成クケ之ヲ便器ニ承ケ速ニ消毒法ヲ行ヒ之ヲ人家遠隔ノ地ニ搬送シテ燒却スヘシ

但便器ハ成クケ金屬製或ハ陶製等ニシテ蓋アルモノヲ良トス

第八條 患者治癒若クハ死亡ノ後ト雖モ病室ニ消毒法ヲ行フニアラサレハ其中ニ起臥スヘカラス

第九條 航海船中ニ患者アルトキハ看護人ヲ定メ便器ヲ以テ其瀉下物ヲ承ケ毎回必ス海中ニ投棄スヘシ

但港灣及ヒ河湖等ニ於テハ瀉下物ヲ投棄スヘカラス最寄陸地ニ於テ之ヲ燒却スヘシ

第十條 避病院ノ位置廣狹及ヒ區別法等ハ虎列刺ノ部第三十二條以下第三十八條迄ニ照依シテ之ヲ斟酌スヘシ

第十一條 狹隘不潔ノ住居若クハ製造所、會社、學校、旅店等ニ於テ發病スルモノハ成クケ避病院ニ送致スヘシ

第十二條 避病院看護人ノ分配、來訪人ノ處置等ハ虎列刺ノ部第四十一條ヨリ第四十四條迄ニ照依シテ之ヲ斟酌スヘシ

第十三條 普通病院アル地方ニ於テハ院内ヲ區隔シ避病室トナシ患者ヲ入ルヘシ又人家稀疎ノ村落ニ於テハ相當ノ空屋ヲ用フルモ可ナリ

第四項 消毒法

第十四條 患者ノ瀉下物及ヒ之ニ汚染セル衣服、器具等并ニ病室、厠園、便器等ハ盡ク病毒傳播ノ恐アルヲ以テ左ノ區別ニ從ヒ消毒スヘシ

第一 患者及看護人等消毒法

第十五條 患者治癒ノ後始テ他人ト交通シ又ハ避病院ヨリ退出ノ節ハ必ス沐浴シ石鹼水ヲ用テ全身ヲ洗ヒ他ノ衣服若クハ消毒法ヲ施シ衣服ヲ著スヘシ瀉下物運搬人及ヒ避病院ノ醫師、看護人、死體取扱人他人ニ接スルトキモ亦此法ニ從フ

第十六條 看護人及ヒ患者死體運搬人ノ他人ト交通スルトキニハ必ズ沐浴更衣ス

第二 死體及ヒ排泄物等消毒法

第十七條 死體ハ充分ニ稀薄石炭酸水(第二)ニ浸シタル單衣若クハ綿布等ヲ以テ之ヲ包ミ成メケ速ニ棺内ニ斂ムヘシ若シ濃厚石炭酸水(第一)ヲ用テ灌腸シ然ル後綿ヲ以テ肛門ヲ塞クヲ得ハ最良トス

但此患者ノ死體ハ最モ腐敗シ易キヲ以テ速ニ棺内ニ斂メ且ツ成メケ速ニ之ヲ火葬若クハ埋葬セムヘシ

第十八條 便器ニ承ケタル瀉下物ハ濃厚石炭酸水(第一)或ハ硫酸鐵合劑(第五)硫酸鐵合劑(第六)亞硫酸溶液(第十)等ヲ混和シ屋外ニ持出シ壺或ハ桶ニ入レテ密蓋シ人家遠隔ノ地ニ搬送シテ燒却スヘシ其燒却法ハ虎列刺ノ部第五十六條ヲ參照スヘシ

第十九條 甚シク瀉下物ニ汚染シタル紙及ヒ綿布等ハ悉皆取集メ之ヲ燒却スヘシ

第三 衣服臥具等消毒法

第二十條 衣服、臥具、蚊帳、疊、蓆等ノ甚シク瀉下物ニ汚染シタルモノハ之ヲ燒却スヘシ其汚穢スル少ナクシテ洗濯シ得ベキモノハ之ヲ桶ニ入レ稀薄石炭酸水

(第二)ヲ灌キ浸シ置クヲ二十四時間ニシテ更ニ沸湯ヲ注キ四五分時ヲ經ルノ後水ヲ以テ洗淨シ日光ニ曝スヘシ若シ石炭酸等ノ缺乏スルトキハ熱湯中ニ入レ一時以上之ヲ煮沸スヘシ

第二十一條 其少ク瀉下物ニ汚染シ洗濯スヘカヲサハルモノハ其品種ニヨリ亞硫酸瓦斯(第九)若クハ石炭酸蒸氣(第三)ヲ以テ薰蒸シ或ハ熱氣消毒法ヲ行ヒシ後日光及ヒ大氣ニ曝スヘシ

第二十二條 死體ニ著セシ衣服ノ消毒法ハ前二條ニヨリ之ヲ施スヘシ

第二十三條 瀉下物運搬人及ヒ避病院ノ醫師、看護人、死體取扱人等ハ患者及ヒ汚穢物ニ久シク觸接セルヲ以テ其衣服等ニ消毒法ヲ施ス一第二十條第二十一條ニ依ルヘシ

但日々衣服ヲ更換スル者ハ沸湯ニ入レ一時以上之ヲ煮沸スルヲ以テ足レリトス

第二十四條 看護人及ヒ患者死體運搬人ノ衣服、手道具等直チニ病毒ニ汚染セサルモ稍々浸染ノ疑アルモノハ石炭酸蒸氣(第二)或ハ亞硫酸瓦斯(第九)ヲ以テ薰蒸シ日光及ヒ大氣ニ曝スヘシ

第四 家屋船舶等消毒法

第二十五條 患者及ヒ死體ヲ置キタル室ノ疊、蓆類ハ之ヲ柱若クハ壁ニ倚セ掛ケ

戸棚等ヲ開放シ室内ニアリシ諸器具ハ之レヲ排列シ窓戸ヲ密閉シテ六時乃至八時間亞硫酸瓦斯(第九)ヲ蒸シ然ル後窓戸ヲ開キ病毒附著ノ恐アル板敷等ハ稀薄石炭酸水(第二)ヲ撒布シ更ニ之ヲ拭淨シ其他器具ハ石鹼水又ハ沸湯ヲ以テ洗淨シ充分水氣及ヒ日光ニ曝シヘシ避病院ノ病室及ヒ屍室モ亦之ニ倣フヘシ

但亞硫酸ノ爲メ其色質ヲ變化スルノ恐アルモノハ石炭酸蒸氣(第三)或ハ熱氣消毒法等ヲ攪用スヘシ輕症痢病ノ如キハ必スシモ本條ノ處置ヲ要ヒス醋水若クハ「コロール」水ニテ室内ヲ拭淨スルヲ以テ足レリトス

第二十六條 患者アリタル船室ノ消毒法モ亦前條ニ同シ

第二十七條 普通病院ニシテ區隔セシ病室及ヒ一時假用セシ家屋等ノ消毒法モ亦前條ニ同シ

但病室ハ數多ノ患者交々此内ニ入ルヲ以テ惡性ノ痢病ナラサルモ尙ホ前條ノ消毒法ヲ用フヘシ

第五 什具運搬器等消毒法

第二十八條 便器ハ之ヲ用フル毎ニ稀薄石炭酸水(第二)亞硫酸溶液(第十)ヲ以テ洗滌スヘシ

第二十九條 患者及ヒ死體若クハ瀉下物ニ汚染シタル物品ヲ運ヒタル諸器ハ稀薄石炭酸水(第二)ヲ灌注シ更ニ石鹼水若クハ沸湯ヲ以テ洗滌スヘシ

第三十條 病室内ニ用ヒタル什具及ヒ醫用器械等ハ稀薄石炭酸水(第二)或ハ亞硫酸溶液(第十)ヲ注キ然ル後沸湯ニテ洗淨スヘシ

第六 廁間溝渠等消毒法

第三十一條 患者ノ入リタル廁間ハ他人ノ入ルヲ禁シ亞硫酸溶液(第十)或ハ硫酸鐵合劑(第五)ヲ注キ其瀉下物ハ速ニ之ヲ汲取り人家遠隔ノ地ニ搬送スヘシ而シテ其糞壺ヨリ復々同様ノ消毒法ヲ行フヘシ

第三十二條 糞壺及ヒ桶ノ破壞シテ病毒滲漏ノ疑アルモノハ之ヲ掘除ケ其周圍ノ土ヲ掘取リ濃厚石炭酸水(第一)或ハ亞硫酸溶液(第十)ヲ充分ニ灌注シ人家遠隔ノ地ニ搬送シテ埋却スヘシ

但消毒藥ノ量ハ其中毒量五分一乃至三分一ナルヘシ

第三十三條 若シ誤テ吐瀉物ヲ溝渠下水等ニ投棄スルコトアルキハ充分ニ亞硫酸溶液(第十)或ハ硫酸硫酸鐵合劑(第六)ヲ注キ其淤泥ノ撈ヘ得ヘキ者ハ之ヲ撈ヘテ人家遠隔ノ地ニ搬送シテ埋却スヘシ或ハ多量ノ水ヲ灌キテ疏通セシムヘシ

但本條ノ如キ場所ニ於テ既ニ病毒ヲ混入スルキハ消毒法モ其功ヲ奏シ難ク終ニ増殖ヲ致サシムヘシ故ニ豫メ戒諭シテ誤テ之ニ投棄シ或ハ陰ニ投棄スル等ノ事ナカラシムルヲ要ス

實布埤利亞

實布埤利亞ハ一種ノ猛劇ナル傳染病ニシテ其毒ハ患者ノ痰唾、涕汁等ニ舍トリ又
 呼出スル所ノ空氣モ其毒ヲ包含スルヲ以テ之ニ觸ル、時ハ老少ニ論ナク皆之ニ感
 スルモノナリ而シテ幼稚ノ者ハ之ニ罹ル、最モ多クシテ且ツ危險ナリトス抑々此
 病毒ハ其發生時季ヲ擇ハス又風土ニ關涉スル、ナク不斷散在スル、アリ又一時ニ
 廣ク流行スル、アリ此症ハ必ス咽喉ニ發スルモノニシテ之カ爲メ其部ノ壞爛ヲ致
 シ甚シキモノハ須臾ニシテ斃ル、故ニ從來喉風、喉痺、馬癩風、纏喉風、咽氣ト唱フル
 モノ、中亦往々之レ有リ此病ハ患者ニ觸接セサルモ尙ホ感染ノ恐アルモノニシテ
 且ツ其毒久ク消滅セサルカ故ニ隔離消毒ノ方法ヲ忽ニスヘカラス

第一項 清潔法

第一條 此病流行ノ際ハ務テ一般清潔法ニ注意シ既ニ發病スルトキハ其室内ノ掃
 除ヲ怠ルヘカラス家屋、衣服等清潔ニシテ且ツ隔離法充分ナルトキハ廣ク流行
 ニ至ラズシテ消滅スルヲ得ヘシ

第二項 攝生法

第二條 此病ハ殊ニ咽喉ヲ侵スモノニシテ既ニ些少ノ咽吭炎アルモノハ自カラ侵
 襲ヲ被リ易シ故ニ專ラ口内、喉頭、氣管等ノ炎症ヲ誘發スヘキ事件ヲ戒メ常ニ含
 漱スルヲ長トス
 但其誘發スヘキ事件トハ頸圍ヲ温保セシモノ、驟カニ寒冷ニ胃觸ノ或ハ苛烈ノ

飲食料ヲ用ヒ或ハ高談放歌シ或ハ幼稚ヲシテ頻ニ號泣セシメ及ヒ小學校ニ於
 テ安ニ高聲ヲ發シ讀書唱歌セシムル等ニシテ皆宜ク之ヲ戒シムヘシ

第三項 隔離法

第三條 醫師ノ實布埤利亞ト診斷スルトキハ其家ノ門戸ニ病名票ヲ貼附スヘシ
 但患者治癒或ハ死亡若クハ避病院ニ送致シ其病室ニ消毒法ヲ行ヒタル後ハ即
 チ其病名票ヲ去ルヘシ
 第四條 此病ハ患者ニ接觸シ或ハ患者ノ痰唾ニ汚染セル物品若クハ室内ノ空氣ヨ
 リ傳染スルヲ以テ患者ハ速ニ之ヲ隔離シ看護人ノ外ハ漫ニ接近セシム可ラス殊
 ニ小兒ヲ遠サクヘシ
 但室内ノ空氣ハ常ニ新鮮ナラシムルヲ要ス

第五條 病兒ハ健兒ト共ニ遊戯セシムルヘカラス又學校等ニ行カシムヘカラス

第六條 病室内ニハ不用ノ衣服及ヒ器具ヲ置クヘカラス

第七條 患者ノ用フル所ノ飲食器及ヒ玩具等ハ他人ト共用スヘカラス

第八條 若シ其流行ノ勢盛ニシテ避病院ヲ要スル、アルトキハ普通病院ヲ區隔シ

或ハ相當ノ空屋ヲ以テ之ニ充ル等其便宜ニ任スヘシ

第九條 避病院ヲ設ルトキハ別ニ清淨ナル屍室ヲ設ケ患者死亡シタルトキ之ニ移
 スヘシ

但屍室ハ親族ノ弔者ヲ入ルカ爲メ豫メ其餘地ヲ設クヘシ

第十條 避病院ニ在ル患者ノ親戚又ハ別段ノ交誼アル者看護ヲ爲サンコトヲ望ムトキハ之ヲ許スヘシ但屢々交替スルハ許スヘカラス

第四項 消毒法

第十一條 此病毒ハ患者ノ痰唾及ヒ呼氣或ハ涕汗等皆之ヲ傳送物アリ故ニ此等ノ排泄物ニ汚染シタル物ハ必ズ消毒法ヲ行フヘキモノトス

第十二條 消毒法ハ其物ニ從テ區別スルコト左ノ如シ

第一 患者及ヒ看護人等消毒法

第十三條 患者治癒ノ後他人ト交通シ又ハ避病院ヨリ退出ノ節ハ必ズ沐浴シ石鹼水ヲ用テ全身ヲ洗ヒ他ノ衣服若クハ消毒法ヲ施シタル衣服ヲ著スヘシ看護人及ヒ避病院ノ醫師、看護人、死體取扱人等ノ他人ニ接スルトキモ亦此法ニ從フヘシ

第十四條 自宅患者ヲ往診セル醫師及ヒ患者ノ家人ニシテ直接セサル者親戚朋友ノ一時見舞タル者等其室ヲ出ルトキハ必ズ盥漱スヘシ

第二 死體及ヒ排泄物等消毒法

第十五條 死體ハ醫師確認ノ後速ニ棺内ニ斂メムヘシ若シ濃厚石炭酸水(第一)ニ浸シタル綿ヲ以テ口鼻ヲ栓塞スルコトヲ得ハ最良トス
但死體ハ成ダケ火葬スルヲ良トス

第十六條 痰唾及ヒ涕汗等ヲ拭ヒタル手巾及ヒ紙、綿布ノ類ハ悉皆取集メ之ヲ燒却スヘシ

但水分剰多ニシテ燒盡シ難キトキハ稀薄石炭酸水(第二)ヲ注キ人家遠隔ノ地ニ搬送シテ埋却スヘシ

第三 衣服器具等消毒法

第十七條 衣服、臥具ノ甚シク汚穢シタル者ハ之ヲ燒却スルヲ良トス其僅ニ穢レタルモノハ稀薄石炭酸水(第二)ヲ注キ浸シ置クコト二十四時間ニシテ更ニ沸湯ヲ注キ且ツ洗滌シ日光ニ曝スヘシ或ハ亞硫酸瓦斯(第九)ヲ以テ薰蒸セシ後日光及ヒ大氣ニ曝スヘシ

第四 家屋船舶等消毒法

第十八條 此病毒ハ極テ頑強ニシテ善ク粗糙ナル物ニ附着スルカ故ニ最モ注意シテ下條ノ消毒法ヲ充分ニ行フヘシ

第十九條 患者及ヒ死體ヲ置タル病室ノ疊、蓆類ハ之ヲ柱ニ倚セ掛ケ戸棚等ヲ開放シ窓戸ヲ密閉シテ六時乃至八時間亞硫酸瓦斯(第九)ヲ薰シ然ル後窓戸ヲ開キ疊、蓆、壁、障子等ニハ更ニ稀薄石炭酸水(第二)ヲ撒布シ或ハ之ヲ以テ拭淨シ其他棚架及ヒ板敷等ハ石鹼水又ハ沸湯ヲ以テ洗淨シ充分大氣及日光ニ曝スヘシ避病院ノ病室、屍室及ヒ普通病院ヲ區隔セシ病室又ハ臨時假用セル家屋モ亦之

ニ做フヘシ

但亞硫酸ノ爲メニ其色質ヲ變化スルノ恐アルモノハ石炭酸蒸氣(第三)或ハ熱氣消毒法等ヲ撰用スヘシ

第五 什具運搬器等消毒法

第二十條 病室ニ用ヒタル什具飲食器及ヒ玩具等ノ甚シク汚穢シタルモノハ之ヲ燒却シ其燒却スヘカラサルモノハ稀薄石炭酸水(第二)或ハ亞硫酸溶液(第十)ヲ灌キ然ル後石鹼水又ハ沸湯ニテ洗滌スヘシ其洗フヘカラサルモノハ病室ニ消毒法ヲ行フノ際其内ニ排列シ(濕潤ニ堪フヘキモノハ之ヲ濕スヲ良トス)亞硫酸瓦斯(第九)或ハ石炭酸蒸氣(第三)ニテ一時間蒸蒸スヘシ然ラサレハ室外ヘ出スヘカラス

第二十一條 患者ノ玩弄セシ圖書書籍ノ類ハ之ヲ播展シ石炭酸蒸氣(第二)或ハ亞硫酸瓦斯(第九)ヲ蒸蒸スヘシ

第二十二條 患者及ヒ死體ヲ運搬セシ器具等ハ稀薄石炭酸水(第二)ヲ灌注シ更ニ石鹼水若クハ沸湯ヲ以テ洗淨スヘシ其舂舟ノ如キハ海水ヲ以テ洗フモ可ナリ

第二十三條 醫術器械等ノ木製及ヒ金屬製ニシテ病毒ニ接觸シタルモノ例ヘハ壓舌篋ノ如キハ總テ稀薄石炭酸水(第二)ヲ以テ洗フヘシ

發疹室扶私

發疹室扶私(英名泰扶私)ハ特異ノ揮發性傳染毒ニシテ飢饉熱、軍陣疫、囚獄熱等ノ稱アリ從來腐敗熱、神經熱、發斑熱、温疫、傷寒ト唱ヘシモノ、中ニモ亦此病アルコト多シ其病タルヤ地方ヲ撰ハス氣候ニ關セシ流行スルト雖モ多クハ衆人群集大氣流通ノ不佳ナル所ニ萌動シ衣服身體ノ不潔或ハ飲食ノ不良不足及ヒ過度ノ勞力、露臥、夜行其他身體ヲ衰弱セシムル事項ヲ誘因トシ傳染蔓延スルモノナリ其流行スルニ及テハ貴賤老幼別ナク其誘因アルカ或ハ隔離法ノ行届サルヨリ倍々傳染ノ勢ヲ盛ニシ動モスレハ年ヲ亘リ消滅セサルコトアリ故ニ此病ノ豫防法ハ最モ忽ニスカラサルモノトス

第一項 清潔法

第一條 發疹室扶私ノ病毒ハ不潔、狹隘、空氣ノ汚濁ヨリ生スルモノナレハ其發現スルニ當テ囚獄、兵營及ヒ製造所、貧院、棄兒院其他群集雜居稠密ノ場所ハ勿論一般ノ家屋クモ掃除ニ怠ラズ務テ清潔ニシタ且シ空氣ヲ疏通セシムヘシ最モ其身體ニ切ナル清潔法ヲ至要トシ日々沐浴シ衣服ノ浣濯ヲ怠ルヘカラス殊ニ病毒ノ發生ヲ助クヘキ一切ノ汚穢物即チ廁圈、芥溜、溝渠ノ掃除ニ注意ヲ加フヘシ

第二條 避病院病室ニ於テ用フル所以臥具ハ無色若クハ淡色ノ者ヲ要スヘシ其汚染ノ見易キカ爲メナリ自宅療養ノ者モ亦同様ノ注意ヲ要スヘシ

第二項 攝生法

第三條 此病ニ感スルノ素因ハ各人多クハ之ヲ有スト雖モ就中飢饉ノ窮民、軍陣ノ兵卒、監獄ノ囚徒等ノ如キハ其居處及ヒ攝生ノ不良ナルヨリ此病ニ罹ルモノ多シト夫レ飢饉ノ時ニ當テハ攝生ノ事皆其宜キヲ得スト雖モ其最モ甚シキハ食物ノ不足ト不良トニアリ故ニ衛生官吏ハ務テ其食品中成タケ滋養分多キモノヲ撰ヒ有害ノ物ヲ指示シテ之ヲ避ケシムヘシ

第四條 兵卒ノ軍陣ニ在ルトキハ固ヨリ攝生ノ方ヲ講スルニ迫ナカルヘント雖モ若シ一人發病スルトキハ直チニ全軍ニ波及スルノ虞アリヲ以テ成ルタケ無用ノ露臥過勞ヲ慎ミ且ツ飲料ノ良否ニ注意ヲ加フヘシ囚獄、懲役場ノ如キハ流行ノ際殊ニ空氣ノ流通及ヒ其食物ニ注意ヲ加ヘ工役等モ過度ナラシメサルヲ要ス一且病毒ノ蔓延スルニ至テハ高貴豪富ノ人ト雖モ猶モ其傳染ヲ免ル、能ハス是各人其素因アレテ證スルニ足ル故ニ此時ニ當テハ務テ身體ノ溫度ヲ適宜ニ保持シ飲食ヲ攝シテ過度ノ勞力ヲ爲スヘカラス且夜氣、風雨等ノ感冒及ヒ身體ヲ衰弱セシムルノ諸件ヲ戒ムヘシ

第三項 隔離法

第五條 醫師發疹室扶私ト診斷シタルトキハ直チニ其家ノ門戸ニ病名票ヲ貼附スルヘシ但患者治癒又ハ死亡若クハ避病院ニ送致ス其室ニ消毒法ヲ行ヒタル後ハ即チ

其病名票ヲ去ルヘシ

第六條 發疹室扶私ハ其毒揮發性ニシテ患者ノ皮膚、蒸發氣、呼氣ヨリ發スルモノナレバ直チニ患者ニ接觸セサルモ尙ホ之ヲ感受スルコトアリ故ニ患者ノ身體ヲ以テ皆病毒ナリト看做スヘシ又患者數名ヲ狹隘ノ一室ニ入ルトキハ病毒稠厚トナリ感染ノ勢益々烈ク此室内ニ入ルモノ忽チ其病害ヲ受ルノ恐アリ故ニ患者ハ速ニ之ヲ隔離シ且ツ相當ノ廣室ニ移ササルヘカラス

第七條 病室ハ適宜ニ窓戶ヲ開キ換氣法ニ注意シ常ニ其内ノ空氣ヲ清鮮ナラシメ看護人ノ外必ズ接近セシムヘカラス

第八條 家族中ニ於テモ看護人ヲ定メ止ムヲ得サル事故アルノ外他人ト交通ヲ絶チ又老幼等ハ成タケ速ニ他家へ避退セシムヘシ否テサレハ啻ニ其害ヲ受クルノミナラス之カ媒介トナリ大ニ傳播スルノ恐アレハナリ

但家人ト雖モ要用アルノ外其室内ニ入ルヘカラス若シ外人ノ要用アリテ來ルトキハ戶外ニ於テ之ヲ辨スヘシ且ツ看護人ハ成タケ更換スヘカラス是レ其揮發毒ノ衣服等ニ附著シテ廣ク他人ニ傳染スレハナリ

第九條 病室内ニハ不用ノ器具ヲ置クヘカラス殊ニ毛布ノ類ハ其病毒ヲ包含シ易キカ故ニ必要ノ外決シテ之ヲ置クヘカラス

第十條 此病ハ死體ヨリモ尙其病毒ヲ發出シ以テ感染セシムルノ例少ナカラス故

ニ死體ニハ速ニ消毒法ヲ行フヘシ死體ニ沐浴セシメ或ハ屍傍ニ接近スル等ノコトハ決シテ爲スヘカラス

第十一條 患者治癒死亡ノ後ハ病室ニ消毒法ヲ行ヒ數週間窓戸ヲ開放シ風氣ヲ流通スヘシ蓋シ消毒ノ後ト雖モ即チ室内ニ起臥スルトキハ傳染ノ恐ナキニアラサルカ故ナリ

第十二條 船舶中ニ此病ヲ發スル者アルトキハ速ニ其室ヲ異ニシ看護人ノ外交通ヲ絶ツコト尙ホ人家ニ於ルカ如クスヘシ

但此病ハ動モスレハ衆人群集セル船室ニ發シ又船中飲食ノ不良不足等其素因トナルカ故ニ若シ患者アラハ速ニ之ヲ隔離シ室内ノ清潔法ニ注意スヘシ

第十三條 製造所、會社、學校、旅店等其他衆人群集ノ處ニ於テ發病セシ者アラハ成タケ速ニ之ヲ避病院ニ送ルヲ良トス若シ避病院ナク他ニ相當ノ空屋アラハ直チニ此ニ送致スヘシ然レドモ其發病セシ所ノ室廣潤ニシテ且ツ他人ト充分ニ隔離スルヲ得ハ必シモ他ニ送ルヲ要セサルヘシ

第十四條 避病院ノ位置ハ人家ニ接近セス且ツ恒風ノ上ニアラサル地ヲ撰ビ必ス往來繁多ノ路邊等ニ置クヘカラス

但其門前ニ高ク病名標旗ヲ掲クヘシ
第十五條 避病院ノ建築ハ簡易ヲ旨トシ善美ヲ要セス是レ流行終熄ノ後燒却スル

チ良トスレハナリ

第十六條 避病院ノ病室ハ最モ濶大ナルヲ要スル故ニ患者一人ニ二坪半ト見積リ其人數ノ概計ハ虎列刺第三十四條ニ載セタル割合ニ從ヒ之ヲ設クヘシ其他醫師詰所、事務所、看護人休息所並ニ簡易ノ薰蒸室等ヲ設クヘシ(虎列刺第三十六條参照)

第十七條 避病院ノ門側ニ輕易ナル風呂ヲ置キ看護人、見舞人等退出ノ時必ス之ヲ浴セシムルヲ良トス又病室ハ空氣ヲ流通セシメンカ爲メ窓戸ヲ開キ冬時ハ暖爐ヲ置キ其温度ヲ適宜ニシテ空氣ノ代謝ヲ助クヘシ

但患者退院若クハ死亡スルノ後ハ毎回其病室内ニ消毒法ヲ行フヘシ
第十八條 避病院ニハ清淨ナル屍室ヲ設ケ患者若シ死亡シタルトキハ直チニ之ニ遷シ病室ニ留置クヘカラス

但其屍室ニハ親族ノ用者ヲ入ルカ爲メ其餘地ヲ設クヘシ其用者ハ成タケ速ニ來ルヘキ手續ヲ爲スヲ要ス此病ハ死體モ亦發毒ヲ逞フスルモノナレハ必ス久ク留置クヘカラス

第十九條 人家稀疎ノ村落ニ於テハ必スモ避病院ヲ要セス若シ相當ノ空屋アラハ之ヲ假用シ或ハ苦葺等ノ屋舎ヲ假設スルモ可ナリ

第二十條 尋常ノ病院ニハ決シテ此患者ヲ入ルヘカラス若シ院内ニ從來傳染病室

ノ設アリテ充分ニ隔離法消毒法ヲ行ヒ得ベキノ目的アルモノハ入院ヲ許スヘシト雖モ尋常ノ病院ニ隔離セテ之ヲ用フヘカラス

第二十一條 避病院看護人ノ員數ハ重症ノ患者ニハ二人ニ一人ヲ附シ輕症ノ者ニハ四人ニ一人ヲ附シ其快復ニ赴ク者ニハ六人ニ一人ヲ附スル割合ヲ以テ便宜斟酌シ且ツ晝夜交代セシムヘシ

但看護人ニハ其表記アル衣服ヲ著セシム且ツ成ダケ其人ヲ更換セシムヘカラス

第二十二條 避病院ニ在ル患者ノ親族又ハ別段ノ交誼アル者看護ヲ爲サントテ望ムトキハ之ヲ許スヘシ但其看護人ハ多人數ナラサルヲ要シ且ツ屢々更替スルヲ許スヘカラス

第二十三條 避病院ニ携ヘ來リシ衣服、手道具等ハ別室ニ置クヲ良トス

第二十四條 患者ノ親族又ハ別段ノ交誼アル者來訪スルモ成ダケ室内ニ入ルヲ許サズルヲ良トス

第二十五條 此病ハ揮發性ニシテ一時ニ衆人ヲ侵シ若シ一人發病スルトキハ其衣服等ニ附着セル病毒忽チ傳播シ大ニ流行ノ媒介トナルヲ以テ流行ノ際ニハ成ダケ衆人群集スルノ事業ヲ差止メ且ツ社寺參拜等ノ爲メ多人數旅行スルヲ差止ルヲアルヘシ

第四項 消毒法

第二十六條 此病毒ハ患者及ヒ死者ノ身體ヨリ發シテ衣服、臥具、器具ハ勿論居室ノ畳、蓆、屏障等ニ至ルマテ盡ク附着シテ其病毒久ク潜匿スル者ナレハ病體及ヒ死體ニ近接セル者ハ都テ病毒ト同視シ消毒法ヲ行フヲ要ス

第二十七條 消毒法ハ其物ニ從テ區別スルコト左ノ如シ
第一 患者及ヒ看護人等消毒法

第二十八條 患者治癒ノ後始テ他人ト交通シ又ハ避病院ヨリ退出ノ節等ハ必ス沐浴シ石鹼水ヲ用テ全身ヲ洗ヒ他ノ衣服若クハ消毒法ヲ施シタル衣服ヲ着スヘシ看護人及ヒ患者死體運搬人並ニ避病院ノ醫師、死體取扱人及ヒ船中ニテ患者ト同席セシ者等他人ト交通スル時亦此法ニ從フヘシ

第二十九條 自宅患者ヲ往診セシ醫師及ヒ患者ノ家人ニシテ直接セサル者親戚朋友ノ一時見舞アル者ハ成ダケ石鹼水或ハ醋水ニテ顔面及ヒ手ヲ洗拭スヘシ

第三十條 死體ハ充分ニ稀薄石炭酸水(第二)ニ浸シタル單衣若クハ綿布ヲ以テ之ヲ包ミ速ニ棺内ニ斂ムヘシ

但死體ハ成ダケ之ヲ火葬スルヲ良トス
第三十一條 西洋形船舶航海中ニ死者アルトキハ速ニ濃厚石炭酸水(第一)ニ浸シ

タ、單衣若クハ綿布ヲ以テ之ヲ包ミ假ニ棺内ニ斂メ通常屍室或ハ船中適宜ノ場
所ヲ見計ヒ此ニ入レ置キ時々濃厚石炭酸水(第一)ヲ灌注スヘシ

但陸地ニ著スルトキハ速ニ其地方ノ警察官吏衛生委員ニ届出處分スヘシ

第三十二條 此病ハ必シモ排泄物ヨリ傳染セスト雖モ空氣ヲ汚スノ恐アルヲ以テ
成ヌケ速ニ取除ケ病室内ニ留置ヘカラス

第三 衣服臥具等消毒法

第三十三條 患者ノ久ク着シタル衣服、臥具ノ汚垢ニ染ミタル者、又ハ死體ニ直接
シタル臥具ハ避病院ニテ用ヒタル臥具、蚊帳等ハ成クケ燒却スルヲ良トス其燒却
チ憚ルヘキモノニシテ洗濯スヘキハ之ヲ桶ニ入レ稀薄石炭酸水(第二)ヲ濯キ浸
シ置シコト二十四時間ニシテ更ニ沸湯ヲ注キ四五分ヲ經ルノ後水ヲ以テ洗淨
シ日光ニ曝スヘシ石炭酸等若シ缺乏スルトキハ熱湯中ニ入レ一時以上煮沸スヘ
シ

第三十四條 同前ノ品種ニシテ洗濯スヘカラサルモノハ亞硫酸瓦斯(第九)石炭酸
蒸氣(第二)ヲ以テ薰蒸シ或ハ熱氣消毒法ヲ行ヒ後日光及ヒ大氣ニ曝スヘシ

第四 家屋船舶等消毒法

第三十五條 患者及ヒ死體ヲ置キタル室ノ疊席類ハ之ヲ柱若クハ壁ニ倚セ掛ケ戸
棚等ヲ開放シ室内ニアリシ諸器具ハ之ヲ排列シ窓戸ヲ密閉シテ六時乃至八時間

亞硫酸瓦斯(第九)ヲ薰シ然ル後窓戸ヲ開キ病毒附着ノ恐アル柱、板敷等ハ稀薄
石炭酸水(第二)ヲ撒布シ更ニ之ヲ拭淨シ其他器具ハ石鹼水又ハ沸湯ヲ以テ洗淨

シ充分大氣及ヒ日光ニ曝スヘシ避病院ノ病室及ヒ屍室モ亦之ニ倣フヘシ

但金銀器、書畫其他彩色ヲ施セル物及ヒ絹帛等亞硫酸ノ爲メニ其色質ヲ變化

スルノ恐アル者ハ初ニ之ヲ取除ケ別ニ石炭酸蒸氣(第二)或ハ熱氣消毒法等ヲ
適宜撰用スヘシ

第卅六條 患者アリタル西洋形船舶ハ其處置尋常ノ家屋ニ大異ナシト雖モ下等各

室ニ至テハ衆多ノ乘客皆積荷ノ間ニ枕籍シ幾シト彼我ノ別ナキカ故ニ若シ其中

ニ發病者アルトキハ滿室ノ乘客、積荷、手荷物ハ皆病毒ニ浸染シタル者ト看做

乘客、手荷物ハ上陸ノ時充分ニ消毒法ヲ行ヒ積荷ハ其儘其室ニ於テ六時乃至八

時間亞硫酸瓦斯(第九)或ハ品種ニヨリ石炭酸蒸氣(第二)ヲ薰スルノ後ニ非サレ

ハ陸揚スルヲ許サス

第三十七條 日本形小船ハ前條ヲ斟酌シテ消毒法ヲ行ヒ海水ヲ以テ普ク船身ヲ洗

フヘシ

第三十八條 尋常家屋ヲ避病院ニ假用ヒシモノハ其病室トナセシ部分ハ亞硫酸瓦

斯(第九)ヲ薰セシ後稀薄石炭酸水(第二)或ハ亞硫酸溶液(第十)ヲ洒キ石鹼水ヲ

以テ洗淨スヘシ

第三十九條 病室ハ不斷換氣法ニ注意スヘシ是亦多少消毒ノ効アルモノトス
 第四十條 避病院ハ流行ノ後成タケ燒却スルヲ良トス否ラサレハ先ツ汚穢シタル
 板敷、板壁及ヒ柱等ハ濃厚石炭酸水(第一)又ハ亞硫酸溶液(第十)ヲ以テ充分ニ
 洗淨シ數日間開放シテ大氣ニ曝シ然ル後之ヲ取毀ツヘシ

第五 什具運搬器等消毒法

第四十一條 病室ニ用ヒタル什具ハ總テ稀薄石炭酸水(第二)或ハ亞硫酸溶液(第十)ヲ以テ充分ニ洗淨スヘシ其洗フヘカラサルモノハ病室
 乙)ヨリ濯キ然ル後石鹼水又ハ沸湯ニテ洗淨スヘシ其洗フヘカラサルモノハ病室
 消毒法ヲ行フノ際其内ニ排列シ(濕潤ニ堪フヘキモノハ之ヲ濕スヲ良トス)亞
 硫酸瓦斯(第九)或ハ石炭酸蒸氣(第三)ヲ以テ一時間薰蒸スヘシ
 第四十二條 書籍新聞紙ノ類病室ニアリタルトキハ之ヲ緋展シ石炭酸蒸氣(第三)
 若クハ亞硫酸瓦斯(第九)ヲ薰スヘシ或ハ熱氣消毒法ヲ行フモ可ナリ
 第四十三條 醫術器械及ヒ職人手道具其他木製、金屬製、陶製、漆製ノ諸器類ハ總
 テ稀薄石炭酸水(第二)ヲ以テ洗フヘシ

痘 瘡

痘瘡ノ病毒ハ揮發性及ヒ固性傳染毒ニシテ全ク患者ノ身體ヨリ發出シ又ハ死體及
 ヒ痘漿、痘痂ニ直接シテ感染スルノミナラス其患者ニ接觸セシ衣服、臥具其他一切
 ノ物品ヨリモ傳染シ又其病室内ノ空氣、塵埃モ之カ媒介トナリテ其病毒ヲ傳送ス

ルモノトス

痘瘡ハ古來ヨリ全世界ニ發現シ殊ニ亞性流行スルトキハ其勢猖獗ニシテ無數ノ人
 衆ヲ害シ良醫モ亦手ヲ束テ其術ヲ施スヘカラサルアリ但人生一回此病ニ罹ルトキ
 ハ感受性ヲ脱盡シ得ルヲ以テ英國ノ醫博士ジエンチル氏牛痘接種ノ法ヲ發明セシ
 以還其善感スル者ハ復タ天然痘ニ感スルナシ故ニ此法行ハレテヨリ大ニ患者ノ數
 ヲ減シ偶々流行スルモ其病性劇惡ニ至ラス殆ント其性ヲ變スルニ至ルヲ証スルニ
 足ル是故ニ種痘ヲ普及スルハ全ク此病ヲ防盡スル所以ニシテ即チ豫防ノ第一トス

第一項 清潔法

第一條 此病ハ各人感受性ヲ具フル故ニ一般清潔法ヲ要スルモ他病ニ於テ緊要ト
 スルカ如クナラス但患者ノ居室ヲ清潔ニシ痘漿等ニ汚染セル衣服ヲ屢々更換シ
 周圍ノ塵埃ヲ掃除シ專ラ他人ニ傳染スルヲ防クヲ要スルニアルノミ

第二項 攝生法

第二條 前條ニ載スルカ如ク牛痘ヲ接種シテ其素因ヲ脱盡スルトキハ復タ天然痘
 ニ感スルコトナシ然レトモ一回種ヲ以テ足レリトスヘキニ非ス再三接種シ其善
 感ノ確徵ヲ取ラサルヘカラス唯衣服、飯食等ノ攝生ヲ以テ此病ノ侵襲ヲ豫防ス
 ヘキニアラス

第三項 隔離法

第三條 醫師痘瘡ト診断シタルトキハ直チニ其家ノ門戸ニ病名票ヲ貼附スヘシ
但患者治癒又ハ死亡若クハ避病院ニ送致シ其病室ニ消毒法ヲ行ヒタル後ハ即チ其病名票ヲ去ルヘシ

第四條 痘瘡ノ毒ハ患者ノ身體又ハ其衣服、臥具等ヨリ傳染シ又患者ニ接近シタルモノ、衣服等ヨリモ傳染スルヲ以テ成ダケ患者ニ接近シ又ハ患者ノ用ヒタル衣服、器具等ニ觸ルヘカラス

第五條 自宅療養ノ患者ハ其室ヲ異ニシ看護人ノ外ハ成ダケ接近スヘカラス已ムヲ得サル事故アルノ外ハ他人ト交通ヲ絶チ殊ニ未痘者ヲ近クスヘカラス
第六條 家族中ニ於テモ看護人ヲ定メ其他要用アル者ノ外成ダケ之ヲ室内ニ入レシムヘカラス

但看護人ハ既痘者ニ限ルヘシ

第七條 病室内不用ノ器具ハ勿論殊ニ不用ノ毛布等ヲ置クヘカラス

第八條 患者死亡ノ後其屍傍ニ接近シ並ニ死體ニ沐浴セシムル等ハ爲サハルヲ良トス

第九條 縦令輕症ナル患者ト雖モ落痂後一週日ヲ經ルニアラサレハ學校其他衆人ヲ群集ノ場所ニ行カシムヘカラス
第十條 蚊蠅ハ好テ患者ノ皮膚ニ聚リ頗ル病毒傳播ノ媒介ヲナスモノナレハ病床

ニハ常ニ蚊帳ヲ張り蚊蠅及ヒ其他ノ小蟲ヲモ防クヘシ
第十一條 病室ハ消毒ノ後ト雖モ數週間未痘者ヲ入ルヘカラス

但同家内ニ於テ若シ復タ此病ニ罹ル者アルトキハ此病室ヲ用フルモ妨ケナシ
第十二條 西洋形船舶航海中若シ發病者アルトキハ其室ヲ異ニシ看護人ノ外他人ト交通ヲ絶ツト猶人家ニ於ケルカ如クスヘシ

第十三條 製造所、會社、學校、旅店等ニ在テ發病シ引取人ナキ者並ニ狹隘不潔ノ地ニ雜居スル者等ニシテ看護消毒法行届カス病毒ノ傳播ヲ防キ難キモノハ之ヲ避病院ニ送ルヘシ若シ避病院アラサルトキハ適當ノ空屋ニ移シテ之ヲ隔離スヘシ

第十四條 避病院ノ位置ハ人家ニ接近セス且ツ恒風ノ上ニアラサル地ヲ撰ヒ必ス往來繁多ノ路傍等ニ設クヘカラス
但其門前ニ高ク病名標旗ヲ掲クヘシ

第十五條 避病院ヲ新ニ構造スルトキハ空氣ノ流通ヲ主トシ善美ヲ要セス其狀ヲ高クシ窓戸ヲ濶大ニシ且ツ板壁ヲ用ヒテ洗淨ニ便ニシ其屋根ハ板葺、苔苔等一時リ便ニ任ズ可ナリ且ツ其病室ハ濶大ナルヲ要スルヲ以テ凡患者一人ニ三坪半ト見積リ之ヲ建設ヘシ

第十六條 避病院ノ病室ハ重症輕症ノ患者ヲ區別シテ之ヲ分隔シ二坪半ニ患者一

人ヲ置クヲ常トシ縱令幅濶スルトモ一坪若クハ一坪半ニ一人ノ割合ヨリ狹クスヘカラス

但此他醫師詰所、事務所、看護人休息所等便宜ニ之ヲ設ケ且ツ簡易ノ薰蒸室ヲ設クヘシ

第十七條 避病院ノ門側ニハ輕易ナル風呂ヲ設ケ看護人、見舞人等外出ノ時入浴ノ用ニ供スヘシ

第十八條 避病院ハ窓戶ヲ濶大ニシ空氣ヲ流通セシメ冬時ハ暖爐ヲ置キ室内ノ温度ヲ適宜ニシ空氣ノ代謝ヲ助クヘシ

但病室ハ患者治癒死亡ノ後毎回消毒法ヲ施スヘシ

第十九條 避病院ニハ別ニ清淨ナル屍室ヲ設ケ患者若シ死亡シタルトキハ直チニ此ニ移スヘシ

但屍室ハ親族ノ吊者ヲ入ル、カ爲メ其餘地ヲ設クヘシ且ツ其吊者ハ成タケ速ニ來ルノ手續ヲナスヲ要ス

第二十條 尋常病院ニハ決シテ此患者ヲ入ルヘカラス若シ院内ニ從來傳染病室ノ設アリテ充分ニ隔離法消毒法ヲ行ヒ得ヘキノ目的アルモノハ入院ヲ許スヘシト雖モ尋常ノ病院ヲ區隔シテ之ヲ用フヘカラス

第三十一條 人家稀疎ノ村落ヨ於テハ必シモ避病院ヲ設ルヲ要セス若シ相當ノ空

屋アラハ假ニ之ヲ用フヘシ

第二十二條 避病院看護人ノ員數ハ重症ノ患者ニハ一人ニ一人ヲ附シ輕症ノ者ニハ三人ニ一人ヲ附スル割合ヲ以テ便宜斟酌シ且ツ晝夜交代セシムヘシ

但看護人ハ既痘者ニ限ルヘシ且ツ其表記アル衣服ヲ著セシメ成タケ其人ヲ更換セシムヘカラス

第二十三條 避病院ニ在ル患者ノ親族又ハ別段ノ交誼アル者看護ヲ爲シコトヲ望ムトキハ既痘者ニ限リ之ヲ許スヘシ但屢々更替スルヲ許スヘカラス

第二十四條 患者ノ親族等一時見舞ヲ爲サント請フトキハ之ヲ許スト雖モ成タケ屢々スヘカラス其出ル時ニハ必ス充分ノ消毒法ヲ施スヘシ

第二十五條 流行ノ勢猛烈ナルトキハ祭禮、劇場等衆人群集ノ事業ヲ差止メ學校モ成タケ之ヲ閉ツルヲ長トス

第四項 消毒法
第二十六條 此病毒ハ濃漿、痲痘、呼氣、津唾及ヒ死體ヨリ傳染シ又患者ノ衣服、臥具、其他患者ニ接觸セシ器具及ヒ居室等ヨリモ傳染スルカ故ニ甚シク汚染セシモノハ成タケ燒却スヘシ

第二十七條 消毒法ハ其物ニ從テ區別スルコト左ノ如シ

第一 患者及ヒ看護人等消毒法

第二十八條 患者治癒落痂後前週日ヲ經テ初テ他人ト交通シ又ハ避病院ヨリ退
出ヲ節ニ必ズ沐浴シ石鹼水ヲ用テ全身ヲ洗ヒ他ノ衣服若クハ消毒法ヲ施シタル
衣服ヲ著スヘシ看護人及ヒ患者屍體運搬人並ニ避病院ノ醫師、死體取扱人等ノ
他人ニ交接スルトキハ亦此法ニ從フヘシ

第二十九條 自宅患者ヲ往診セル醫師及ヒ患者ノ家人ニシテ直接セサル者親戚朋
友ノ一時見舞タル者等ハ石鹼水或ハ醃水ニテ顔面及ヒ手ヲ洗フヘシ

第二 死體及ヒ排泄物等消毒法

第三十條 死體ヲ充分ニ稀薄石炭酸水(第二)ヲ浸シタル單衣若クハ綿布ヲ以テ以
フ包ミ速ニ棺内ニ斂ムヘシ

第三十一條 死體ハ成ケケ火葬セザルナラバ長トス埋葬シタルモノハ其病毒數十年
ヲ經ルモ消滅セサルモノトス

第三十二條 西洋形船舶航海中ニ死者アルトキハ速ニ濃厚石炭酸水(第一)ニ浸シ
タル單衣若クハ綿布ヲ以テ之ヲ包ミ假ニ棺内ニ斂メ通常屍室或ハ船中適宜ノ場
所ヲ見計ヒ此ヲ入レ置キ時々濃厚石炭酸水(第一)ヲ灌注スヘシ
但陸地ニ着スルトキハ速ニ其地方ノ警察官吏委員衛生ニ届出處分スヘシ

第三十三條 落痂及ヒ病室ノ塵埃又ハ患者ニ觸レタル綿布紙等ノ斷片ニ至ル迄時
々收拾シテ之ヲ燒却スヘシ

第三 衣服臥具等消毒法

第三十四條 患者ノ久ク用ヒタル衣服、臥具、及ヒ避病院ニ用ヒタル蚊帳ノ甚ク
病毒ニ浸染シタル者並ニ避病院ノ臥具、疊、蓆等ハ之ヲ燒却スヘシ

第三十五條 患者ノ著シタル衣服、臥具及ヒ手巾、蚊帳等又ハ死體ニ著セシ衣服等
ノ洗濯ニ堪フヘキモノハ之ヲ桶ニ入レ稀薄石炭酸水(第二)ヲ灌キ浸シ置クコト
二十四時ニシテ更ニ沸湯ヲ注キ四五分時ヲ經ルノ後水ヲ以テ洗淨シ日先ニ曝ス
ヘシ石炭酸等若シ缺乏スルトキハ熱湯中ニ入レ一時以上之ヲ煮沸スヘシ其洗濯
ニ堪ヘサルモノハ品種ニヨリ亞硫酸瓦斯(第九)若クハ石炭酸蒸氣(第二)ヲ以テ
薰蒸シ或ハ熱氣消毒法ヲ行ヒシ後日光及ヒ大氣ニ曝スヘシ

第三十六條 避病院ノ醫師、看護人及ヒ死體運搬人等ノ衣服ニ施スヘキ消毒法ハ
前條ニ同シ

第四 家屋船舶等消毒法

第三十七條 患者及ヒ死體ヲ置キタル室ノ疊、蓆類ハ之ヲ柱若クハ壁ニ倚セ掛ケ
戸柵等ヲ開放シ室内ニアリシ諸器具ハ之ヲ排列シ窓戸ヲ密閉シテ六時乃至八時
間亞硫酸瓦斯(第九)ヲ薰シ然ル後窓戸ヲ開キ病毒附著ノ恐アル柱、板敷等ハ稀
薄石炭酸水(第二)ヲ撒布シ更ニ之ヲ拭淨シ其他ノ器具ハ石鹼水又ハ沸湯ヲ以テ
洗淨シ充分大氣及ヒ日光ニ曝スヘシ避病院ノ病室及ヒ屍室モ亦之ニ倣フヘシ

但金銀器、書畫其他彩色ヲ施セル物及ヒ絹帛等亞硫酸ノ爲メニ其色質ヲ變化スルノ恐アル者ハ初ニ之ヲ取除ケ別ニ石炭酸蒸氣(第三)或ハ熱氣消毒法等ヲ適宜撰用スヘシ

第三十八條 患者アリタル西洋形船舶ハ其處置尋常ノ家屋ニ大異ナシト雖モ下等客室ニ至テハ衆多ノ乘客皆積荷ノ間ニ枕藉シ幾シト彼我ノ別ナキカ故ニ若シ其中ニ發病者アルトキハ滿室ノ乘客、積荷、手荷物ハ皆病毒ニ浸染シタル者ト看做シ乘客、手荷物ハ上陸ノ時充分ニ消毒法ヲ行ヒ積荷ハ其儘其室ニ於テ六時乃至八時間亞硫酸瓦斯(第九)或ハ品種ニヨリ石炭酸蒸氣(第二)ヲ薰スルノ後ニ非レハ陸揚スルヲ許サズ

第三十九條 日本形小船ハ前條ヲ斟酌シテ消毒法ヲ行ヒ海水ヲ以テ普ク船身ヲ洗淨スヘシ

第四十條 避病院或ハ便宜ニヨリ他ノ空屋ヲ假用セシモノハ其病室ニ供セシ部分ニ亞硫酸瓦斯(第九)ヲ薰セシ後稀薄石炭酸水(第二)或ハ亞硫酸溶液(第十)ヲ注キ石鹼水ヲ以テ洗淨スヘシ

但消毒ノ後モ數週間其内ニ入ルヘカラス且ツ空氣ヲ流通セシムヘシ

第四十一條 病室ハ不斷換氣法ニ注意スヘシ是亦多少消毒ノ効アルモノトス

第四十二條 臨時假設ノ避病院ニシテ其保存スヘカラサルモノハ流行熱ムノ後之ヲ取毀ツヘシ尤モ其前汚穢シタル板敷、板壁及ヒ柱等ハ濃厚石炭酸水(第一)又ハ亞硫酸溶液(第十)ヲ以テ充分ニ洗淨シ數日間開放シテ大氣ニ曝スヘシ

第五 什具運搬器等消毒法

第四十三條 避病院ニ携ヘ來リシ手道具、玩具等ハ治療若クハ死亡ノ後亞硫酸瓦斯(第九)薰蒸法ヲ行ハサレハ之ヲ出スヘカラス

第四十四條 患者及ヒ死體ヲ運搬セシ器具等ハ稀薄石炭酸水(第二)ヲ灌注シ更ニ石鹼水若クハ沸湯ヲ以テ洗淨スヘシ其舁舟ノ如キハ海水ヲ以テ洗フモ可ナリ

第四十五條 病室ニ用ヒタル什具、玩具ハ總テ稀薄石炭酸水(第二)或ハ亞硫酸溶液(第十)ヲ濯キ然ル後石鹼水又ハ沸湯ニテ洗淨スヘシ其洗フヘカラサルモノハ病室ニ消毒法ヲ行フノ際其内ニ排列シ(濕潤ニ堪フヘキモノハ之ヲ濕スヲ良トス)亞硫酸瓦斯(第九)或ハ石炭酸蒸氣(第三)ヲ以テ一時間之ヲ薰蒸スヘシ

第四十六條 患者ノ玩弄シタル圖書、書籍、新聞紙ノ類ハ之ヲ緋展シ石炭酸蒸氣(第三)若クハ亞硫酸瓦斯(第九)ヲ薰蒸スヘシ或ハ熱氣消毒法ヲ行フモ可ナリ

第四十七條 醫術器械及ヒ木製、金屬製、陶製、淡製等ノ諸器ニシテ病毒ニ觸レタルモノハ總テ稀薄石炭酸水(第二)ヲ以テ洗フヘシ

第三拾四號 (明治十八年十一月九日)

種痘規則左ノ通制定シ明治十九年一月一日ヨリ施行ス

但明治九年內務省甲第八號及甲總拾六號布達此規則ノ日ヨリ廢止ス

種痘規則

- 第一條 種痘ハ小兒出生後滿一年以内ニ之ヲ行フヘシ若シ不審感ナルトキハ更ニ一週年内ニ再三種ヲ行フヘシ
- 第二條 種痘ハ善感後ト雖モ五年乃至七年ニ再種ヲ行ヒ再種後五年乃至七年ニ三種ヲ行フヘシ
- 第三條 天然痘流行ノ地アルトキハ第一條第二條ノ期限ニ拘ハラズ掛官吏ノ指定シタル期日内ニ種痘ヲ行フヘシ
- 第四條 種痘ヲ受クヘキ者病氣或ハ事故アリテ第一條第二條第三條ノ時期ニ種痘ヲ行フコト能ハサルトキ病氣ハ醫師ノ診斷書事故ハ親戚又ハ隣保ノ證明ヲ爲シタル證書ヲ副ヘ局長役場ニ届出ヘシ
- 第五條 種痘ヲ受クシ者ハ醫師ノ指定シタル日ニ於テ檢診ヲ受ケ痘漿採取ヲ要スルトキハ之ヲ拒ムコトヲ得ス
- 第六條 種痘ヲ受クシ者ハ醫師ヨリ種痘證ヲ受領シ局長役場ニ届出ヘシ但天然痘ニ罹リタル者ハ醫師ヨリ其證ヲ受領シ本條ニ準スヘシ
- 第七條 十六歳未満ノ者ノ會長後見人若クハ雇主等ニシテ現ニ其幼者ヲ監督スル者ハ前各條ノ責ニ任スヘシ

貧院育兒院等ハ入院ノ者ハ該主長ニ於テ前各條ノ責ニ任スヘシ

第八條 醫師ハ種痘ノ善感不審感ヲ檢診シ種痘證ヲ付與スヘシ

但天然痘ニ罹リタル者ヲ治療シタルトキハ本條ニ準シ其證ヲ付與スヘシ

第九條 第一條第二條第三條第四條第五條第六條及第八條ヲ犯シタル者ハ五錢以上五十錢以下ノ科料ニ處ス

第十條 府知事縣令ハ種痘明細表ヲ製シ毎年一月七月ノ兩度內務卿ニ報告スヘシ

第十一條 此規則ヲ施行スル方法細則ハ府知事縣令ニ於テ便宜取設ク內務卿ニ届出ヘシ

右奉 勅旨布告候事

○傳染病豫防規則

第三拾四號 輪廓符 (明治十三年七月九日)

明治十二年(八月)第三拾貳號虎列刺病豫防假規則ヲ廢シ傳染病豫防規則左ノ通知定候條此旨布告候事

○傳染病豫防規則

總 則

第一條 此規則ニ稱スル傳染病トハ虎列刺、腸室私、赤痢、實布臣利亞、發疹室私、及ヒ痘疹ノ六病ニ云フ

但六病ノ外流行病アリテ其勢盛ナルノ兆アルトモハ地方長官ハ内務省ニ具申シ豫防法ヲ施行スヘシ

第二條 醫師ノ傳染病ヲ診斷スル者ハ遅クモ二十四時間ニ之ヲ患者所在ノ町村衛生委員ニ通知スルヲ要ス戸長ハ速ニ之ヲ郡區長及ヒ最寄警察署ニ通知シ郡區長ハ速ニ之ヲ地方廳東京府下ハ府廳ニ届出ヘシ

但土地ノ便宜ニ依リ醫師ヨリ直ニ警察署ニ届出警察署ヨリ衛生委員ニ通知スルモ妨ナシ

地方廳ハ一週間毎ニ新舊患者及ヒ治癒死亡ノ數ヲ内務省ニ申報スヘシ

第三條 地方長官ハ管内ニ傳染病流行ノ兆アリト認ムルトキハ其性狀ヲ記シテ速ニ之ヲ内務省ニ申報シ且ツ管内及ヒ隣接若クハ船舶交通ノ府縣最寄兵營其地碇泊ノ軍艦等ニ報告スヘシ

第四條 (明治十三年十一月第五十四號布告ヲ以テ削除)

第五條 諸官廳、兵營、軍艦、監獄、及ヒ官立ノ學校、病院、製作所等ニ於テ傳染病者アルトキ其主長ハ該地方官ト協議シ此規則ニ從ヒ豫防法ヲ施行スヘシ

第六條 虎列刺、赤痢、發疹室扶私、瘡瘡ノ流行ニ際シ地方長官ニ於テ豫防ノ爲メ避病院ヲ要スヘキト認ムルトキハ内務卿ニ具狀シテ之ヲ設クルコトヲ得但人民協議ヲ以テ避病院ヲ設クルハ地方長官ノ許可ヲ請フヘシ

第七條 醫團並ニ戸長ニ於テ傳染病者ノ看護行届カス者クハ病者ノ傳播ヲ防キ難シト認ムル者ハ避病院ニ入ラシムヘシ

第八條 掛リ官吏ハ傳染病者アル家ニハ其病名ヲ書シテ門戸ニ貼付シ要用ノ外他人ト交通ヲ絶タシムヘシ (十三年第二十四號ヲ以テ病名貼付ノ儀當分ニ之ヲ施行セサル旨布告アリ)

但患者治癒死亡又ハ避病院ニ入りタル後相當ノ消毒法ヲ行ハサルノ間ハ乃ホ本條ヲ遵守セシムヘシ

虎列刺病

第九條 虎列刺病者ノ排泄物及ヒ汚穢物ハ其運搬夫ヲ設ケ一定ノ場所ニ運輸・燒棄若クハ埋却セシムヘシ

第十條 虎列刺病者ノ死屍ハ其埋葬地テ區劃シ濫リニ雜葬セシムヘカラス且ツ他ニ改葬スルヲ許サス

但火葬ハ尋常ノ燒場ニ於テシ其遺骨ハ改葬スルモ妨ナシ

第十一條 虎列刺病者ニ用ヒタル臥具衣服器具及ヒ病室船室等ハ消毒法ヲ行フニアラサレハ再ヒ之ヲ用ヒ又ハ受授賣買スルヲ許サス

第十二條 虎列刺流行ノ際ニハ井泉、河流、水道及ヒ厠圍、芥溜、下水、溝渠等總テ病毒萌生ノ因トナルヘキ場所ニ注意シ掃除清潔ノ法ヲ設クヘシ

第十三條 虎列刺流行スルトキハ船舶交通ノ地方ニ於テ流行地ヨリ來ル所ノ船舶

ヲ検査シ患者若クハ死者アルトキハ此規則ニ從フテ處分スヘシ

第十四條 虎列刺流行ノ勢甚劇ナルトキハ地方長官ハ内務卿ニ具狀シ其許可ヲ得テ醫師衛生官吏警察官吏郡區町村吏等ヨリ適當ノ人員ヲ撰ヒ檢疫委員ノナリ豫防消毒ノ事務ヲ擔任セザムルコトヲ得

此場合ニ於テハ醫師タルモノ吐瀉ノ二症ヲ兼備スル病ヲ診斷スルトキハ總テ檢疫委員ニ届出ツヘシ但シ本項旅行ノ終始ハ地方廳ヨリ之ヲ管内ニ告示シ内務省ニ申報スヘシ

第十五條 前條ノ場合ニ於テハ地方長官ハ祭禮劇場等人民ノ群集ヲ差止ルヲ得虎列刺已ニ市街村落ノ全部若クハ一部ニ於テ蔓延ノ兆候ヲ顯ハシ其他ノ部分ニ及ホサハハ様遮斷シ得ヘキモノト見認ルトキハ地方官ヨリ内務卿ニ稟議シ交通ヲ絶シシムルノ處分ヲ爲スコトヲ得

但要用ノ者ハ豫官吏檢察ノ上交通ヲ許スコトヲ得

腸室私扶病

第十六條 腸室私扶病流行ノ際ハ第九條第十一條及ヒ第十二條ヲ適用スヘシ

赤痢病

第十七條 赤痢病流行ノ際ハ第九條第十一條及ヒ第十二條ヲ適用スヘシ

實布埤里亞病

發疹室扶私病

第十九條 發疹室扶私病者アルトキハ第十條第十一條ヲ適用シ其流行ノ際ニハ第十二條第十三條第十四條及ヒ第十五條ヲ適用スヘシ

第二十條 發疹室扶私病者若クハ其死屍ヲ藏セザル車輿等ハ毎回消毒法ヲ行フニアラサレハ他用ニ供スヘカラズ

痘瘡病

第二十一條 痘瘡病者アルトキハ第十條第十一條及第二十條ヲ適用シ患者ニ未痘者ヲ接近セザムヘカラズ其流行ノ際ニハ第十二條ヲ適用スヘシ

罰則

第二十二條 醫師戶長此規則ニ違背シタルトキハ五拾圓以内ノ罰金ニ處ス

第二十三條 官吏其等掌ノ事務ニ於テ此規則ニ違背シタルトキハ百圓以内ノ罰金ニ處ス

第二十四條 人民此規則ニ違背シタルトキハ壹圓五拾錢以内ノ科料ニ處ス

○官吏准右更傳染病豫防ニ從事シ感染シタルトキハ手當金ヲ給ス

○附令第二十三號 明治十九年七月十三日

官廳

官吏准官吏公體ニ依リ傳染病豫防救治ニ從事シ爲メニ感染シ又ハ死亡マシタルハ左ノ區別ニ從ヒ手當金ヲ給テ

一 手當金ヲ分テ吊祭料、救助料、療治料ノ三種トス

一 救助料ハ感染者又ハ死亡シタル者ノ遺族ニ之ヲ給ス

一 療治料ハ感染者治療看護ノ雜費トシテ之ヲ給ス

一 吊祭料ハ年俸十二分ノ一若クハ月俸一箇月分若クハ日給三十日分ヲ給ス但官

ヨリ埋葬スル者ハ之ヲ給セズ

一 救助料ヲ分テ二等トス

一等 俸給五箇月分日給百五十日分

二等 俸給三箇月分日給九十日分

一 感染者死亡シタルトキハ一等救助料ヲ給シ死亡セザルトキハ二等救助料ヲ給ス

一 療治料ハ一日壹圓ヲ給ス但官ヨリ治療スル者ハ之ヲ給セズ

○傳染病每週申報様式

○內務省令第四號 (明治十九年五月十一日)

廳 府 縣 東京府

除

藥 監 留 監

明治十六年(五月)乙第二十號及同年(六月)乙第二十三號遠傳染病每週申報左ノ通改正ス右様式ニ照準毎年四度(四月七月十月翌年一月)報告スヘシ但流行ノ兆アリト認ムルトキハ其性状ヲ記シテ速ニ報告スヘシ

何 府 廳

何 病 患 者 表

明 治 何 年 第 何 期

郡	何 區	何 國	流 行 經 過		町 村 數	戶 數	人 口	病 患 者 死 亡
			發 起 日	熄 滅 日				
			自何月何日 至何月何日					

一 報告期ハ一月ヨリ三月迄ヲ第一期四月ヨリ六月迄ヲ第二期七月ヨリ九月迄ヲ第三期十月ヨリ十二月迄ヲ第四期トス
一 六種傳染病ニ就キ各一表ヲ製スヘシ

一 戶數人口、前年末戶船調査ニ據ルヘシ
第一期ニ報告シタル有病町村數戶數及人口ハ第二期報告ニハ之ヲ省キ其期中
ニ新メコ患者アリタル町村數戶數及人口數ノミヲ掲ク第三期以下之ニ據テ

在監人何病患者表

在監人何病患者表

明治何年何期

監人姓名	在監人一日平均數		房數	患者數	死者數	亡
	已決	未決				
本表						

- 一 報告期、一月ヨリ三月迄ヲ第一期四月ヨリ六月迄ヲ第二期七月ヨリ九月迄ヲ第三期十月ヨリ十二月迄ヲ第四期トス
- 一 各種傳染病ニ就キ各一表ヲ製スヘシ
- 一 每期報告在監人一日平均數ハ一期間毎月末ノ現在數ヲ以テ之ヲ平均スヘシ
- 一 第四期報告ノ備考ニ一箇年間毎月末ノ現在數ヲ以テ平均シタル在監人一日平均數ヲ掲クヘシ
- 一 第一期ニ報告シタル感染監房數ハ第二期報告ニハ之ヲ省キ其期中ニ新ニ患者

○ 虎列刺病流行地方ヨリ來ル船舶検査規則

第三拾壹號

輪船法

明治十五年六月廿三日

虎列刺病流行地方ヨリ來ル船舶検査規則左ノ通制定ス

虎列刺病流行地方ヨリ來ル船舶検査規則

第一條 凡ソ虎列刺病流行地方ヨリ來ル船舶ハ検査官ノ検査ヲ受ケ其記名セシ許可ノ證書ヲ得タル後ニ非レハ他港ニ進航シ陸地又ハ他船ト交通シ及ヒ乗組人船

客ノ上陸並ニ積荷ノ陸揚ヲ爲ス可カラズ

第二條 其船中該病死者又ハ該病死者ナキキハ検査官直ニ其船舶ノ他港ニ進航シ陸地又ハ他船ト交通シ及ヒ乗組人船客ノ上陸並積荷ノ陸揚ヲ爲ノ許可ヲ與フヘシ

但検査官ニ於テ必要ト認ムルトキハ其船舶ヲ四十八時間以内其ノ指定スル場所ニ碇泊セシメ十分ノ消毒法ヲ施スコトヲ得

第三條 若シ其船中ニ該病患者又ハ該病死者アルトキハ検査官其船舶ヲ陸地又ヒ

他船ニ傳染ノ虞ナシト認ムル距離ニ於テ其指定スル場所ニ碇泊セシム可シ
該病患者ハ之ヲ遊病院若クハ其住居若クハ其他検査官ノ適當ト認ムル場所ニ送致ス可シ其死者ハ若シ縁故人ノ望アルトキハ其望ニ隨ヒ
消毒法ヲ施シタル後之ヲ埋葬スヘシ
地方官所定ノ場所ニ火葬シ若クハ十分ノ

前項ノ手續ヲ終リ檢疫官ハ其乗組人船客ニハ十分ナル消毒法ヲ施シタル後上陸ノ許可ヲ與ヘ其船舶及傳染ノ虞アリト認ムル積荷ニハ十分ナル消毒法ヲ施シタル後其船舶ノ他港ニ進航シ陸地又ハ他船ト交通シ及積荷ヲ陸揚スルノ許可ヲ與フ可シ

第四條 此規則ニ違背シタル者若クハ此規則ノ執行ヲ妨害シタル者ハ刑法ニ依テ之ヲ處分スヘシ

第五條 此規則施行始終ノ期日並ニ場所ハ其都度内務卿ヨリ之ヲ指定ス可シ
右奉 勅旨布告候事

(編者曰ク十二年第二十九號布告檢疫停船規則ナルモノアレトモ開港場ノミニ施行スルモノナレハ畧ス)

(補遺)

○古着及襪履ヲ健康地ニ輸送ヲ禁ス
○甲第九十二號 (明治十八年九月十九日)

虎列刺病流行ノ際ニ於テハ其流行地方ヨリ古着及ヒ襪履ヲ他ノ健康地ニ輸送スルヲ禁シ候條此旨布達候事

○檢疫手續中刪除追加
○甲第九拾三號 (明治十八年九月廿二日)

明治十五年(七月)乙第百貳拾四號布達虎列刺病檢疫手續中左ノ通刪除追加候條此旨布達候事

第六條中(暫ク)ノ二字ヲ刪除
第八條追加

船舶入港スルトキハ檢疫係少クモ二名速ニ其船舶ニ到リ虎列刺病流行地方ヨリ來レルモノハ第五條第六ニ依リ支障ナキ場合ニ於テハ荷物等ノ陸上又ハ他所ニ進行スル許可ノ(左ノ雛形ニ依リ)証ヲ船長ニ與フヘシ
但シ本文ノ手續ハ船付ノケ所ニ適用ス

竪四寸

第何號

檢疫濟之証

茨城縣何那何町檢疫所

檢疫係

何之誰印

同

何之誰印

明治何年何月何日

川下

十八年三月十三日
甲第三十三號
十九年四月廿九號
第七號
三十號
改正
除追加
面

○第四款 醫事

○醫師通則

○甲第二號 (明治十八年一月十六日)

明治十五年縣廳乙第二號醫事規則ヲ廢シ醫師通則別紙之通相定候條此旨布達候事

醫師通則

第一條 醫師タル者ハ明治十六年第三十五號公布(縣廳甲第二百一號)ヲ遵守スヘキ

ハ勿論新クニ醫術ヲ開業セントスルモノハ全第三十四號公布(縣廳甲第二百二號)

ニ據リ所轄郡役所ヲ經テ縣廳へ出願スヘシ

第二條 管外ヨリ管内へ轉居又ハ出張所ヲ設ケ醫術ヲ開業セントスルモノハ開業ノ

場所ヲ記シタル届書ニ開業免狀寫ヲ副ヘ所轄郡役所ヲ經テ縣廳へ差出スヘシ

但管内ヨリ管外へ轉居スルモノ亦本文ノ手續ヲ經テ届出ツヘシ

第三條 管内甲郡町村ヨリ乙郡町村へ轉居開業スルトキハ所轄郡役所ヲ經テ縣廳へ

届出ツヘシ

第四條 種痘術ヲ爲ス者ハ明治十七年縣廳甲第七十一號及十九年甲第十二號布達ニ

準據スヘシ

第五條 管内ニ醫術ヲ開業スル者ハ明治十六年縣廳乙第八十一號布達ニ準據スヘシ

第六條 廢業又ハ死亡スルトキハ所轄郡役所ヲ經テ免狀ヲ返納スヘシ

第七條 死亡又ハ死産者アルトキハ第一號又ハ第二號書式ノ届書ヲ付與スヘシ

但死産ノ醜胎ニ係ル者ヲ診察スルトキハ更ニ最寄警察官ニ報告スヘシ

第八條 傳染病患者ヲ診察スルトキハ明治十三年第三十四號公布(縣廳甲第八拾五

號)及十五年縣廳乙第二百二十五號布達ニ準據スヘシ

第九條 中毒及地方病者ヲ診察スルトキハ明治十三年縣廳丙第五十一號達ニ準據ス

第十條 醫師ハ第三號書式ニ倣ヒ處方錄ヲ調製シ施治ノ都度詳記スヘシ

第十一條 醫師患者ニ對シテ自家藥劑購求セシムルトキハ第四號書式ニ據リ處方書ヲ

附與スヘシ

第十二條 水火盜難等ニ由リ免狀ヲ損失シタル者ハ其轉由ヲ具シ所轄郡役所ヲ經テ

縣廳出願スルモノハ第三號書式ニ倣ヒ處方錄ヲ調製シ施治ノ都度詳記スヘシ

第十三條 免狀出願書式ニ倣ヒ處方錄ヲ調製シ施治ノ都度詳記スヘシ

第十四條 免狀出願書式ニ倣ヒ處方錄ヲ調製シ施治ノ都度詳記スヘシ

第十五條 免狀出願書式ニ倣ヒ處方錄ヲ調製シ施治ノ都度詳記スヘシ

第十六條 免狀出願書式ニ倣ヒ處方錄ヲ調製シ施治ノ都度詳記スヘシ

第十七條 免狀出願書式ニ倣ヒ處方錄ヲ調製シ施治ノ都度詳記スヘシ

第十八條 免狀出願書式ニ倣ヒ處方錄ヲ調製シ施治ノ都度詳記スヘシ

第十九條 免狀出願書式ニ倣ヒ處方錄ヲ調製シ施治ノ都度詳記スヘシ

第二十條 免狀出願書式ニ倣ヒ處方錄ヲ調製シ施治ノ都度詳記スヘシ

第二十一條 免狀出願書式ニ倣ヒ處方錄ヲ調製シ施治ノ都度詳記スヘシ

第二十二條 免狀出願書式ニ倣ヒ處方錄ヲ調製シ施治ノ都度詳記スヘシ

第二十三條 免狀出願書式ニ倣ヒ處方錄ヲ調製シ施治ノ都度詳記スヘシ

第二十四條 免狀出願書式ニ倣ヒ處方錄ヲ調製シ施治ノ都度詳記スヘシ

第二十五條 免狀出願書式ニ倣ヒ處方錄ヲ調製シ施治ノ都度詳記スヘシ

第二十六條 免狀出願書式ニ倣ヒ處方錄ヲ調製シ施治ノ都度詳記スヘシ

茨城縣何國郡(町村)番地(寄留)

(戶主ニ非ル者ハ其ノ姓名) 何某父母兄弟妻子姉妹

一病名何々

氏

名

生年月何年何ヶ月

一職業(戶主ニ非ル者ニシテ本人執ル處ノ現業ナキ者ハ戶主何業ト記スヘシ)以下之ニ做フ)

一何年月日何時死亡

一未婚既婚(滿十二年以下ノ者ハ此項ヲ要セス以下之ニ做フ)

右者私施治之患者ニ候處死去候間此段及御届候也

年 月 日

何國郡(町村)番地

醫師 氏 名 印

何(町村)戶長役場

御 中

第貳號書式

死亡診按届

(用紙半紙)

表城縣何國郡(町村)番地(寄留)

族籍

(戶主ニ非ルモノハ)

何某父母兄弟妻子姉妹

一病名何々又ハ變死(死産ハ此項ヲ要セス) 氏

氏

名

一何年月日死亡又ハ死産(男女)(男女不詳ナレハ不詳ト記スヘシ) 生年月何年何ヶ月

一職業

一未婚既婚(死産ハ此項ヲ要セス)死産ノ原因ヲ詳記ス)

右者(檢診仕候)(私施療之妊婦ニ候)處前書之通相違無之此段御届候也

年 月 日

何國郡(町村)番地

醫師 氏 名 印

何(町村)戶長役場

御 中

第三號書式

處方録

(用紙美濃紙又ハ半紙)

全癒何月何日	病 名	何郡何村番地族籍
未治何月何日		職業 何之誰
死亡何月何日	初診何月何日	何年何ヶ月
徵候云々	何藥 幾量 何藥 幾量 何藥 幾量 (水幾量)	方
	右何日ノ量一日何回或ハ頓服或ハ毎何時ニ服ス或ハ外用何々又ハ轉方云々	

第四號書式

處方

一藥名

一全

右混和散丸ト内外用方詳記ス

年 月 日

附與患者

住所姓名年齡

處方

一藥名

一全

水

右溶解混和内外用方詳記ス

住所

醫師 姓

名

住所姓名年齡

(他ノ諸劑ハ以上ノ書式ニ準スヘシ)

(編者曰本文第五條中十六年乙第八十一號ハ二十二年甲第七十三號ヲ以テ廢止トナル其ノ他各條ノ達シ號ハ當該本條ニ掲載ナキモノハ改正又廢止トナリタルモノナリ)

醫師組合規約ヲ定メ醫會ヲ設ケシムヘシ

茨城縣訓令第百六號

(明治二十二年十一月八日)

郡 市 役 所

醫術ノ如キハ社會事物ノ進歩ニ從ヒ益々其日新發達ヲ要スルモノニシテ其發達日新ヲ希圖スルコトハ同業一致協和智識交換ノ益ニ由ルニ非サレハ恐クハ其目的ヲ達スル能ハサラントス願フニ同業者ノ意見モ亦將サニ是ニ外ナラサルヘシ爲メニ便宜各郡市町村ヲ聯合シ更ニ醫師組合規約ヲ定メ醫會ヲ設ケシムヘシ但組合規約制定ノ上ハ役員等縣廳ヘ開申セシムヘシ

公私立病院又ハ分支院設立廢止等届出

茨城縣令甲第三十二號

(明治廿二年四月廿五日)

自今公私立病院又ハ分支院ヲ設置セントスルトキハ其院名位置院則職員ノ住所氏名ヲ記シ届出ツヘシ其變更又ハ廢止セントスルトキハ亦同シ

○醫師免許規則

第三十五號 輪廓付 (明治十六年十月廿三日)

醫師免許規則別冊ノ通制定シ明治十七年二月一日ヨリ施行ス

但明治十五年(二月)第四號布達同年(八月)第三拾九號布告ハ此規則施行
リ廢止ス

右奉 勅旨布告候事

醫師免許規則

第一條 醫師、醫術開業試験ヲ受ケ内務卿ヨリ開業免狀ヲ得タル者トス

但此規則施行以前ニ於テ受ケタル醫術開業ノ證ハ仍ホ其効アリトス

第二條 開業免狀ヲ得ントスル者ハ試験及第證書ヲ以テ地方廳ヲ經由シテ内務省
ニ願出ツヘシ

第三條 官立及府縣立醫學校ノ卒業證書ヲ得タル者其證書ヲ以テ開業免狀ヲ得
コトヲ願出ツルトキハ内務卿ハ試験ヲ要セスシテ免狀ヲ授與スルコトアルヘシ

第四條 外國ノ大學醫學部若クハ醫學校ニ於テ卒業シタル者或ハ外國ニ於テ醫術
開業免許ヲ得タル者其卒業證書又ハ開業證書ヲ以テ開業免狀ヲ得シコトヲ願出
ツルトキハ内務卿ハ其證書ヲ審査シ試験ヲ要セスシテ免狀ヲ授與スルコトアル
ヘシ

第五條 醫師ノ乏キ地ニ於テハ府知事縣令ノ具狀ニヨリ内務卿ハ醫術開業試験ヲ
經サル者ト雖トモ其履歷ニヨリ假開業免狀ヲ授與スルコトアルヘシ

第六條 開業免狀ヲ得ルモノハ免狀下付ノ節手数料金三圓ヲ納ムヘシ

第七條 開業免狀ヲ得タル者ノ氏名本籍ハ内務省ノ醫籍ニ登錄シ時々之ヲ公告ス
ヘシ

第八條 開業免狀ヲ毀損亡失シ又ハ氏名本籍ノ變換ニ由リ免狀ノ書換ヲ願フ者ハ
其事由ヲ記シ地方廳ヲ經由シテ内務省ニ願出ツヘシ

第九條 開業免狀ノ書換ヲ願フ者ハ免狀下付ノ節手数料金壹圓ヲ納ムヘシ

第十條 醫師廢業又ハ死亡シタルトキハ地方廳ヲ經由シテ其開業免狀ヲ内務省ニ
返納スヘシ

第十一條 醫師其業ニ關シ犯罪若クハ不正ノ行爲アルトキハ中央衛生會ノ審議ヲ
經内務卿コ於テ其業ヲ停止若クハ禁止スルコトアルヘシ但其事開業免狀ヲ得ル
ノ前ニ在リト雖トモ本條ニ準シ處分スルコトアルヘシ

第十二條 前條ニ據リ醫業禁止ノ處分ヲ受ケタル者アルトキハ地方廳ニ於テ直チ
ニ其開業免狀ヲ取上ケ之ヲ内務省ニ返納スヘシ

其停止ノ處分ニ係ルモノハ幾年月日間停業シタル旨ヲ開業免狀ニ裏書シ廳印ヲ
捺シテ之ヲ本人ニ下付スヘシ